

# 観光文化

Tourism Culture



239  
October  
2018



特集

## 古書から学ぶ

[巻頭言]  
古書から学ぶこと  
神戸芸術工科大学  
西村幸夫

座談会

1 だから古書は面白い!

荒山正彦(関西学院大学)

山口誠(獨協大学)

木田拓也(武蔵野美術大学)

2 戦時下の  
国土休養地計画

(財)自然公園財団 阿部宗広

3 日本の温泉医学、  
その新時代への起点を  
古書から見つける

NPO法人健康と温泉フォーラム 合田純人

4 ホテル建築からみた  
書籍の情報と時代性

神戸女子大学 砂本文彦

5 国際観光局の10年

立教大学 千住一

視座

古書はいつもあたらしい  
インタビュ― 溝尾良隆(立教大学名誉教授)

古書をひもとく  
「尺度」をみかく  
あしがき 福永香織  
(公財)日本交通公社

コラム

復刻版の意義と課題  
不二出版株式会社 会長  
船橋 治

コラム

「100年前の観光」を観光する  
古書を活用した大学教育の実例

獨協大学 山口ゼミ

旅の図書館だより

「旅の図書館」の  
40年

大隅一志  
(公財)日本交通公社

旅の図書館は今年で開設40周年を迎えます。

開設以来、観光・旅行に関する最新の図書や雑誌に加え、明治・大正・昭和戦前期の古書や地誌、社史といった古い資料も収集してきました。

こうした古書の中には、その分野、その時代において大きな影響を与えただけでなく、現代にも通じる示唆を投げかけるものも多く存在します。また、思わぬ発見やアイデアの宝庫であることに気づかされます。

本特集では、古書を活用しながら研究を進めている先生方に、それぞれの分野の歴史を語る上で欠かせない古書や、ご自身の研究において影響を受けた古書を紹介いただいています。古書の魅力や古書から学ぶ面白さを知っていただき、古書を手取るきっかけとしていただけたら幸いです。



都市や都市計画の歴史を軸に研究してきた身として、あらためて明治・大正・昭和戦前に発行された図書・雑誌類とどう接してきたのかを振り返ってみると、「古書」に対する態度にはふたつの異なった道筋があるように思える。

ひとつは、先人の考え方の中に、現代人の思考の萌芽を見いだそうという姿勢である。私にとってその好例といえる書として、椽内吉胤(とちないよしね)著『日本都市風景』(時潮社、1934年)がある。この本は、日本の都市景観をまとめた形で論評したおそらく最初の著作である。また、三国溱や東海道の間宿などの小都市の魅力を発見した最初の書だといえる。

たとえば、三国を歩きながら、「こうした古い街に見出す一種「調和の美」といったものが果してどうした仕組みから出発して来るものであるか」ということを点検してみると、これも、将来の街を造るの工夫をする上にも重要な暗示を持ち来すものではないだろうか(P・211、新かなづかいに改めた)と述べているくだりなど、とても昭和初期の感覚とは思えない。この本は戦後、筑摩叢書の一冊として復刻された(1987年)ので、目にした読者もいるだろう。

もうひとつは、「古書」の中に、現代では久しく失われてしまった思想や活動などを見出そうというものである。忘却の淵に沈んでしまった歴史的事実を掘り起こすことによって、現在の思想や活動もまた相対化されることになる。

私にとってこの面で思い出深い書として、史蹟名勝天然記念物保存協会の機関誌として1914年から1944年まで発行された『史蹟名勝天然記念物』がある。「人為の国宝」としての天然記念物(戦後は「記念物」と表記するようになった。「史蹟」↓「史跡」と同様。)が生まれる過程や天皇関係の史蹟、いわゆる「聖蹟」が生まれてくる過程が同時代史として記録されている。

並行して『歴史地理』や『史学雑誌』など、当時の有力学会誌の会員動向の欄を読み込むと、1900年代から1910年代にかけて、日本各地で「保存会」や「保勝会」が結成され、愛郷運動が勃興していたこと、そしてその時期が鉄道の建設による地域開発のタイミングと見事に一致していたことが見えてくる。こうしたことを「古書」から学ぶことは、現代人の立ち位置を明らかにすることにつながる、まことに今日的行為なのである。

## 古書から学ぶこと



神戸芸術工科大学  
教授

西村幸夫



『史蹟名勝天然記念物』  
創刊号、  
史蹟名勝天然  
記念物保存協会、1914年



『日本都市風景』  
復刻版、  
椽内吉胤、筑摩叢書、  
1987年



巻頭言 古書から学ぶこと 神戸芸術工科大学教授 西村幸夫

特集

## 古書から学ぶ

### ① 座談会 だから古書はおもしろい!

旅行案内書から見る日本のリアル

旅行は社会が生み出したもの。旅行に関する古書を通して、私たちの社会が歩んできた姿が見える。

荒山正彦 (関西学院大学文学部教授)

山口誠 (獨協大学外国語学部交流文化学科学科教授)

木田拓也 (武蔵野美術大学造形学部教授) P 4

コラム① 木下淑夫と木下文庫

コラム② 旅行案内書の系譜

コラム③ ジャパン・ツアーリスト・ビュロー機関誌「ツアーリスト」

進行○塩谷英生(公財)日本交通公社  
大隅一志(公財)日本交通公社  
構成○福永香織(公財)日本交通公社  
編集協力○井上理江  
写真○村岡栄治

### ② 戦時下の国土休養地計画

雑誌「国立公園」と田村剛

1929年創刊の「国立公園」。今も続くこの雑誌は、田村剛の名を抜きには語れない。1942年掲載の彼の論文「国土計画と保養地」で提案された国立公園の体系は、ほぼそのままのカタチで実現している。

(二財)自然公園財団専務理事 阿部宗広

コラム④ 復刻版の意義と課題

不二出版株式会社 会長 船橋治

### ③ 日本の温泉医学、

その新時代への起点を古書から見つける

NPO法人健康と温泉フォーラム 常任理事 合田純人

『ベルツの日記』。この本は、日本人が置き忘れてきた大切な何かを考えさせる。



4

## ホテル建築からみた 書籍の情報と時代性

古書を手にとって見えてくるのは、自分の置かれた時代性だ。古書はいつも、新しい。

コラム⑤ 社史利用のススメ

神戸女子大学  
家政学部 家政学科 教授  
砂本文彦

P 24

## 5 国際観光局の10年

戦前期日本の観光政策の白眉「観光事業十年の回顧」。  
この古書から、国際観光局が置かれた状況と外客誘致への想いがわかる

立教大学  
観光学部 交流文化学科 准教授  
千住一

P 29

### 視座

古書は  
いつも  
あたららしい

インタビュー 溝尾良隆 (立教大学名誉教授)

### 古書をひもとく「尺度」をみがく

〜当館所蔵の古書2300冊から

わからないことはネットで調べる。それが悪い訳ではないが、自分の「箱」が広がらない

聞き手〇 福永香織  
大隅一志  
編集協力〇 井上理江  
写真〇 村岡栄治

P 34

あとがき

100年先でも通じる考え方のヒントを得る上で、  
古書は大きな力になってくれる。

「旅の図書館」館長  
福永香織

P 40

コラム⑥ 「100年前の観光」を観光する 獨協大学 山口ゼミ

コラム⑦ 古書の探し方

コラム⑧ (旅の図書館以外にもあります) 観光関連の古書・貴重資料を所蔵する図書館・博物館

P 46

旅の図書館だより

## 「旅の図書館」の40年

PART1 旅の図書館40年の歩み―小史―

PART2 たびとしよコレクションができるまで

PART3 旅の図書館リニューアル回想録 2014-2016背景と経緯

ジャパン・ツーリスト・ビューローの機関誌「ツーリスト」

P 60

P 55

P 54

P 47

「特集」①

荒山正彦

関西学院大学 文学部教授

座談会

山口 誠

獨協大学 外国語学部 交流文化学科教授

木田拓也

武蔵野美術大学 造形学部教授

# だから古書は

旅行案内書から見る日本のリアル

# おもしろい!

## 古書との出会い

事務局：本日お集まりいただいた先生方には、当館が所蔵する古書をご活用いただいているだけでなく、それぞれの専門のお立場から古書の多様な価値を教えてくださいました。そこで、本日は改めて古書を

進行○塩谷英生(公財)日本交通公社

大隅一志(公財)日本交通公社

構成○福永香織(公財)日本交通公社

編集協力○井上理江

写真○村岡栄治





ひもどく意義や古書から得られる示唆などについて考えてみたいと思います。まずは、最初に、先生方と古書との出会いについてお聞かせいただけますでしょうか。



**荒山**：私は大学院生の時に「近代日本の国土空間の形成」を研究テーマにしている、地理的に日本がどう認識されていたのかを考えるために、古い旅行案内書を手に入りました。旅行案内書では対象の姿がデフォルメされ魅力的に書かれているので、当時の人びとの認識がそのまま反映されているとは限りませんが、資料のひとつとして価値があると思います、関心を持ち始めました。

**山口**：私はメディア研究の出身なので、メディアとしてのガイドブックの歴史に興味があるのですが、

いま荒山先生がおっしゃったとおり、ガイドブックは観光地をよく見せる部分もあれば隠す部分もあり、その時代の旅のあり方を活写した重要な資料だと思います。これまで人々がどういう観光を欲していたかを知るには、統計など数字の資料を使うよりも、面白い視点が得られることが多いように思います。

**木田**：私は現在、美大に所属していますが、その前は美術館で長く勤務していました。工芸やデザインが専門なので、ツーリズム関連の書籍の内容というよりも、表紙やデザインなどに関心を持っています。私は日本の工芸史も研究していますが、工芸家の年譜などを見ると、昭和初期に朝鮮半島や満州を訪れたという記録がよく見られ、より詳しく内容を知りたいと思い、植民地や外地のガイドブックを探そうになりました。観光関係の古い本は印刷も今とは違って独特の風合いがあり、

広告などもすごく面白く、当時の空気感が感じられます。

## 古書からわかること

**事務局**：色々な古書をご覧になっていらっしゃると思いますが、特にご自身の研究に大きな影響を与えた一冊があればご紹介いただけますか。また、古書をひもどくことでどういったことがわかるのでしょうか。



**荒山**：およそ20年ほど前から、外地や植民地への旅行関係の資料を集めはじめました。1931（昭和6）年5月に、東京鉄道局が主催して一般に募集した朝鮮と満洲への約2週間の団体旅行があったのですが、この団体旅行の記録『鮮満の旅』を古書店で手に入れたことが、漠然とイメージしていた外地・植民地への旅行にリアリティを感じるきっかけとなりました。

『鮮満の旅』には、周遊ルートや集合写真が掲載されていたのですが、それ以上に、本の持ち主がプラ

# 荒山正彦

関西学院大学 文学部教授

大阪大学大学院文学研究科博士課程単位取得退学。専門は人文地理学、旅行の文化史。近代期の旅行案内書55点を復刻した企画『シリーズ明治 大正の旅行 旅行案内書集成 全26巻』（ゆまに書房、2013～2015年）や、ジャパン・ツーリスト・ビューローの雑誌『ツーリスト』の復刻（ゆまに書房、2017～2018年の監修と解説を行った。近著として『近代日本の旅行案内書図録』（創元社、2018年）。



『近代日本の旅行案内書図録』  
荒山正彦、創元社、2018年



『紀念スタンプ印集』  
旅行スタンプ帳 1931年

イベートで撮影したスナップ写真や、個人名がはいった「鮮満視察回遊乗車券」がはさまれていました。また後には外地や植民地を旅行した際の御朱印帳のような旅行スタンプ帳も手にしました。こうした旅行記録やスタンプ帳など、人々の旅行の痕跡みたいなものに出会った事が、その後の研究につながったと思います。

また同じ頃に、鉄道院によって編纂された全5巻からなる英文の旅行案内書 *An Official Guide to Eastern Asia* の存在を知り、その第一巻が満洲・朝鮮であることや、この第一巻の出版年が1913（大正2）年であることを知り、この時代にこうした旅行案内書がつくられていたことにある種の驚きを感じました。

木田：私は美術館に在籍していた2012年に、「越境する日本人―工芸家が夢見たアジア1910s-1945」という展覧会を企画したのですが、この時に朝鮮総督府が出した『朝鮮旅行案内』という本に出会いました。

町ごとの人口や現地の学校のことなどが書かれていて、自分のイメージする旅行ガイドとは随分違うという印象を受けました。例えば当時のソウルの40万人の人口のうち10万人が日本人となっていて、その数字の大きさにも驚きましたし、生活に関する情報も多く、そこに暮らしていた日本人の生活がとてもありアルに感じられました。

山口：私は最近、ジャパン・ツーリスト・ビューロ

ーの創始者である木下淑夫の遺稿集『国有鉄道の将来』を繰り返し読んでいます。単にお金儲けや日本のプレゼンスを上げるためにインバウンド誘致を行うのではなく、多くの人びとが世界を移動する観光の新時代に、極東アジアの国が何をすべきか、そして国際観光と民間交流はどのようなようにあるべきか、という大局的な観点に立った木下氏の思考には、今も学ぶところが多いと感じています。

# 山口 誠

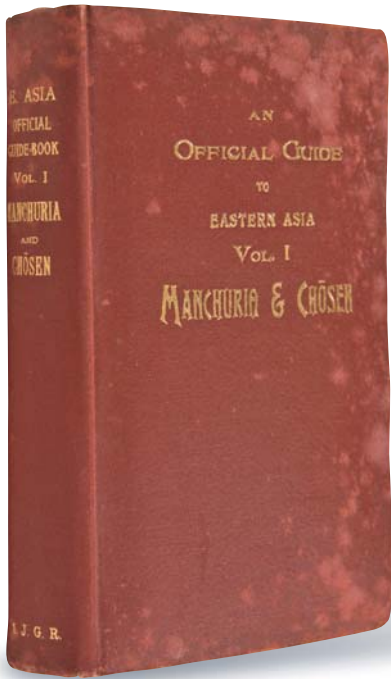
獨協大学  
外国語学部  
交流文化学科  
教授

東京大学大学院人文社会系研究科博士課程修了。博士(社会情報学)。専門は観光研究、メディア研究、歴史社会学。主な著書に『ニッポンの海外旅行』(筑摩書房、2010年)、『グアムと日本人』(吉波書店、2007年)、『英語講座の誕生』(講談社、2001年)、『地球の歩き方』(共著、新潮社、2009年)など。

『地球の歩き方』の歩き方』山口さやか/山口誠 新潮社、2009年







—An Official Guide to Eastern Asia Vol. I Manchuria & Chosen  
— 鐵道院、鐵道院 1913年

荒山先生が紹介された *An Official Guide to Eastern Asia* も、後藤新平・鐵道院總裁のもとで木下氏が制作に関わったとされる、印象深い本です。いま読み返しても、じつに詳細な情報と豊かな描写に満ちていて、驚くほど完成度の高いガイドブックだと思えます。

ちなみに同書が誕生した1913年は、ジャパン・ツーリスト・ビューローの機関誌「**ツーリスト**」が創刊された年でもあり、さらにはイギリスのジョン・マレー社から出版された英文の日本旅行案内書 *A Handbook for Travellers in Japan* の最終版が発行された年でもあります。そう考えると1913年というのは、日本の観光の歴史において意義深い年だと思えます。

**荒山**：旅行案内書が多様化したというお話に関連しますが、戦前に発行された『**南洋案内**』も興味深い内容でした。南洋協会というところが出しているの

ですが、観光旅行の話は登場せず、100%移住に関する内容でした。旅行案内書という書籍が持つている裾野の広さを感じましたね。

また、北海道や樺太、満洲への旅行案内書にもそういう傾向があり、開拓や移住、生活一般についての情報などが書かれていて、旅行という言葉が示す

イメージが現代とは違うと感じました。

**山口**：戦前はもちろん、1960年代ごろまで日本では海外移住もさかに行われていたので、今のほうが旅行や観光をめぐるイメージのサイズが、意外なほど小さくなっている。例えば3泊4日で食べて買い物をして、というイメージの海外旅行を推し進め



—「故木下淑夫君年譜」ジャパントウリストビューロー、ジャパントウリスト・ビューロー内(木下文庫)、1939年

## 「木下淑夫と木下文庫」



—木下淑夫  
(1874-1923)

木下淑夫は、日本の鉄道の近代化に大きく寄与した人物として知られています。実はジャパン・ツーリスト・ビューロー(以下、ビューロー)の生みの親でもあり、日本の観光黎明期に大きな役割を果たしました。

の低さに落胆。多くの外国人に日本を理解してもらうためには日本に来てもらうことが一番と考え、帰国後すぐに国際親善と国際経済振興の最良策として外客誘致の必要性を説いてまわり、1912(明治45)年にビューローが設立されました。

であり、利用者本位で様々な改革を成し遂げていきました。

1923(大正12)年、多くの人生涯を終えますが、木下の意思を継いだ多くの後輩たちが日本の鉄道・観光政策を担っていくことになりました。

1874(明治7)年に京都府に生まれ、大学では土木工学、大学院では法律と経済を専攻した木下は、明治32年に通信省鉄道作業局に入局しました。2度にわたる海外留学や海外で開催された鉄道連絡会議への出席などを経験し、国際感覚を養うとともに、先進的な各国の鉄道・観光事情を肌で感じていました。こうした中、諸外国の日本に対する意識

木下は観光事業においては、ビューローの設立や国立公園調査の実施、外客に向けた案内記 *An Official Guide to Eastern Asia* (全5巻)の編纂などをおこない、鉄道事業においては旅客貨物の運輸規定の改正、食堂車の開始、定期回数券の大衆化、汽車時間表の統制、特急列車の運行などをおこないました。木下は夢想家であったと同時に企画の才に富む理想家

1929(昭和4)年の7回忌には、有志によって木下文庫が設置されました。木下文庫には木下の蔵書をはじめ、ビューローの初代監事である生野團六や国際観光局初代局長の新井堯爾などの蔵書なども収蔵されましたが、残念ながら太平洋戦争でその多くが散逸したとされています。当館では90冊ほどの古書を木下文庫として受け継いでいます。

# 木田拓也

武蔵野美術大学  
造形学部教授



早稲田大学第一文学部卒業後、佐倉市立美術館学芸員、東京国立近代美術館工芸課主任研究員などを経て現職。博士(文学)。主な著書として『工芸とナショナルリズムの現代「日本的なもの」の創出』(吉川弘文館・2014年)、『日本の20世紀芸術』(共著・平凡社・2014年)、『近代日本デザイン史』(共著・美学出版・2006年)などがある。これまでに担当した企画展は「東京オリンピック1964 デザインプロジェクト」(2013年)、「ようこそ日本へ…1920-30年代のツーリズムとデザイン」(2016年)など多数。



『ようこそ日本へ…1920-30年代のツーリズムとデザイン』  
東京国立近代美術館編(木田拓也)、  
東京国立近代美術館、2016年

るガイドブックが主流になって久しいですが、しかし昔は長く旅するという意味での移住があり、また数年かけて海外をめぐる長期旅行もありました。そういうことも古書は教えてくれますね。

**荒山**：『A Handbook for Travelers in Japan』でも、前半には日本のさまざまな情報が記載されています。旅行案内と言いつつ、かなり長期間にわたって日本に滞在する外国人にも役立つ内容になっています。

先ほど、木田先生から『朝鮮旅行案内』に人口の情報が載せられていたというお話がありました。現在の旅行案内書では旅行先の人口などが書かれてあることはあまりないと思います。しかし戦前のある時期まで、旅行案内書は地誌の役割も果たしていたんですね。現代の旅行案内書よりも、もう少し客観的に地域の状況が書かれていたと思います。

## 古書を取り巻く環境

日本の観光の成り立ちや

現在地点をクリティカルに問う歴史研究を

どう社会に還元するか

**事務局**：なるほど、日本の観光の黎明期における地域の状況や、旅行形態、観光政策などがリアルにわかる訳ですね。一方で、こうした日本の観光史はまだまだ知られていない部分も多いと思います。古書という性格上、閲覧できる環境が少ないことも一因でしょうか。

**荒山**：ここ20年間ぐらい、旅行に関する古書資料を集めてきた経験からすると、インターネットが発達したおかげで、今は非常に手に入りやすくなりました。古書店を回って1点ずつ資料を集めていた時代に比べると、格段に便利になりました。もちろんこれは旅行史の研究に限りません。あらゆる学問分野において古書資料を用いる研究の環境は向上しましたし、日本にいながら外国の古書店の本や資料も買いやすくなっています。

**山口**：その反面、私が常々感じているのが、古いガイドブックなど観光系の古書はすぐ廃棄され、長期保存されにくい面があるということです。

**荒山**：一般的に旅行案内書は、情報が新鮮でない商品価値が下がるので毎年のように更新されますね。消費者にとっては過去のもは価値が低いのかも知れませんが、研究資料としては情報が新鮮でなくてもいいのです。

**山口**：確かに古いガイドブックは、単体では価値が定まりませんが、過去から欠かさず全部揃ったコレクションになると、観光史などを研究する上で、劇的に利用価値が高まると思います。

**事務局**：2年前に当館が南青山に移転し、開館1年目で閲覧が多い資料の上位は、圧倒的にガイドブックの「るるぶ」です。とは言え、最新号を見に来ている人がたくさんいるのではなく、一人で同じ地域の「るるぶ」を何年分かに渡ってまとめて閲覧するケースが多いです。おそらく学生が研究対象として利用しているのだと思います。

**山口**：その事実は非常に重要だと思えます。旅の図書館のような専門図書館や、発行元には、過去に発行されたガイドブックをぜひ保存していただきたいですね。2020年に向けて東京オリンピック・パラリンピックに関する印刷物の配布もはじまっていますが、それらを保存しておくことも必要だと思います。

**木田**：私は観光学という存在を長く知らず、「ようこそ日本へ…1920-30年代のツーリズムとデザイン」という展覧会を2016年に企画した時に、初めてそういう研究領域があることを知りました。

グラフィックデザインの世界では、日本の観光イメージを扱ったポスターや国際観光局が発行した *TRAVEL IN JAPAN* という雑誌などに、そうそうたるデザイナーが関わっています。観光は予算が相対つき込まれた領域であり、新しい実験的な試みも行われていて、当時のデザイナーにとって観光が大きな仕事だったことは、有名デザイナーたちの関わり方で感じますね。

それらの事実を、観光という軸で統合する視点がそれまでの私にはまったくなかったのですが、観光史という観点で眺め返してみると、改めて見えてくるものがあると思います。

**荒山**：観光史の研究は歴史学の一部門かもしれませんが、観光や旅行は歴史研究の中では十分になされてこなかったように思います。地理学にも観光地理学という分野がありますが、どちらかというと観光地形形成などの研究が主流で、旅行や観光の歴史そのものに注目した地理学研究はとて少ないように思えます。旅行案内書の資料的な価値も、必ずしも高く評価されてきたわけではありません。

**山口**：まったくそのとおりで、日本政府が観光立国を掲げ、民間でもこれだけ観光が注目される中、そろそろ日本の観光の成り立ちや現在地点をクリティカルに問う歴史研究や、その社会還元の方法を、しっかり考えていかねばならないと思いますね。



## 旅行案内書の変遷にみる 社会の変化

**事務局**：1つの旅行案内書を経年で揃えておくことも重要ですが、時代を追ってさまざまな形態の旅行案内書を概観すると、当時の地域の状況や旅行形態以外にもさまざまなことが見えてきますよね。



**荒山**：古い旅行案内書を手にしてまず感じるのは、1冊の案内書を作るために非常に手間がかけられているということ。これもやはり旅行に限らず、印刷出版物の持っていた価値や意味が今より大きかったのだと感じます。

**木田**：今の観光の印刷物などは写真が主体ですが、戦前はイラストが中心です。描かれているのは、富士山や桜などおさまりの題材が多いですが、写真を見慣れた今の学生から見ると、イラストで日本の観光イメージを作ることが新鮮に映るようです。

特にポスターに関しては、今は4色のオフセット印刷が主流ですが、当時は日本画のような色合いを出すために16枚も版を使用して工夫を凝らすなど、相当のお金と時間をかけていますね。その一方で載せる情報量は限られ、「JAPAN」という文字しか書かれていなかったりしますが、インパクトはとも強いです。

**荒山**：例えば江戸時代によくみられた道中記は、現在も存在するマニュアル的な旅行ガイドにあたる

と思います。書かれている情報量は少ないかもしれませんが、宿泊や飲食の場所、次の宿場までの距離など具体的な情報が書かれています。

一方で、1830年代に製作された歌川広重の『東海道五十三次』や葛飾北斎の『富嶽三十六景』などの木版風景画は、現代の風景写真集のように、旅行のイメージを喚起し誘うメディアとして普及していたと思います。木版印刷は非常に手間がかかるもので、明治初期には銅版印刷が普及し、明治20年代ぐらいからは活版印刷が一般的になって、旅行案内書も大きく変わります。

**山口**：テレビもインターネットもなかった時代、ポスターや印刷物の影響力は大きかったと思いますし、荒山先生がおっしゃるように、旅行メディアにマニュアル型とイメージ喚起型の2種類があるという系譜は、江戸時代から現在まで連続している側面があると思います。

**荒山**：そうした基本は変わらないのですが、明治期に鉄道が登場して旅行にも鉄道が使われるようになると、旅行そのものや旅行案内書には大きな変化をもたらされます。移動する人の数が圧倒的に増え、大幅に移動時間が短縮され、しかも旅行費用が安くなった。鉄道の出現によって旅行する母集団が増え、旅行の質とマニュアル的な旅行ガイドもイメージ喚起をするメディアも、その内容が大きく変わったと考えられます。

**山口**：それまでは移動するプロセスも旅行の大きな要素だったのが、鉄道の出現によって移動時間が大

幅に短縮され、目的地で過ごせる時間が長くなりました。

それに伴って、「行った先で何をするか」がより重要視されるようになったと思います。移動のかわち、つまりモビリティの変化が、旅行の質や形をシフトチェンジさせていったと言えますね。

旅行メディアについても、鉄道の出現によって道中記的なマニュアルがいわば複雑化して、観光スポットや食事、宿泊など行った先で何をするかについて紙幅を割くガイドブックが現れ、ある時期から種類や数も大きく増えたと思います。

## 古書から得られる示唆を 現代にどう活かすか

### 発想の転換や新たな価値を 創造するための古書

**事務局**：古書の魅力や面白さを、さまざまな角度からお話いただきました。古書から今なお学べることも多いと思いますが、そうした側面を現代でどう生かしていけばよいでしょうか。活用の方法や可能性についてお考えをお聞かせください。



**山口**：例えば、今のインバウンド政策がこれで良いのだろうかと考える際に、日本のインバウンド誘致の原点である、100年前の喜賓会の姿勢をひもと



# 「旅行案内書の系譜」

我が国の旅行案内書のルーツは江戸時代にあるといえます。徒歩での旅行がメインであった江戸時代は、街道図や街道沿いの名所、宿場の場所、名物、距離などを記した「道中記」や、名所を図で表した「名所図会」が旅行案内書の役割を担っていました。

1880年〜1900年頃にかけて全国の鉄道網が整備されると、『**鉄道院線沿道遊覧地案内**』や『**鉄道旅行案内**』に代表される旅行案内書を私鉄や国が発行します。さらには、満州や樺太を案内したのも日本語で多く出版された他、大阪商船や日本郵船などの船舶会社によって、大陸や世界一周を旅行する案内書が出版されました。

1894年に日本初の時刻表である『**汽車汽船旅行案内**』（庚寅新誌社）が発売されると、時刻表も旅行案内書の役割を果たすようになります。

ところで、世界中の旅行者が熱い信頼を寄せていたのが、ドイツのペデカー社やイギリスのマレー社のガイドブックでした。日本でもこれらを意識し、10年の歳月をかけてAn

*Official guide to Eastern Asia* (鉄道院、1913年)全5巻を制作したほか、1929年には鉄道省が総力をあげて『**日本案内記**』(全8編)を発行しました。

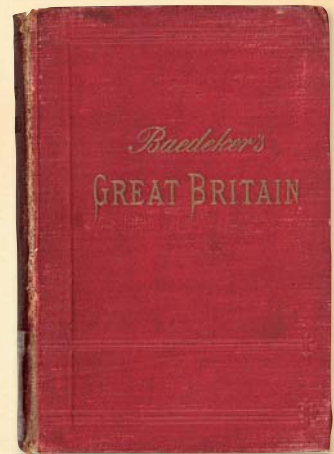
1912(大正2)年にジャパン・ツーリスト・ビューローが設立されると、翌年に機関誌『**ツーリスト**』を発行しますが、同誌の付録版として出された避暑地紹介が好評を博したため、避暑のみならず四季を通じて一般旅客のための旅行案内書として『**旅程と費用概算**』(1920年〜1940年)を出版しました。当時、一般的な旅行案内書が美文調だったのに対し、目的地への交通手段と費用、時間、旅程案がわかりやすく正確に記載された様式が広く受け入れられました。その後、ほぼ毎年増補改訂され、1939(昭和14)年には1000ページを超える大著となったため、地域別に分割した『**ツーリスト案内叢書**』(のち『**東亜旅行叢書**』)↓『**旅行叢書**』に引き継がれ、戦後の『**新旅行案内**』『**最新旅行案内**』『**ポケットガイド**]へと継承されていきました。



「**鉄道旅行案内**」  
鉄道省、1921年



「**旅程と費用概算**」  
ジャパン・ツーリスト・ビューロー、1928年

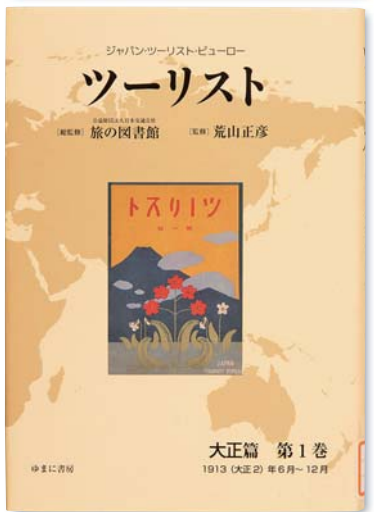


GREAT BRITAIN, KARL  
BAEDEKER, 1910年





『国有鉄道の将来』木下淑夫、1924年



『ツーリスト』  
(復刻版 第1期 大正篇)  
荒山正彦 監修  
ゆまに書房、2017年

くことも意味があるかと思えます。先日、私のゼミ生が「喜賓会の英文ガイドブックからインバウンドの価値を考える」というテーマの研究をしましたが、当時の訪日客に向けた興味深いサービスや商品やホテルなどの情報が満載でした。なかには、いまもあれば面白いのには、と思うような「消えてしまったNIPPON」があったり、また観光スポットとして芝公園や東京帝国大などが紹介されていたり、今のインバウンド振興とは随分違うなど。

**木田**：戦前にはインバウンド誘致のために多くの観光ポスターが作られました。外国人に観光に来てほしいというのも当然あると思いますが、それだけでなく、日本という国の対外的なイメージ作りという要素もかなり大きく、だからこそ、いろいろなデザインナーが関わって力を入れていたのだと思います。こうした観光に関するイメージづくりは、実は直接旅行に関わらない部分も大きいと思います。日本人が対外的に自分のイメージをどう思い描いてほし

いかという「自画像作り」という面もあったのではないのでしょうか。

また、こういうポスターが直接訴えているわけではありませんが、観光や旅行は平和であつてこそ楽しめるものなので、いかに戦争を回避するかという願いもそこにはこめられていたと思います。

**山口**：自画像という言葉は素晴らしい視点ですね。当時はある種、グローバルな移動体験に対する公共同心みたいなものがあり、移動する者を支える精神と、移動することに対する寛容心が、今とは違うレベルで存在していたと思います。

世界最初の近代的な旅行会社と言われるトーマス・クック社も、公心から観光を組織し、ツーリストを支えていたことが知られています。さきほど話に出た木下淑夫も、海外留学中にそうした欧米の精神に感銘を受けたようで、1912年にジャパン・ツーリスト・ビューローを創設した時、「移動する者に寛容であれ」という言葉を残しています。

**荒山**：そもそも旅行や観光は独立して歴史を歩んできたわけではありません。例えば鉄道の誕生や印刷技術の近代化、あるいは写真の登場などによって旅行のスタイルは影響を受け、時代とともに変化してきました。旅行は私たちの社会が生み出したものであるからこそ、旅行の歴史を考えることは私たちの社会がどう歩んで来たかを考えることに他なりません。したがって、旅行に関連する古書資料を通して、私たちの社会が歩んできた姿そのものが見えると思っています。

**山口**：インバウンド誘致についても、現在ある形が最善でもなければ唯一でもありません。日本は1000年前からインバウンド誘致を行っており、近代日本の観光はインバウンドから出発したと言えます。

そういう意味では、喜賓会のガイドブックや木下淑夫の遺稿集などは、改めてインバウンドについて考える材料になると思います。オーセンティックな日本を見せるだけでなく、訪れる側と受け入れる側の間で新しい価値を創出するインバウンド誘致があつてもいいと思いますし、発想の転換や新たな価値を創造するのに、こうした古書が役立つのではないのでしょうか。

また、私は最近、「観光を観光する」ということを、ツーリズム・リテラシーの実践の一つとして考えています。例えばイザベラ・バードの経験した日本旅行の足跡を辿ったり、明治・大正・昭和期のガイドブックを片手に観光地を訪れてみたり、他者が行った観光や過去に行われた観光を体験するというこ

とです。他人の旅を体験することは新しい考え方ではなく、松尾芭蕉の足跡を小林一茶が辿った例などがあります。

そうして「観光を観光する」ことで、今ある自分の人生を相対化でき、新たな発見も生まれます。「観光＝消費」では決してなく、そうしたきっかけとなるのが観光の一つの役割であり、そこで役立つのが古書ではないかと思えます。

また、各地域も最近はいろいろな形でストーリーを編み出そうとされていますが、歴史からそれぞれの個性を掘り起こすというのは大事です。やはり、古書からそうしたヒントが得られるのではないかと思えます。

## 今後の旅の図書館への期待

### 旅行・観光に関する知の集積拠点、 「通訳者」としての役割



**事務局**：それでは最後に、今後の旅の図書館への期待や求められる役割についてお聞かせください。

**山口**：機関誌「ツーリスト」が復刻したのは、荒山先生と旅の図書館の大きな功績だと思います。過去のガイドブックが復刻されたり、データベース化されることでいろいろな研究ができるので、古書の可能性を考えると、そのように環境整備するという仕事も大変重要だと強く感じています。

**荒山**：旅の図書館に対しては、旅行に関する知が集結している場、アーカイブズになってほしいと思います。今までそういう場がなかったのですが、求めている人たちはたくさんいると思います。

トーマス・クック社の資料室 Thomas Cook Archives がイギリスのピーターバラという町にあります。そういった海外のアーカイブズとの積極的な提携を期待しています。

**山口**：先ほど木田先生が「自画像」とおっしゃいましたが、ジャパン・ツーリスト・ビューローの創始者であり、日本の近代観光に深く関わった木下淑夫のさまざまな資料をアーカイブ化することが、旅の図書館の描くべき自画像ではないかと思えます。実現すれば、新たな観光のアイデアが出てくる宝庫になるのではないのでしょうか。

**木田**：本や雑誌は図書館などできちんと保存されますが、書籍や定期刊行物に属さない観光関連のチラシやカタログ、絵はがき、映像などは、当時を知るのに非常にいい資料です。しかし、今のところコレクションに頼るしかなく、探すのが難しいという現状があります。図書館という名前に縛られず、観光に関わるいろいろなものが集まる受け皿のような役割を果たしていただけると素晴らしいと思います。

**荒山**：実物の古書にふれられる場であることも重要です。復刻版の意味も大きいのですが、やはり原本を手にして、木田先生がおっしゃるように表紙の色合いを見たり、紙の質感を感じることが大事だと思います。

**事務局**：当館に来る学生さんからは、古書を見るのが楽しいという声を聞きます。

**山口**：最初は反応が悪くても、ちゃんと価値を伝えてから現物に触れてもらえば、おそらく学生たちは楽しいと感じてくれると思います。やはり学生には古書の実物を見せないと教育にならないですね。私も学生達には「図書館で古書を1ページでもめくって、ちゃんと実物を見て」と言っています。

一方、古書のなかには読み解くのにプロフェッショナルな技術や学術的な訓練が必要なものもあります。その価値をうまく伝えられる方法を考えないと、観光の学術と現場の間の乖離が激しくなってしまうという危惧もあります。現代の人たちにも理解してもらえような「通訳者」がいればいいのですが、古書をきちんと再評価して、どういう面白さがあるのかを伝えることを専門とするガイドブックやイベントや学芸員など必要かもしれませんね。

**事務局**：古書の魅力や可能性について、示唆に富んだお話をいただき、ありがとうございます。現代につながるヒントがたくさんあり、今後の観光政策に生かすためにも、古書の魅力をかみくだいて広く伝えることが大事だと感じています。これから旅の図書館が所蔵する豊富な一次資料をどう活用するか、本格的に検討する時期に来ていると思います。先生方や他の専門図書館などとネットワークを作りながら、一緒に取り組みを進めていければと思います。





「ツーリスト」創刊号

ジャパン・ツーリスト・ビューロー  
機関誌  
「ツーリスト」

「ツーリスト」は国内外が提携して

「ツーリスト」は国内外が提携して世界のツーリスト事業の発展を期し、国際親善を図ることを目的としたもので、ツーリストビジネスを促進するための論説やビューロー本部・支部などの業務報告、外客の来訪状況、各地の遊覧案内などが掲載されました。

創刊当時の編集体制は、ビューローの初代監事であった生野團六が編

集長をつとめ、

非水が担当しました。両氏は「JAP AN」と「ツーリスト」が縁となり、ビューローの発行物に大きく関わっていきこととなります。正確な内容と質の高い英文は誰からも信頼され、ビューロー刊行物の伝統の基礎が築かれました。

第3号からは英文欄が追加され、ビューロー会員のほか、国内外のホテルや自治体、商工会議所、大使館、新聞社、旅行会社、各協会などに配布されました。1916(大正5)年には編集方針を見直し、会報誌としての性格から、趣味と実益を兼ね備えた研究誌的な方向に重点が置かれました。1919(大正8)年夏からは東宮殿下にも献本したとの記録が残っています。

や偏見がありました。ビューローの

1936(昭和11)年7月には日本語の記事を雑誌「旅」に併合し、ツーリストは英文誌となりました。その後、1941(昭和16)年5月「ツーリスト・エンド・トラベル・ニュース」と改題しますが、太平洋戦争のさなかに廃刊となりました。

「ツーリスト」は1910年代から1930年代にかけての観光史をひもとくことができる資料として多くの研究者に活用されており、旅の図書館では1924年創刊の雑誌「旅」とあわせてデータでご覧いただけます。

また、2017年からはゆまに書房より「ツーリスト」復刻版が順次発行されています。

参考文献



「旅の文化誌」ガイドブックと時刻表と旅行者たち」中川浩「伝統と現代社、1979年



「国鉄興隆時代 木下運輸二十年」日本交通協会 日本交通協会、1957年





# 戦時下の 国土休養地 計画

雑誌「国立公園」と田村剛

一般財団法人自然公園財団代表理事(専務理事)

阿部宗広

## 国立公園協会、 「国立公園」と田村剛

1927年(昭和2年)12月、国立公園の誕生とその健全な発達を期すことを目的に国立公園協会が設立された。設立時の役員には、貴族院議員・侯爵

細川護立を会長に政・官・学及び経済界の要人が名を連ねた。その1年あまり後の1929年(昭和4年)3月、協会の機関誌として「**国立公園**」が創刊された。以来戦争中の誌名変更と4年間の休刊はあったが、現在まで89年にわたり発行され続け、昨年通算8000号を超えた(時期によって号数の付け方が

変わったため、現在の号数とは異なる)。その機関誌に創刊当初から深く関わり続けた人が田村剛である。田村は1890年(明治23年)生まれ、1915年(大正4年)に東京帝国大学林学科を卒業、その3年後に東京帝国大学農学部講師となった。1920年(大正9年)に内務省の嘱託となり(同年林学博



「国立公園」創刊号  
国立公園協会、1929年。表紙画…石井柏亭



田村剛  
(「国立公園」1979年11月号  
No.360、10頁より)



阿部宗広  
(あへ・むねひろ)  
東京生まれ。一般財団法人自然公園財団専務理事。1977年東京大学農学部林学科卒業。同年環境庁入庁。中部山岳、伊勢志摩、支笏洞爺などの国立公園で現地職員(レンジャー)として勤務。環境省自然環境計画課長などを経て2008年関東地方環境事務所長。2010年退官。2012年から現職。

士)、当時まだ確立されていなかった日本の国立公園制度の検討・設計、国立公園候補地の現地調査・資料収集などに携わり、「国立公園の父」といわれている。国立公園協会には当初から設立発起人、常務理事として参画し、「国立公園」の編集も担った。

## 「国立公園」との出会い

私が初めて国立公園誌に出会ったのは今から40年余り前、大学で自然公園や景観について学んでいた頃である。同誌は自然公園行政の動きや自然景観に関わる研究を知るための身近な参考書だった。

「古書」としての国立公園誌を、創刊号から戦争で休刊となる1944年(昭和19年)6月に発行されたものまでと考えると合計133冊になる。ただし、最後の2年は、「国立公園協会は「国土健民会」と、「国立公園」は「国土と健民」と改称し9冊発行している。これらとの出会いは、学生時から36年ほど後の2012年(平成24年)になる。諸般の事情で解散する国立公園協会に代わり、自然公園財団が発行を引き継ぐことになった。歴史ある国立公

園誌を絶やしたくないという双方の思いからだ。協会から譲り受けたバックナンバーは創刊号から全号が揃い、国立公園の歴史・記録が詰まっていた。

## 「国立公園」の内容と田村剛

創刊号の編集後記を田村が書いており、今後掲載したい内容として以下を列挙している。

- 国立公園の使命政策行政
- 公園の自然界や野外休養に関する研究
- 公園の技術的方面の記述、実地に関する資料
- 海外国立公園の状況
- 我が国国立公園運動の現況
- 国有林、県立公園、一般風景地保養地
- 公園、風景地の遊覧客に関するツーリスト事情
- 地方風景を紹介する写真

実際に発行された同誌の内容でいま最も興味深く、参考になるのが、国立公園のあるべき姿やその実現方策など

に関する論説である。公園の保護と利用のあり方、他省庁の事業や民間産業との調整、管理や整備にかかる費用、選定の方針などなど、白紙の状態から生みだし、形作って行く過程や当時の関係者が何を考えていたのかを垣間見ることができる。

一方、記事数が一番多いのは、候補地や指定後の公園の景観、地形、動植物などの紹介や学術的な解説、景勝地の紹介、紀行などである。大判の写真もふんだんに使われ、往時の姿を知ることができる。また海外、特にアメリカの国立公園の紹介記事も多い。1931年(昭和6年)の国立公園法制定後は法律の内容やその運用、公園の施設などに関する解説記事が増えてくる。

執筆者は、当時国立公園を担当していた内務省を始めとする政府関係者の他、林学、地理学、考古学など各分野の学者、鉄道、舟運、宿泊、旅行業といった関係業界や経済団体のトップなど極めて多彩であった。その中で記事数がぬきんでて多いのが田村だった。その数は、創刊から戦争で休刊するまでの16年間で77本、戦後を含めれば1977年(昭和52年)まで160本を超える。内容は国立公園に関する

様々な論説や内外の国立公園の紹介など広範にわたる。編集者として執筆者や内容の決定に深く関わりながら、自らの論を世に問い、檄を飛ばす。国立公園誌は田村剛の雑誌だったと言っても過言ではないと思う。

## 「国土計画と休養地」

田村の論説の中で特に紹介したいものとして、1942年(昭和17年)に4回にわたり連載された「国土計画と休養地」がある。端的に言えば、日本の国土全体における国立公園を含む野外レクリエーション地の整備・配置計画であるが、68頁、約12万字、新書になるほどの大論文である。

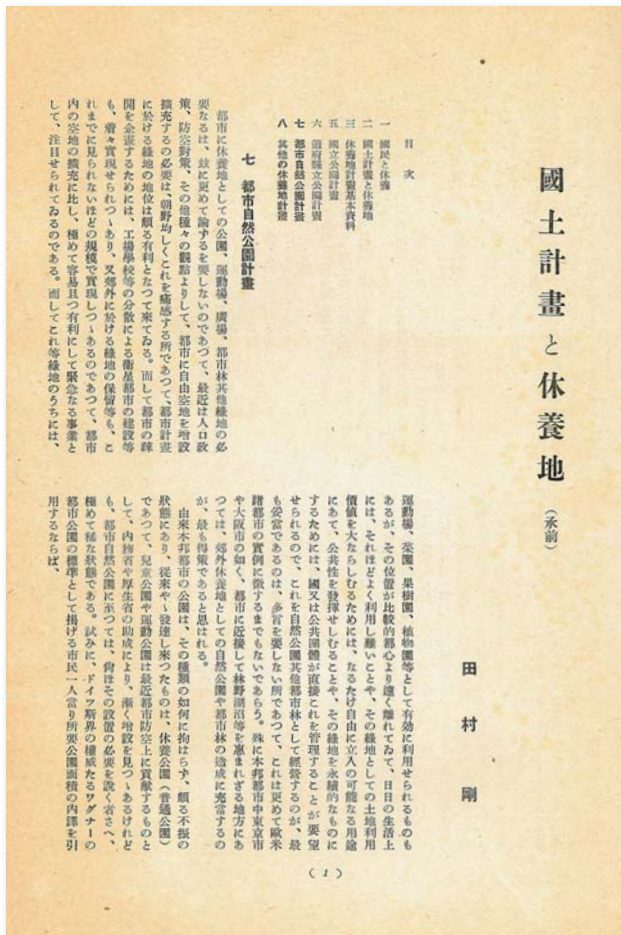
この論文の背景として、政府における国土計画策定の動きがあった。1940年(昭和15年)9月、政府は国土計画設定要綱を閣議決定した。国防国家態勢の強化を目標とした国土の総合的利用開発の計画で、鉱工業、農林畜水産業の配分、交通、動力、治山治水・利水、人口配分などの計画を策定するものであった。この動きに田村は素早く反応し、同年の11・12月合併号の巻頭に「国土計画と国立公園」と

いう小文を掲載した。田村の主張は、国土計画の樹立に当たり、国立公園、道府県立公園などを予め計画に位置づけ、適地を産業その他の利用から保留しておくのが急務であること。国民大衆の利用を考えれば、国際観光の見地を尊重した既指定の12公園にさらに増設して分布の適正を図る必要があること。公園の代用となり得る国有林、公有林、公有水面も考慮すべきであること、といったものであった。

るのにそれだけの時間と作業が必要だったということだろう。論文は以下の8章で構成されている。

- 1 国民と休養
- 2 国土計画と休養地
- 3 休養地計画基本資料
- 4 休養地利用に関する資料
- 5 国立公園計画
- 6 道府県立公園計画
- 7 都市自然公園計画
- 8 その他の休養地計画

「国土計画と休養地」田村剛1942年（国立公園）第14巻第4号、1942年



### 国土計画と休養地

(承前)

田村 剛

- 目次
- 一 国民と休養
  - 二 国土計画と休養地
  - 三 休養地計画基本資料
  - 四 休養地利用に関する資料
  - 五 国立公園計画
  - 六 道府県立公園計画
  - 七 都市自然公園計画
  - 八 その他の休養地計画
- 七 都市自然公園計画
- 都市に休養地としての公園、運動場、廣場、都市林其の他休養地の必要なるは、法に規定せしむるを要しないのであつて、最近は人口増加、防空対策、その他種々の動機よりして、都市に自由空地を増設擴充するの必要は、個野均しくこれを感得する所であつて、都市計画に於ける休養地の地位は、顯るの利益となつて來てゐる。而して都市の展開を促進するためには、工場集積等の分散による衛星都市の建設等も、著しき實現されつゝあり、又郊外に於ける休養地の保存等も、これまでに見られないほどの規模實現しつゝあるのであつて、都市内の空地の擴充に比し、極めて容易且つ有利にして緊急なる事業として、注目されてゐるのである。而してこれ等休養地のうちには、

運動場、公園、果樹園、植物園等として有効に利用せられるものがあるが、その位置が比較的静謐より遠く離れてゐて、日目の生活上には、それほどよく利用し難いことや、その緑地としての土地利用價值を大ならしむるためには、なる存自由に入りの可能な用途に於て、公共性を發せしむることや、その維持を永続的なものにすためには、國又は公共團體が直接これを管理することが必要せられるので、これを自然公園其他都市林として經營するが、最も妥當であるのは、多量を要しない所であつて、これは更めて歐美諸都市の實例に徴するまでもないであらう。殊に本邦都市中東立市や大坂市の如く、都市に近接して林野沼澤等を惠まれる地方にあつては、郊外休養地としての自然公園や都市林の建設に充當するものが、最も得策であると思はれる。

由來本邦都市の公園は、その種類の如何に拘はらず、頗る不揃の狀態にあり、従來より發達したものは、休養公園（普通公園）であつて、児童公園や運動公園は最近都市計画上に賞するものと見、内務省や厚生省の補助により、漸く増設見つけられるが、都市自然公園に於ては、尙ほその設置の必要を説く者も、極めて稀な状態である。試みに、ドイツ聯邦の權威あるヴァナ1の都市公園の標準として掲げる市民一人當り所要公園面積の内譯を引用するならば、

(1)

〔1、2章〕では一國の国防、産業、文化、厚生対策において休養問題も重要な意味を持ち、休養地を国土計画に位置づける必要があると主張している。

〔3章〕では休養地計画を検討するにあたって考慮すべき要件として、休養地の立地条件により異なる利用適期・期間、利用地点の収容力、利用者の誘致範囲、都市との位置関係、交通機関の状況などに加え、国民の家計や休暇制度を挙げ、分析を加えている。

〔4章〕では職業、学齡など国民各層の人口分布や旅行の実態、觀光地の利用の現状、交通機関の利用状況などを分析し、休養地利用に関する以下の数値などを推定している。

**国民の休養地利用回数**：年間1人あたり1・2回

**休養地の誘致圏**：日帰り旅行圏40キロ、宿泊旅行圏120キロ

**休養地の利用の年間変化**：一季型（大雪山など）～四季型（白浜温泉など）

**利用者数の今後の伸び**：15%/年 10年後4倍、20年後16倍

\*戦争の影響で減少し現況回復に10年要するとすれば、その後毎年15%増で、20年後に4倍、年増加率に換算すると7%

〔5章〕はこの論文の眼目とする部分であり、最も多くの誌面を割いている。まず、これまで自然条件で厳選したため遠隔地になりがちであった国立公園を国民大衆の利用しやすいものとするため、選定に際し地方ごとの人口配分の現状と将来予測に関する考察を追加すると述べている。また、非常時下の休止停滞を考慮して計画期間を20年とすること、人口に基づく国立公園の必要量を求め国立公園系統樹立の一般標準を定めることとしている。

これらの基本的な考え方の下に、1940年を基準年とし、20年後の1960年に必要な国立公園の面積は200万haで国土の5%、数は20箇所になるとしている（表1）。

次に全国を北海道から九州までの7地方に分け、各地方の20年後の人口、国立公園の利用者数を推計し、これを基に国立公園の地域配分を検討している。検討に当たつての方針は以下の4点である。

- ① 全国民が一泊程度で利用しうる範囲に国立公園を配置する
- ② 公園の中心から120キロを利用圏（一泊休養圏）とする
- ③ 一泊休養圏で全国をカバーすること

を基本とする

表 ① 20年後の国立公園の必要箇所数と面積

	1940年現在	1960年現在
人口	73,000,000人	96,000,000人
国立公園面積	1,000,000ha	2,000,000ha
国立公園対国土面積比	2.60%	5.30%
人口一人当たり 国立公園面積	137㎡	208㎡

※人口9600万人、国立公園利用率25%⇒公園利用者数2400万人(現況の4倍)  
 ※国立公園1箇所当たりの面積10万ha、利用者数100万人/年とすると、  
 国立公園の必要量は24箇所、240万ha  
 ※関東以南は適地が少ないため、20箇所、200万haを目標として設定すると、  
 一人当たりの国立公園面積200㎡、国土面積(38万km<sup>2</sup>)の5%となる

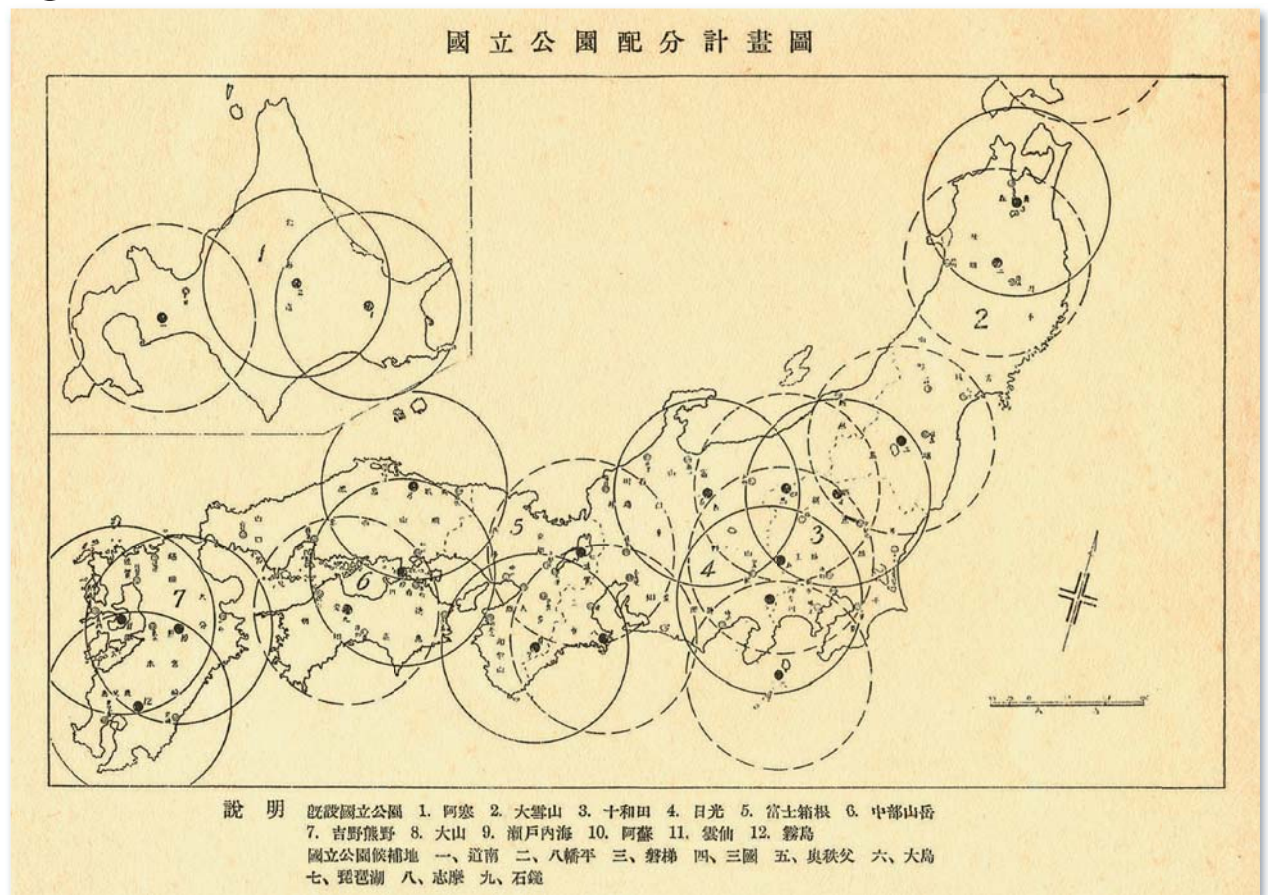
表 ② 休養地計画総括表

種別	面積(ha)	対国土比	人口 一人当たり 面積(㎡)
公園及び休養地	4,630,400	12.20	482
公園	2,230,400	5.90	232
国立公園	2,000,000	5.30	208
道府県立公園	172,800	0.45	18
市立公園	57,600	0.15	6
休養地	2,400,000	6.30	250
御料林	150,000	0.39	16
国有林	1,000,000	2.63	104
その他国有地	100,000	0.26	10
府道県有林	790,000	2.08	82
市有林	60,000	0.16	6
社寺及び私有地	150,000	0.39	16
社寺林及び私有林	150,000	0.39	16

④公園の収容力を考慮し、人工稠密地方では休養圏が重なるように公園を配置する  
 この結果、既存の12公園に加え今後9公園を新設することが必要という結論を導き出している(図1)。  
 【6、7、8章】では地方公園(道府県立公園)、都市自然公園、その他の休養地の国土計画への位置づけの必要性を説き、それぞれの必要量を算出している。  
 最後に、これら全てを合わせて国土全

体で463万haの休養地が必要になると結論づけている(表2)。  
 この論文を読んで驚いたのは、国土の国立公園体系をおそらく我が国で初めて具体的に提案していること、そして結果としてほぼそのとおりに実現していることである。新設すべきとした9公園は、1946年(昭和21年)の伊勢志摩から始まって1956(昭和31年)までにすべて指定された(うち3つは国定公園)。国立公園の数は1960年(昭和35年)に目標どおり20と

図 ① 国立公園配分計画図 (「国立公園」第14巻第2号、1942年、24頁より)



※図中の1~7の数字は、北海道~九州の7地方を表している

なり、面積は1964年（昭和39年）に196万haとほぼ計画を達成し、その後20年余にわたり200万haから202万haで推移した。

所管外の国有林や県有林、都市自然

公園なども含めて論じたのは、「休養地」でひとくくりにする事で国立公園の孤立を避ける意図もあったのではと思うのは見当違いだろうか。政府も国民も戦争一色に染まる中で、

国立公園の存在が打ち捨てられることは絶対に避けたいという田村の強い思い、したたかさが感じられる論文である。

復刻版『国立公園』の企画がスタートしたのはちょうど2000年のことである。発行元が存続する史料を復刻するには、その許可を得ることを前提で事を進めなければならぬ。そこで当時の国立公園協会に復刻の打診をしたところ、残念ながら許可はおりなかった。しかし諦めず、時期をおいて2008年に再度申請したところ、戦前の刊行分までということでは解を得るにいった。

弊社が復刻した『国立公園』は創刊の昭和4年から『国土と健民』と改題された昭和19年までのものを対象としてある。新聞・雑誌はその時代の特色を反映するものであり、創刊から終刊までの変化を通覧する作業は、

歴史研究には不可欠であろう（全号を揃えての復刻がベストだが、不可能の場合には欠号があるまま復刻することもある。復刻版の刊行が呼び水となり、後に読者から所蔵情報を教えられることもある）。

著者は1975年に刊行、大部売れた様である。また、日本山岳会の機関誌『山岳』の復刻をした出版社もあった。不二出版でも『国立公園』のほかに『史蹟名勝天然記念物』『古蹟』『風景』等、景勝・観光を主題とした雑誌を復刻してきた。

## 復刻版の意義と課題

復刻版の主な対象として、敗戦前後に各地で大量に焼却されたといわれる戦時中の公文書がある。これらは歴史研究の基本資料であり、研究者からの需要も高かった。不二出版においても戦時下統制関係資料の復刻を数多く手掛けた。他方、稀覯本の復刻も盛んである。大修館書店の『覆刻日本の山岳名



不二出版株式会社 会長 船橋 治



参考文献

- 『国立公園の80年を問う』 国立公園研究会、自然公園財団編、南方新社、2017年
- 『国立公園論』 国立公園協会編、1949年
- 『観光と国立公園』 日本交通公社編、三省堂出版、1949年
- 『観光と国立公園』 日本交通公社編、1949年
- 『国立公園成立史の研究』 村中仁三郎、彩流社、2005年
- 『国立公園成立史の研究』 村中仁三郎、彩流社、2005年
- 『国立公園案内』 沼佐隆次、国立公園協会、1933年

# 日本の温泉医学、 その新時代への起点を 古書から見つける

NPO法人健康と温泉フォーラム 常任理事 合田純人

## 『ベルツの日記』と 『日本鉱泉論』

私がこの二冊の本を知ったのは、故大島良雄先生の紹介だった。明治13年発行の『日本鉱泉論』と、その著者である明治の医学者の日記として、『ベ

ルツの日記』をぜひ読むようにと紹介された。当時、温泉のことを何も知らなかった私は、後者が日本の温泉の素晴らしさとその医療や保養への社会的活用を説いた貴重な本だと聞き、本棚から小さな文庫本を手にとらせていただいた。

故大島良雄先生は明治44年に札幌で

生まれ、名付け親はあの「武士道」の著者、新渡戸稲造である。昭和9年東京大学医学部卒業後、医学部教授として、信州大学、岡山大学、東京大学など各地で教鞭をとられた。また温泉やリウマチ、アレルギー、東洋医学などの学会の会長をされながら、東京大学名誉教授、埼玉医科大学名誉病院長な

どを歴任され、後に私が所属する特定非営利活動法人健康と温泉フォーラムの初代会長及び名誉会長として活躍、平成17年1月に亡くなるまで日本の温泉医学の伝統を大切に守り、また人間としても誠に魅力ある偉大な日本人であり、そして医学者であった。先生と初めて練馬のご自宅でお会いしたのが



合田純人(ごうた じゆんじゆん)  
1949年、香川県生まれ。1986年設立の健康と温泉フォーラムの創立メンバーの一人で、世界保健機関(WHO)と公式関係を持つ国際温泉気候連合のアジア・太平洋協議会(FAPAC)初代事務局長を長年兼務。国内のみならずアジア・太平洋地域の温泉の社会化、疾病予防や保健的利用の普及・啓蒙に携わり、積極的に温泉のグローバル化を進めている。国内では自治体の委員など歴任。温泉地の広域連携や産官学の立体的な研究プラットフォームづくりや、温泉療養の医療費控除などの政策提言、温泉関連人材の育成に力を注いでいる。専門は健康社会学  
主な著書「Thermalism in Japan」(1988年)「日本の名湯百選」(1990年)「新湯治のすすめ」(2009年)「放射能泉の安全に関するガイドブック」(共著)(2012年)「温泉からの思考」(共著)(2012年)、「温泉実務必携」(共著)(2016年)等

昭和60年で、その年が、結果的に私の温泉元年となり、以降30数年、平成が終わり、新たな年号で温泉新時代を迎



『ベルツの日記』  
トクベツ編 菅沼竜太郎訳 岩波書店  
1979年(初版は1939年)



『日本鉱泉論』  
ベルツ、中央衛生会、1880年  
(国立国会図書館デジタルコレクションより)

えようとしている。大量生産、消費がもてはやされた高度成長時代の日本では、温泉も消費財とされるようになった。明治以降150年、日本が近代国家へと邁進した中で、日本人と温泉の見せる景色がどのように変遷したのか、日本の近代医療の進化の中で、いかに日本の伝統と、その心、そして温泉医学が埋没していったのか、温泉に限らず、この古書の意味する急激な近代化とその価値観の変遷による日本人の混乱、その社会的世相を知ると、第二次世界大戦後の日本の社会変遷など、茶飲み話に見えてくる。何気ない日常の日記に隠されたベルツの洞察力は、日本人が置き忘れてきた「何か」を気付かせてくれる。その「何か」について一緒に考えてみよう。

### もしも草津がヨーロッパにあつたとしたら

明治政府は近代国家を目指して、急激な近代化を図った。西欧列強から基本のインフラである社会制度やシステムを学び、模倣するため、様々な分野で外国人教師を招聘した。医学教育に

おいては、長崎から蘭学がもたらされていた幕末頃から維新を経てもつぱらイギリスを模倣しようとした。しかし徐々に幕府の「医学所」から「医学校」への変遷を経て、イギリス医学の臨床医学教育から、学理・研究を重視する医学へと移り変わり、ドイツの医科大学をモデルとした組織改革が進んだ。そのような背景の中、ドイツから新進気鋭の近代医学の教師として、招聘された医師の一人であり、東京大学医学部の元となった東京医学校の内科教授に明治9年に就任したのがその人、エルウィン・フォン・ベルツ博士である。当時弱冠27歳の青年医師であつたベルツ博士は52歳で東京医学校(後の東京大学医学部)を退官するまでの約25年間、我が国の特異な水田作業での寄生虫病や風土病の研究とともに、もともと鉱泉(温泉)の持つ疾病予防、予防医学的な研究に興味があつたようで、火山国である日本特有の強酸性泉などに間近に出会つてから日本の温泉の優れた医療や保養効果を主な研究対象とした。東京で政界や皇族または企業のお抱え医師として活躍すると同時に、草津温泉や有馬温泉、伊香保温泉を始め日本全国の温泉地を訪れ、その体験

や治験を明治13年に『日本鉱泉論』(中央衛生会)としてまとめた。特に、その中で草津温泉に関して「草津には、無比の温泉以外に、日本でも最良の山の空気と、全く理想的な飲料水がある。こんな土地が、もしヨーロッパにあつたとしたら、カルスバード(現在のチエコに位置し、当時のヨーロッパ一の温泉保養地)よりもにぎわうことだろう。『ベルツの日記』(岩波文庫版より)」と書いている。この文章は温泉関係者では知らない人はいない。時間湯(高温浴)など当時の日本の温泉文化の背景となつた仏教や山岳信仰の伝統的な風習などに興味をそられたに違いない。いたく草津温泉が気に入つたベルツ博士は、その優れた高原的保養環境、気候的環境を活かし、世界的な温泉保養地に欠かせない、温泉医学研究所や療養施設を建設するように自らの患者だつた高官や企業家を通じて、当時の政府に進言するだけでなく、草津温泉の泉源の権利や、温泉街からすこし登つた、高原地区の広大な土地を自費で購入したりした。しかし、地縁のない外国人がいくら旗を振つても、地元の特に保守的な地主や温泉旅館の経営者が反対し、実現は叶わなかつた。

結果的に、ベルツの構想に理解を示して温泉保養地の計画の見直しが始まったのは、ベルツ博士がドイツに帰国する直前だったという。このあたりの生々しい話を、代々、草津温泉の地主で町長などしていた家系で、学生を連れて温泉療養の実習のため、たびたび草津温泉に滞留した故大島良雄先生の無二の親友である故中沢兆三氏に直接おうかがいしたことがあった。中沢氏の祖父が当初、強固に反対したのだという。だが、改めて、ベルツの理想を実現しようと、高原にホテルや日本初のペンションを建てたり、温泉研究所を自費で運営したり、ベルツの理想を実現しようとした。もうひとりの明治生まれの日本人がいたのだ。

## 伝統的温泉療法が 消滅しようとしている

ベルツ博士の意志を引き継いだのは、草津温泉の故中沢兆三氏だけではなかった。昭和元（1926）年、東京帝國大学医学部に温泉気候物理医学を研究する内科物理療法学講座が創設され、ベルツ博士の温泉医学研究を引き継ぐことになるのだが、これが我が国の

立大学における温泉医学研究を柱の一つとする近代講座の始まりで、講座主任には、ベルツ博士の出身国ドイツで温泉医学、放射線医学を研鑽してきた真鍋嘉一郎教授が就任した。その後、三沢敬義教授そして大島良雄先生と引き継がれたが、残念なことに1998年、内科再編成に伴い、アレルギー・リウマチ内科となつて、同講座は消滅し、今日に至っている。

北海道大学、九州大学、群馬大学、岡山大学ほか全国の温泉地にあつた大学附属温泉研究所も次々閉鎖され、今日では日本の伝統的温泉療法が大学医学教育の臨床医学から忘れ去れようとしている。ベルツ博士の蒔いた日本の温泉医学の伝統が消滅しようとしている。その主な原因として考えられるのは、明治政府の新しい近代医療制度である「医制」での伝統医学の切り捨て政策だった。日本の近代化を進めるにあたり、それまで伝染病などが迷信や信仰などの対象となつていた



1891年  
(明治24)夏、  
草津を訪れた  
ベルツ博士左端。  
一井旅館  
(現ホテル一井)にて  
所蔵・ホテル一井

こと、また、薬草や漢方、温泉や禊水行など日本の伝統的なものを全面否定し、西洋医学としてもたらされた知識とそのシステムのみ国家が認める医学として手厚く育成することになった

ことである。残念なことに、自然に寄り添う日本の伝統や風習、貝原益軒の『養生訓』などの優れた教えなど、日本人を支えた精神文化まで否定され、それまで日本の伝統を守ってきた知識



『ベルツと草津温泉』  
市川善三郎、あさを社、  
1980年



『新版日本の温泉地  
その発達・現状とあり方』  
山村順次、日本温泉協会、  
1998年



『ベルツ日本文化論集』  
エルヴィン・ベルツ、東海大学出版会、  
2001年



『古書に見る温泉』  
私の温泉史ノート抄  
野口冬人、現代旅行研究所  
2004年



人（テクノクラート）と呼ばれる人たちがまさに180度の大転換をするこゝとで社会的地位を保証され、生き残るような有様だったようだ。そのことに関して、ベルツ博士が次のように記している。（文語体はわかりづらいので、筆者が一部省略して口語体で翻訳している）

「日本人は、幕末から維新とわずか10年前にあった封建制度時代から、（いってみれば中世騎士時代の文化状態にあつたのが）、数百年の時代を一挙に飛び越えて、19世紀に飛び乗って全ての知識や科学的成果を即座に自分のものにしてしようとしている。」

「そして、近代ヨーロッパが培ってきた知識や文化を教えるために招聘された我々は、日本人をこき下ろし、あるいは、日本を賞賛するだけでなく、その無知にさえおべつかを使っている。外国人教師の使命を見直すべき人たちが多いのは残念である」

「我々だけでなく日本人にも不敬な人々が多くいることは残念である。西欧人には考えられないことなのだ」

が、日本人は自分自身の過去に持っていた知識を全否定し、そのことを信念として重ねてきた知見や理論については何も思い出したくない。それどころか、教養人たちはそれを恥じてさえいる。『いや、何もかもすべて野蛮でした』、『我々には歴史はありません。我々の歴史は今、始まるのです』という知識人さえいる。」

「このような事は急激な変化・変質に対することに関して、自然な反発から起こり得ることとは理解できるが、正直、大変不快な感情が湧いてくる。日本人たちが自分の培ってきた文化や環境を自己否定し、軽視すればするほど、かえって私達の信頼や理解を得ることはできない。特に今の日本にとって必要不可欠なのは日本文化が持つすべての貴重で大切なものは何かを検証し、それを現在と将来をつなぐ大切なものとして大切に育て、ことさらにゆつくりと慎重に適応させていくことなのだ。」

改めて明治150年にあたる2018年、温泉医学は西欧や日本でも大きな転換期を迎えている。ドイツでは自

然医学（森林浴、海浜や山岳地での気候療法、温泉療法、漢方治療、マッサージなどの物理療法）が近代医学と併用されているが、医療費などの高騰で、温泉療養への社会保障費が削減され、また従来の温泉療養の適応症に優れた新薬が開発され、温泉医学の活躍する伝統的な保養地が療養地から休養地もしくは観光地へと大きな転身を図っているのが現状である。

このようにクア（療養）からウエルネス（健康増進）へ移行したヨーロッパではその次の世界「ポスト・ウエルネス」を見据え、自然と一体化し、心身（心と体）、ソウル（魂）再生の装置としての伝統を持つ日本の温泉地とその文化が世界的に熱い注目を浴びている。日本の温泉の真価が試されようとしている今、温泉医療の近代化への示唆のみならず、確固たる伝統と文化及び信念を失うことの危うさを指摘している『ベルツの日記』は、上下2冊の薄い文庫本だが、私にとっては故大島良雄先生が貫いた信念と人としての生き方を改めて思い出し、「日本人が置き忘れてきた大切な何か」を考える大切な古書となっている。

参考文献



「温泉からの思考」温泉文化と地域の再生のために」合田純人 森繁哉、新泉社、2011年



「写真記録 日本温泉」写真記録刊行会編 日本ブックエース、2012年



「日本温泉誌」(上巻) 内務省衛生局編、報行社、1886年



「日本温泉大鑑」日本温泉協會編、博文館、1941年



「温泉案内」鉄道省、鉄道省、1931年

# ホテル建築からみた 書籍の情報と時代性

神戸女子大学 家政学部・家政学科 教授 砂本文彦



蒲郡クラシックホテル  
(旧蒲郡プリンスホテル、蒲郡ホテル)

## 景観と歴史のはざままで

学部生のころ、研究室で愛知県蒲郡市の都市景観について考える機会が与えられた。地形や緑地、街路、家並みなど、様々な要素に整理をしていくのだが、突出した存在感を放つ建造物があった。それは蒲郡プリンスホテル（現・蒲郡クラシックホテル、旧蒲郡ホテル）だった。三河湾に面す小高い山の上に聳えつつ和風の外観をもった洋式のホテルである。

当時の景観学では、即物的な（モノ）からワンランク上の（メタ）な要

素に格上げするのがスマートだった。

蒲郡プリンスホテルもあえて言うなら、ケビン・リンチが『都市のイメージ』の中で示したランドマークに近い。どこからでも視認でき、もし蒲郡から失われるとしたら、市民に喪失感が生まれる。しかし、これを景観的に整理しようとしても、思うようにいかない。三河湾に浮かぶ竹島と対をなしてその存在は圧倒的なのだが、もともと蒲郡の地域性を反映したものではないため、うまくはまらないのである。むしろ、ここは素直にホテルの歴史を読み解くことでその固有性に近づこうとした。



砂本文彦  
(すなもと・ふみひこ)  
神戸女子大学家政学部教授。1997年豊橋技術科学大学大学院修士課程修了。2001年東京大学・博士(工学)「近代日本における国際リゾート地開発の史的探究」日本学術振興会特定国派遣研究者(韓国)等を経て現職。単著に『近代日本の国際リゾート一九三〇年代の国際観光ホテルを中心に』(書局社、2008年、日本観光研究学会賞・建築史学会賞受賞)、『図説ソウルの歴史 漢城―京城―ソウル』(河出書房新社、2009年)。共著に『観光学ガイドブック 新しい知的領野への旅立ち』(ナカニシヤ出版、2014年)、『近代日本の空間編成史』(思文閣出版、2017年)等。

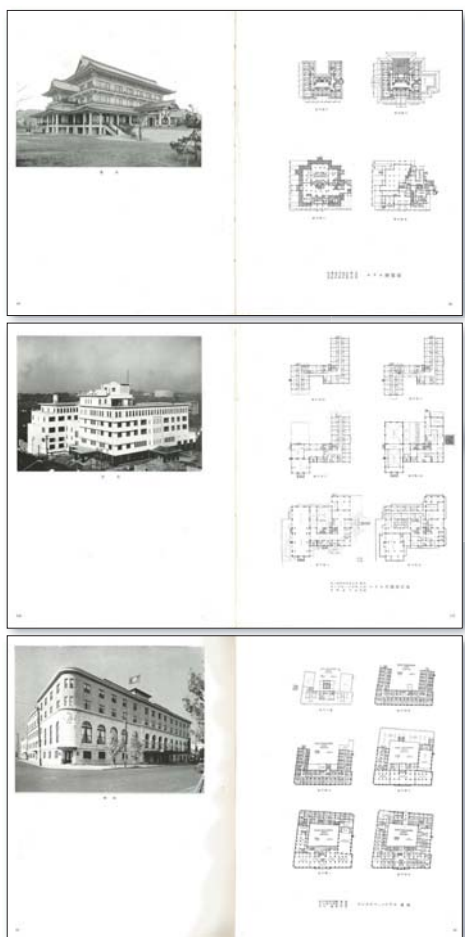


『近代日本の国際リゾート一九三〇年代の国際観光ホテルを中心に』砂本文彦 書局社 2008年

## ホテルの 建築意匠がもつ意味

ホテルは1930年代の国際観光政策によってできたことがわかった。建築学を修める私は身構えた。独特の外観から、あの「帝冠様式」を思い浮か

『ホテル建築図集』  
清水組編 清水組、1936年



べてしまったからである。

「帝冠様式」は西洋式の建物躯体の上に和風の瓦屋根を大々的に載せたデザインなのだが、それは戦前の日本において、建築家の「国家主義への迎合／忖度」により生まれたともいわれた。蒲郡プリンスホテルも、西洋式の躯体の上に日本建築の屋根がのついている。

建築学というのは不思議な学問で、あの当時の理解において、白いコンクリートの箱のモダニズム建築を志向することは清廉潔白で正しく、一方で、和風の大屋根を載せた「帝冠様式」は退廃的というような、道徳的価値判断が潜んでいた。一学生の私にも、その刷り込みは及んでいた。

## 1930年代 国際観光政策による 国際観光ホテル

1930年代の国際観光政策でつくられた「国際観光ホテル」は、調べてみると全国に15もあつた。となると、15のホテルはどのような姿をしているのだろうか。『ホテル建築図集』（清水組編、1936年）にはそのうち6つのホテルが掲載されていることがわかり、さっそく探し出して手にしてみた。装丁は豪華で、図集とあつて外観や内観の写真、平面図が掲載されている。ホテルは清水組（現在の清水建設）の設計か施工によるものだということから、施主や企業家に施工物件を紹介する図集なのであろう。「国際観光ホテル」を求めて頁をめくると、新大阪ホテル、名古屋観光ホテル、ホテルニューグランドといった都市ホテルは、クラシカルな要素を盛り込んだ近代的な建物、志賀高原温泉ホテルは欧州にありそうな山小屋風、唐津シーサイドホテルは巨大な海の家だった。結局、「帝冠様式」とおぼしき蒲郡ホテルと同系統の外観だったのは、琵琶湖ホテ

ルだけである。拍子抜けした。つまり、これら国際観光政策全体を徹底するような建築表現にいわゆる「帝冠様式」は採用されていないのである。蒲郡に適した様式として選択されていただけである。

むしろ、私の方が建築学の陥穽にはまっている。あらためて国際観光ホテルという枠組みから、そしてホテル建築の近代性を研究する必要性を強く感じ取った。それは観光政策を通じた建築の歴史研究になるだろうとも思えた。

## 戦前のホテル社史の 少なさとそこから 得られたヒント

戦前のホテルに関する記録は、小冊子類や雑誌記事が大半だった。大部の著作は戦後になって出版されている。戦前に社史という形で発行されたのは、目立つのはふたつしかない。それは富士屋ホテルの社史である『回顧六十年』（山口堅吉編、富士屋ホテル、1938年）と、名古屋ホテルも経営していた大阪ホテルの社史と位置づけられる『ホテルの想ひ出』（下郷市造著、大阪ホテル、1942年）である。

『回顧六十年』は、日本のリゾートホテルの源流のひとつである富士屋ホテルと箱根の歴史を年代記的に追うことができる。さらに、外国人専用ホテルとしての歴史があったため、そのまま日本の外客誘致について知れる資料となっている。同時に図版や来訪者に関する記録もよく記されている。1930年代の国際観光政策の歴史を把握するうえで豊かな基本情報を提供してくれ、なおかつ、西洋人に向けたホテル建築を考えるに示唆が極めて多い。それは要約すれば、①洋式という生活スタイルを日本で成立させる問題、②インフラや建築設備といった近代化への課題、③彼らのエキゾチックな旅情を満たすための空間形成のありかたであった。おそらく箱根で蓄積された個々の取り組みが後に具体的なかたちとなったのが、1930年代の国際観光ホテルの建築群だったといっても過言ではない。実際、1930年代の国際観光政策によるリゾート地形成とホテル建築を研究していくと、幾度となく富士屋ホテルの試みの再来を垣間見ることができる。

『ホテルの想ひ出』は、明治・大正期の大阪を代表した都市ホテルだった大阪ホテルがその経営を閉じる際にまとめられた記録である。支店の位置づけにあった名古屋ホテルの記述も含んでいる。こちらは年代記というよりは、会社解散時点の状況を含み編集されており、読み込みには明治から昭和初期までの大阪と名古屋の都市状況を理解しないとイケない。だが、要はここに記されているのは、明治から昭和初期までに都市ホテルに求められた機能やステイタスが、都市の成長にともない時々刻々と変化し、迎賓館的要素を持ち得た都市ホテルの役割も新たな別のホテルにとってかわった、ということである。そのかつての位置にいたのが、大阪では大阪ホテル、名古屋では名古屋ホテルであったが、とってかわった新たなホテルが、1930年代の国際観光政策と深くかかわりをもって開業した新大阪ホテルと名古屋観光ホテルだった。しかも両者とも、帝国ホテルが関与したホテルである。これと同時にビジネスパーソン向けの宿泊機能に特化したホテルもこの頃に多く新設されており、歴史だけある都市ホテルでは、中途半端な位置におさまらざるを得なかった。

つまり、戦前期に発行されたふたつ

『回顧六十年』  
山口堅吉編、富士屋ホテル、1938年

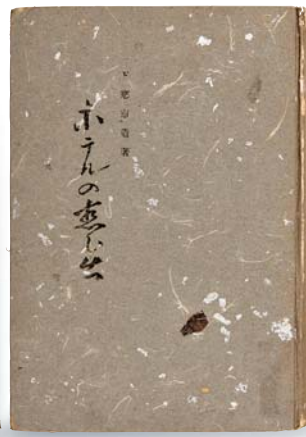


しかないホテルの社史は、日本のリゾートホテルと都市ホテルの展開と消長を歴史的に示しているのである。それは、どのような意味があるのだろうか。

## 戦前の都市ホテルと リゾートホテルの 新設数

ここで目安として、わが国における近代期のホテル新設数の推移を図1に示す。『日本ホテル略史(運輸省、1946年)』に掲載されたホテル名をカウントし、同書に漏れていると思われる洋式設備を備える宿泊施設も他文献





より適宜補ってカウントしている。新設ホテルの総数は実線で、都市ホテルとリゾートホテルはわけてヒストグラムで示した。

『ホテルの想ひ出』  
下郷市造、大阪ホテル、1942年

これをみると、ホテルの新設数は明治期から大正にかけて、新設が集中する時期としない時期を繰り返して、四つの時期に増加傾向があったことが認められる。これはホテル新設ブームとも呼ぶうる時期と考えられる。

- 一期 一八七〇年～七八年
- 二期 一八八五年～九六年
- 三期 一九〇六年～一六年
- 四期 一九二七年～四〇年

そして、この増加の波は四期に大きくなりとなり、1920年代後半から1930年代後半にかけては急速に新設ホテル数が増加していたことがわかる。また、ホテルの種別で見ると、一期には都市ホテルの割合が多いが時代が下るにつれてその割合は減少する。反対に四期に近づくほど、リゾートホテルの割合が増えている。とくに四期のなかでも1930年代後半は、都市ホテルよりもリゾートホテルの方が圧倒的に多い。中国戦線など対外関係の厳しい時期に、国内のホテル業界は質的に変化した（ホテルブーム）を迎えたのである。

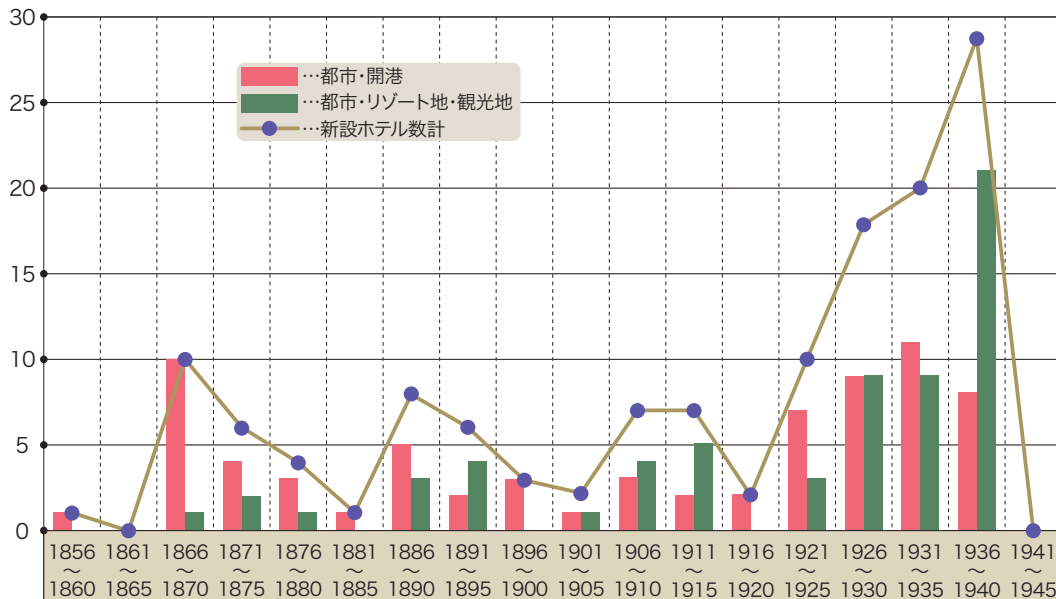
本稿で扱った三つの書籍はどうだろ

う。いずれも、その1930年代後半以降に出版されている。『回顧六十年』は、富士屋ホテルの増築となる花御殿竣工や河口湖畔の

富士ビューホテルの開業（いずれも1936年）といった施設拡充の果ての1938年に発行されたものである。その出版は図1にて示したように、1930年代後半の全国的なりリゾートホテルの増加のただなかの出来事である。『ホテルの想ひ出』は1942年に発行されたが、会社解散に際しまとめられた内容は1930年代後半の既存の都市ホテルの置かれた厳しい状況を反映している。『ホテル建築図集』は1936年に清水組により発行され、さらにホテル建設を担って戦前の建設会社をなかもつともホテルを建設したと考え

らえる。この三つの書籍の発行時期は、ホテルの新設の状況を内容的に説明している図書にもなっている。

図1 ホテルの新設状況 (1858年～1944年)



## 書籍の情報と時代性

2008年に拙著『近代日本の国際リゾート 一九三〇年代の国際観光ホテルを中心に』（青弓社）を出版したが、出版当時は、日本が外客誘致政策を進めて現在のよう多くの外国人観光客を迎えるようになるとは思いませんでした。拙著の内容は建築学的に主要な課題とも思えず、観光学にも貢献するとも考えられず、実は書籍化も時間を要した。日本がこのような状況になるのだったら、正直なところ、歴史の編集の仕方も異なってくる。これも調べて、ああ書いておけばよかった、と思うが後の祭りである。

古書は与えてくれる情報は膨大、かつ、同時に示唆に富む。示唆は、その古書が世に問われた時代も読み解くことで、より内容が増し、かつ意図する方向性も見えてくる。さらに、読み込んでいる自分自身の状況も、これに関わる。目の前に記された情報の取捨は読者に委ねられていて、古書を手に見えてくるのは、実は自分自身置かれた時代性だと、いまさらながら思うのである。古書はいつも、新しい。



社史というと、その会社のことしか載っていないもの、しかも一般には流通していないため、手に入りくいものといったイメージがあるかもしれませんが、実は観光史をひもとくことができる貴重な資料なのです。当館には320冊ほどの社史があります。内訳は運輸関係のものが約170冊と、観光産業関連のものが約80冊。残り70冊が観光行政や一般の企業のものになります。例えば『The History of the Imperial Hotel』『南満州鉄道株式会社三十年略史』などが挙げられます。

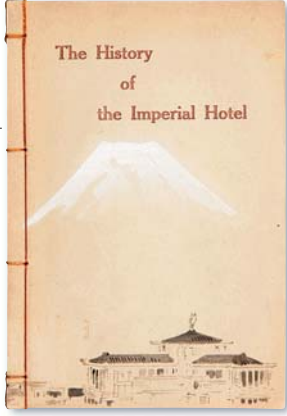
ほとんどの社史は本編と資料編で構成されています。本編は基本的に時系列に並んでいるので、時間がないときは途中から必要な箇所だけを読み進めていくことができます。本編より先にまずは資料編へ、という調べ方もあります。資料編には会社の様々なデータがわかりやすく図表や写真で示されて、年表や索引があ

る場合も多く、本編以上に分かりやすい場合もあるからです。特に年表は自社だけの歴史はなくて、その時代の世の中の動き、風俗・文化などが書かれている場合もあります。同じ会社で10年、50年、100年と周年ごとに出版されている場合、周年版ごとに詳細に書かれている内容が違っていたりします。また、同業種の

### 社史利用のススメ

観光文化情報センター  
司書 泉佳奈

社史を比較してみるもの面白いものです。社史も、その時代、それぞれの会社のカラーが色濃くできるので、同じ出来事が異なる観点で描かれている場合が多いのです。最近では会社のことはホ



『The History of the Imperial Hotel』 Imperial Hotel, 1938年

ームページでわかるように思いがちですが、最新情報が多く、「沿革」で簡単に歴史を紹介しているパターンがほとんど。社史はそれなりに予算と労力をかけて作られているので、インターネットでは見つけられない情報がぎつと見つかります。社史に興味があれば、社史だけで19000冊を所蔵している「神奈川県立川崎図書館」や、渋沢栄一に関連する社史1500冊分のデータが検索可能な「渋沢社史データベース」もおすすめです。当館では40周年事業として更なる社史の収集を予定しています。ご寄贈もお待ちしております。

※ 社史とは  
「企業が自社の歴史を、社内資料に基づいて、会社自身の責任において刊行したもの」  
～村橋勝子『社史の研究』ダイヤモンド社、2002年より

参考文献



『日本ホテル略史』  
運輸省鉄道総局業務局観光課、1946年



『ホテルと共に七十年』  
大丸徹三、展望社、1964年

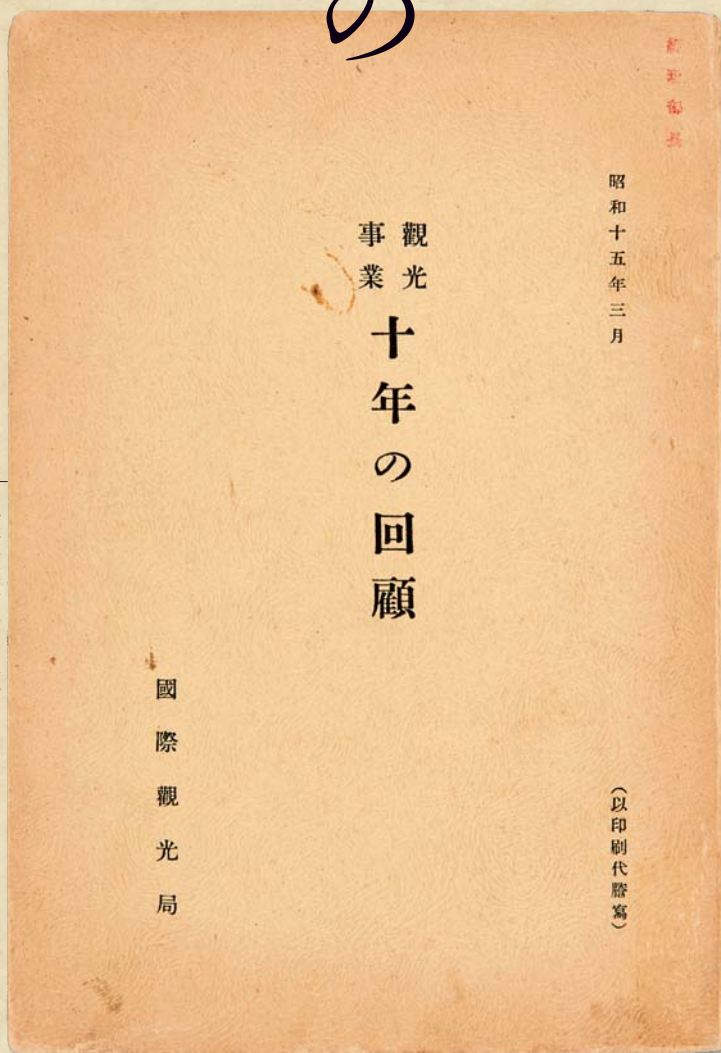


『続日本ホテル略史』  
運輸省欧米部、1949年

【特集】... ⑤

# 国際観光局の10年

立教大学  
観光学部 交流文化学科 准教授  
千住 一



『観光事業十年の回顧』国際観光局、1940年



千住一(せんじゅ・はじめ)

立教大学大学院観光学研究科博士課程後期課程満期退学。博士(観光学)。奈良県立大学地域創造学部准教授を経て、2015年より現職。歴史学の立場から近代期における観光の意味や役割を検討している。主な研究テーマは、近代日本における植民地と観光の関係性、近代日本における観光政策の史的展開。

## 座右の書

いつから手元にあるのか思い出せない。古書店から購入したのは間違いないが、それが大学院生の時だったか、奈良の大学で働いていた頃だったか、ましてやいくらで求めたのか、すっかり記憶から抜け落ちてしまっている。要はどこを探しても見付からない、欲しくて欲しくて仕方ない古書ではなかったのである、少なくとも当時の私にとって。

しかしここ数年、戦前期日本の観光政策について少々、と専門を自称するようになったからこの本は文字どおり座右の書となった。当時の観光政策のありようを概観する上で、国際観光局が1940年3月に発行した『観光事業十年の回顧』(以下、『回顧』)——1930年に鉄道省の外局として設置された国際観光局の10年間を振り返ることをコンセプトに編まれたであろうことは容易にうかがえる——以上に有益な史料を私は知らない。

書棚に埋もれかけていたこの本とじっくり向き合うようになったのは、かつて勤務していた大学で「日本近現代

観光史」なる科目を担当したのがきっかけである。今でも大して変わりはないが、戦前期日本の観光に関する記述を既存研究になかなか見出せずウンウン唸りながら授業準備をした挙句、20名ほどの受講者にほぼ毎回『回顧』の一部をコピーして配布したことが、今となっては懐かしい。

## 対外宣伝

前置きが長くなったが『回顧』の面白さは、国際観光局が何を重視して当時の観光政策の柱たる外客誘致に取り組んでいたのかがよく分かることにある。1930年に国際観光局が設置されて日本における観光の国策化が始まったという理解は概ね了解されているが、この組織が具体的にどのような活動を行ったかについては、国際観光ホテル整備をめぐる動向などを除いて実のところあまりよく知られていない。その一端を垣間見るため、開局から10年の歩みをまとめた本書を繙いてみよう。

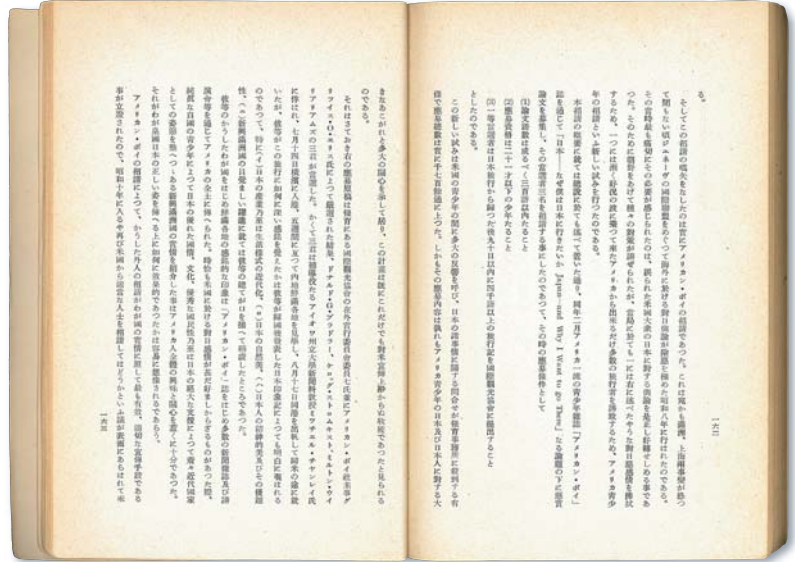
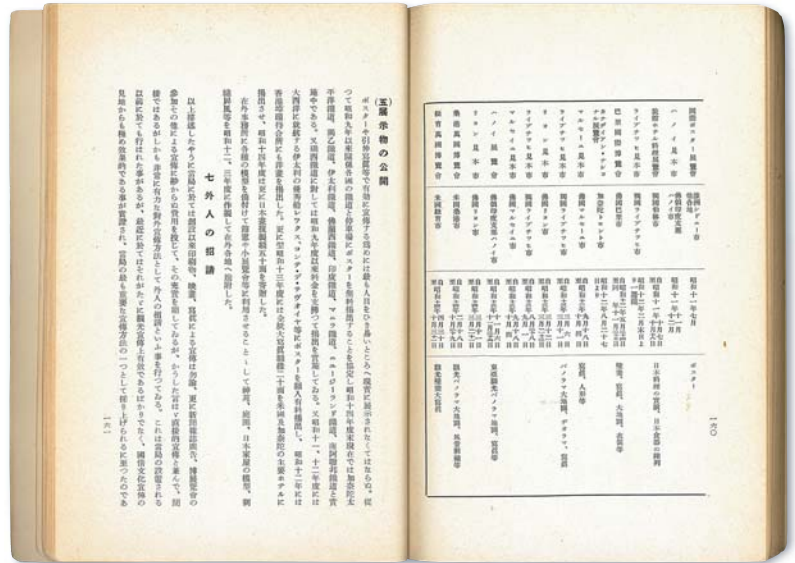
国際観光局が最も力を入れていた活動は「対外宣伝」、すなわち海外への日本の宣伝であった。なかでもアメリカ

「観光事業十年の回顧」  
国際観光局  
1940年

目次

第一篇 総説  
 その一 国際観光局の創立まで  
 その二 戦時下の観光事業  
 その三 観光事業の発展  
 その四 観光事業の発展  
 その五 観光事業の発展  
 その六 観光事業の発展

第二篇 機構  
 その一 国際観光局  
 その二 国際観光局

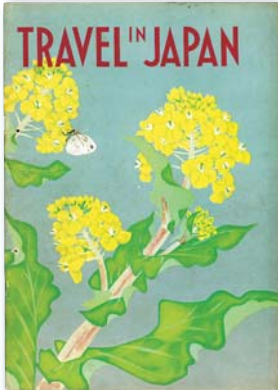


力を当初から主要ターゲットに据えており、開局の翌年にはニューヨークで、またその翌年にはロサンゼルスでそれぞれ事務所を開設しただけでなく、1932年にロサンゼルスで開催されたオリンピック、1939年にニューヨークとサンフランシスコで開催された万国博覧会といった巨大イベントでも積極的に日本の姿を喧伝している。そして、これら一連の宣伝活動には

多様な媒体が動員された。ポスター、絵はがき、地図、パンフレットはもちろんのこと、写真をふんだんに使用した定期刊行物『トラベル・イン・ジャパン』や、日本の文化や風物を紹介する叢書『ツーリスト・ライブラリー』が万単位で印刷され、旅行会社、ホテル、教育機関、マスコミなどに配付されたのである。また、国際観光局が映画製作に取り組んでいた点も見逃せない。

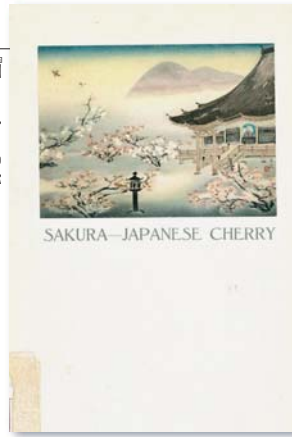
「外人の招請」  
しかし、国際観光局が活用したメディアのなかで最も特徴的なのは「人





「間」であった。すなわち国際観光局は、アメリカを中心にそれ以外の国と地域からも「外人の招請」を頻繁に行っている。その嚆矢とされるのが1933年に企画された雑誌「アメリカン・ボイ」での懸賞論文「日本——なぜ僕

『Tourist Library』  
国際観光局 1934年創刊



は日本に行きたいか」であった。当選した3名の少年は、7月14日に横浜へ入港して日本内地、朝鮮、満洲各地を訪問し、8月17日にふたたび横浜から出港しているが、注視すべきは『回顧』に伝えられる帰国後の彼らの動向であろう。曰く、「わが国をはじめ鮮

満各地の感銘的な印象は「アメリカン・ボイ」誌をはじめ多数の新聞雑誌及び講演会を通じてアメリカの全土に

例えれば1936年からは「米國太平洋沿岸ハイスクール女教員」が招待されて「内鮮満」を見て回っているし、ほかにもカナダ、オランダ植民地、インド、ブラジル、アルゼンチン、ウルグアイから教員を招いたり、アメリカ、オーストラリア、フィリピン、中国などから作家、新聞記者、政府関係者らを招請したりしている。その数は19

伝へられた」（163頁）。  
こうした目論見は以降も継続され、



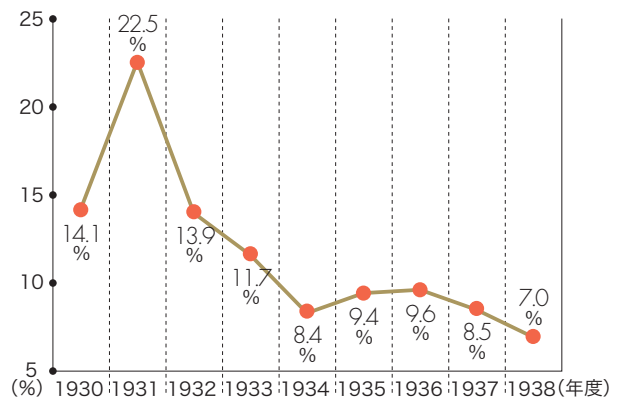
『TRAVEL IN JAPAN』  
国際観光局 1935年創刊

このような国際観光局の取り組みを見ていく上で、避けて通れない団体が存在する。国際観光協会である。国際観光局とよく似た名を冠するこの財団法人は、国際観光局による「指導監督の下に对外観光宣伝の実行に当る」

## 国際観光協会

39年度において「四百名に余る多きに達した」（60頁）とされるが、国際観光局が帰国後の彼／彼女たちに期待した役割については言うまでもない。

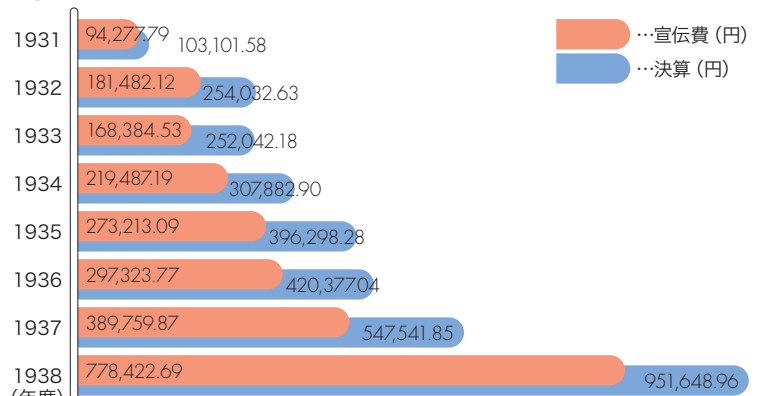
図1 国際観光局決算に占める「宣伝費」の割合



（はしがき2頁）機関として、会長を鉄道大臣に委嘱するかたちで1931年12月9日に設置された。柴岡信一郎は、著書『報道写真と対外宣伝——15年戦争期の写真界』（日本経済評論社、2007年）のなかで国際観光局と国際観光協会は「表裏一体」の関係にあったと指摘する。

確かに『回顧』を読んでいると、主語が国際観光局なのか国際観光協会な

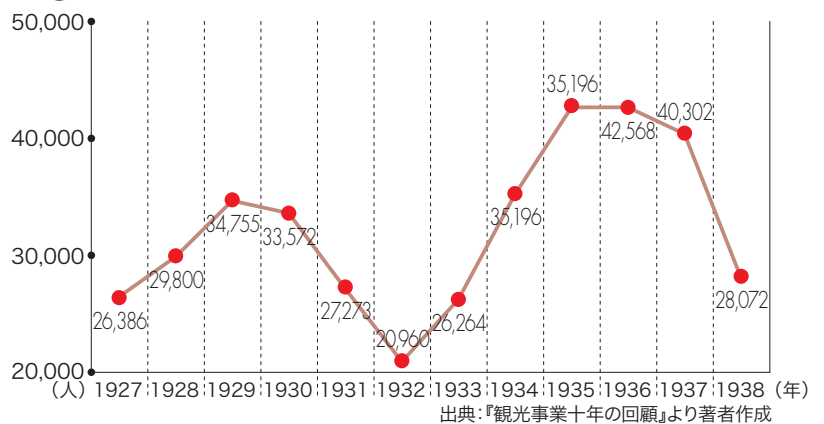
図2 国際観光協会決算における「宣伝費」の額



のか判別しがたい場面にはしばしば出くわす。しかしその書きぶりは何かを隠蔽するような意図を感じさせず、実際に書き分けが難しかったのだろうと夢想できるほどだ。いずれにせよ、「対外観光宣伝」のあり方を国際観光局が立案し国際観光協会がそれを実行していった、という理解に誤りはなからう。

『回顧』所収のデータから作成した図1および図2からも分かるとおり、国

図3 訪日外国人の数



「外客は斯く望む附日本旅館に外人を迎えるには」  
国際観光局、国際観光局、1933年



「外客誘致の話」  
国際観光局、国際観光局、1932年



「国際観光事業概説」  
国際観光局、国際観光局、1933年



「国際観光事業の趨勢」  
国際観光局、国際観光局、1933年



際観光協会設立以降、国際観光局決算における宣伝費の割合が縮小傾向にある一方、国際観光協会の宣伝活動費は拡大の一途をたどっている。

## 「事変下の日本を正しく宣示する」

では、なぜ国際観光局と国際観光協会の二人三脚は対外宣伝に邁進したのであろうか（あるいははしたとされるのだろうか）。『回顧』から読み取れるひとつのこたえは、1931年の満洲事変と翌年の上海事変を契機に国際社会で悪化した日本イメージの是正である。図3にあるように、当時は訪日外国人の減少が目立っていた。こうした状況を『回顧』は次のように振り返る。

「むしろかうした際にこそ大いに海外宣伝の拡充をはかり、たゞに外客誘致のためにする宣伝のみでなく、事変をめぐる海外諸国の対日謬論を是正し、好転せしめる意味に於て国情文化宣伝の方面にも十分力を注ぐ必要があった」（28―29頁）。

観光宣伝は国際社会で醸成された日本に対する誤解を取り除くのに役立つた、という説明はその後も散見される。

例えば、先述した『アメリカン・ボーイ』誌における取り組みは「他の如何なる国情、政治宣伝にもましてわが国の正しい姿、正しい意図を知らしめるに役立つた」（36頁）と評価され、帰国後のハイスクール女教員たちについても同様に「正しい日本、優れた日本の宣伝紹介に少なからぬ寄与をした」（51頁）と記されている。特に前者に関しては、日本の国際連盟脱退の一因となった「満洲国」を訪問した意図を以下のように解説する。「日本の絶大な支援によって着々近代国家としての姿態を整へつゝある新興満洲国の実情を紹介した事はアメリカ人全体の興味と関心を惹くに十分であつた」（163頁）。国際観光局によって招聘された外国人の多くが内地だけでなく鮮満もあわせて周遊していた理由が、ここにある。

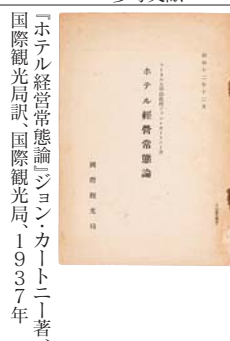
1937年に日中戦争が勃発し戦線が拡大すると、こうした表現はより直截的になっていく。見出しに掲げた「事変下の日本を正しく宣示する」（60頁）は前述した1939年に開催されたふたつの万博での宣伝に関して記された文言であるし、上で詳しく述べた「招請外人」については、「聖戦

に処するわが国の真姿態を正しく海外に伝えるに資するところが少なくとも」（59頁）とその意義がまとめられている。そして開局から10年が経過した1940年における国際観光局の立ち位置は、次の一文で締めくくられる。「今や東亜の新秩序を目指して太平洋に雄飛せむとしつゝあるわが国の真姿態をあますところなく世界に顕揚すべく万般の準備を整へてゐる」（74頁）。

## 対外宣伝史観を越えて

約200頁からなる『回顧』は、そのほとんどが対外宣伝に関する記述やデータで占められている。時局柄、国際的な日本イメージの是正に力を尽くす存在であることをアピールする必要があつたにせよ、さながら国際観光局は開局以降海外への宣伝活動に終始していたと宣言しているかのようである。しかし本当にそうなのだろうか。残念ながら国際観光局にまつわる史料の発掘状況は芳しくないが、開局から1942年の閉局に至るまでの歩みとその意味を対外宣伝史観とは異なる視点から描けないだろうか、と改めて『回顧』を読み返しながら空想した。

### 参考文献



『ホテル経営常態論』ショーン・カートニー著、国際観光局訳 国際観光局、1937年



『観光行政百年と観光政策審議会三十年の歩み』内閣総理大臣官房審議室、1980年



『国際観光事業の回顧』国際観光局 国際観光局、1935年



『観光の日本と将来』新井莞爾 観光事業研究会、1931年



『諸外国における観光事業概説』ハーバード・エム・ブラター、国際観光局、1930年



interview  
インタビュー

立教大学名誉教授・理学博士 みぞお よしたか ●立教大学名誉教授。理学博士。公益財団法人日本交通公社評議員。群馬県出身。東京教育大学理学部地理学専攻卒業。1964年株式会社日本交通公社外人旅行部に入社、1969年財団法人日本交通公社へ移籍。1989年立教大学社会学部観光学科学科教授。観光学部教授、観光学部長、日本観光研究学会会長を歴任。

# 古書をひもとく

## 「尺度」をみがく

当館所蔵の古書2300冊から

聞き手

「旅の図書館」館長○福永香織  
副館長○大隅一志

編集協力○井上理江

写真○村岡栄治



古書2300冊を概観して感じたこと、旅の図書館所蔵の古書の特徴

**事務局**：当館では、主に戦前の本を古書と定義していますが、（私が担当になった）2014年頃は古書・稀覯書としてまとまっていたものが3600冊くらいありました。1970～80年代といった比較的近年出版された本や、他の図書館から寄贈された貴重本も含まれていたの、再分類して2300

冊に絞り込みました。

一方で、当館にある古書の特性や収集状況などを十分に把握できておらず、最低限の書誌データがあるだけだったのですが、旅行案内書を研究していらっしゃる関西学院大学の荒山正彦先生をはじめ、全国から研究者の方々にお越しいただくようになり、当館にある古書の価値を色々と教えていただきました。

こうした中で、「昨年度から「所蔵古書の概要把握と保存・活用に関する研究」を開始しました。溝尾先生には古書の特性についてアドバイスを願

いしましたが、まさか2300冊全てを見ていただけるとは思っていませんでした。

**溝尾**：こういった本は大事だという意識が強かったのですが、見ていくと非常に良い本があり、素晴らしいと思えました。これは全て見なくてはいい、もっと良い本があるのでないかという気になってしまい、結局全部確認してしまいました。1冊ずつ重要度を星印で三ツ星から一ツ星、除籍してもよいものにXをつけ、コメントを入れていきます。あくまでも私の主観なので、皆さんにもう一度よく見ていただ

きたいと思います。三ツ星のものはぜひ読んで欲しいですし、除籍についても検討していただきたい。

**福永**：全体をご覧いただいたからこそわかる、当館の古書の特徴はありますか。

また、改めてお感じになられたことはありましたか。

**溝尾**：特に旅行案内書や観光政策関連の古書は充実していると思います。この部分で抜けているものがあれば買いい足していいかもしれませんね。戦前は鉄道省国際観光局とジャパン・ツーリスト・ビューローが日本の観光



を牽引していたのが刊行された本をみればよくわかります。観光史を調べる上で、国際観光局が昭和5年にできてから何をやってきたかに私はすごく興味を持っていますが、同局は『**ツーリスト移動論**』（オギルヴィエ、国際観光局、1934年）『**観光経済学講義**』（アンチエロマリオツテイ、国際観光局、1934年）といったように海外の古典的名著ともいえる観光関連の本を数冊翻訳しています。私が気になるのはイタリヤ語やドイツ語のどういう言葉

を観光と訳したのかです。国際観光局が翻訳した『**観光学概論**』（アルトゥル・ポールマン、1930年）には（本書における「観光」はFremdenverkehrの訳語である。この語の本来の意味は「外来者交通」であって、「観光往来」或は「観光事業」に当たる場合があるのであるが、本書では一貫して「観光」の訳語を用いた。）という注がありました。そのような注がいろいろありますが、本当に忠実に復刻しているのかという問題があります。

例えば、『**特命全権大使米歐回覽実記**』（久米邦武・編、1878年）は、観光の本ではないですが、巻頭に「観

と「光」を1文字ずつ2ページに分けて記しています。しかし、復刻版ではこれを1ページにまとめてしまっています。大きな問題ではないかもしれませんが、意味合いが違ってきますよね。研究者はすべて復刻版に頼るのではなく、本当はオリジナルを見た方がいいと思います。いずれにしても「観光」を冒頭に大きく掲げたのは、「先進国を」見て回る（学ぶ）の決意があったのでしよう。今日的な意味がすでに知れ渡っていたのでしょうか。「観光」をなぜ取り上げたかの話があると面白いのですが。

有名なウエスタンの『**日本アルプス**』（岡村精一訳・1953年）という本がありますが、私がこの本で一番好きなのが「日本アルプスは、氷河に覆われた峰の光輝を見せてはいない。それは事実である。又その規模は有名なスイス・アルプスに較べるとほんの三分の二ではある。けれどもその谷間の画のような美しさ、壮大な山腹を覆う鬱蒼として静寂な森の壮麗さは、私のヨーロッパ・アルプス放浪中に見たどれよりも美しいものである。」（原文ママ）という一節です。これを書いてくれたおかげでヨーロッパ人が日本アルプス



に興味を持つことになりました。

日本の山は山頂を征服するのではなく、頂上に行くまでの景色を楽しんだりすることが大事で、頂上はその結果だ。そうすると原書の英語版では何と書かれているのが気になります。

**MOUNTAINERING AND EXPLORATION IN THE JAPANESE ALPS**（1896年）も持っているのですが、この一節の日本語版と英語版を比較して見ると良いのではないのでしょうか。

このように、時代を追うごとに内容が変わってしまうこともあるので、オ

リジナルの本をしつかり残しておくことは大事だと思いますね。

あと、古書が大事だと思ったのは、昭和48年に日本交通公社出版事業局が『**新日本ガイド**』という本を出していましたが、例えば神戸をみると、初版では近畿編全350ページのうち神戸が紹介されているのは4ページでした。ところが最終版では12ページに増えていて、神戸のウェイトが高まったことがわかります。

また、四万十川は観光地ではなかったで、初版本ではまったく紹介されていませんでしたが、最終版では囲みで半ページ紹介されています。このように、新しいガイドブックと古いガイドブックの比較をすると観光地の変遷を知ることができます。

『日本地理風俗体系 中部および北陸地方』（昭和34年）に日本アルプスという項目があり、全415ページのうち225ページに渡って紹介されています。また、昭和6年に発行された『日本地理体系』のシリーズでは別冊が丸1冊（B5版・271P）、富士山を扱っています。昔は重点を置くものには本当に力を入れるんだなと感心します。富士山自体はあまり変わって



『**観光学概論**』  
アルトゥル・ホルマン、  
日本交通公社、1930年

『**ツーリスト移動論**』  
オギルヴィエ、鉄道省国際観光局、  
1934年

『**国立公園案内**』  
附**旅程とその費用**  
国立公園協会、  
1933年

『**日本アルプス**』  
ウェストン著、岡村精一訳、創元社、  
1953年

『**観光経済学講義**』  
アンチエロマトテイ、国際観光局、  
1934年

いないので、富士山を研究するならば、こういった本を見る必要があるでしょうね。一方で、最近は食べるものと遊ぶことに関する本が多いですね。悪くはないですが、それしかないというのは問題だと思えます。

それから国立公園についても、昭和9年に選定されたところだけを日本最初の国立公園としている記事をよく見かけますが、そうではなくて、国立公園協会は、1933（昭和8）年3月に『国立公園案内附旅程とその費用』を刊行し、12を候補でなく国立公園として選定したと報告しています。では



『特命全權大使  
米歐回覽一記』  
久米邦武編、  
博聞社、  
1878年

『MOUNTAINING  
AND EXPLORATION IN  
THE JAPANESE ALPS,』  
REV. WALTER WESTON,  
1899年

『JAPANESE INN』  
Oliver Staller, RANDOM HOUSE, 1961年

『日本風景論』  
志賀重昂、政教社、1897年

なぜ昭和9〜12年とされているかという、決定後に現地で境界を決める杭打ちに時間がかかっただけの話です。

また、水上温泉が栄えたのは、上越線と清水トンネルが開通したからです。古書を見ると開通前は、わびしい様子でしたが、開通後は新潟からの新婚旅行の1泊目になったりして、栄えていったことがわかります。古い本があれば、上越線の開通前後での比較ができます。そういう意味で、古い本の利用方法というのはたくさんあると思います。

このように丁寧に読むと大事なことが見えてきて、やつて良かったなど思えます。古書というより、大事なのは原書であって、そういう本は大事に残しておかなければいけないでしょう。そしてたくさん本を読んでいると、自分の尺度が決まって来ます。

**福永**：一般的に、古書はなじみのない方も多いと思いますが、どのようにアプローチしていけばよいと思いますか。  
**溝尾**：やはり自分の好きな分野から入るのがいいのではないのでしょうか。山が好きなら志賀重昂の『日本風景論』を読むでしょうし、そこからウエストン、小島鳥水、日本八景、国立公園へ

とつながってきます。

## 地域に関わる人が 読むべき本、 自分が感銘を受けた本

**溝尾**：最近の若い人は仕事でわからないことがあればネットで調べると思いますが、それが悪い訳ではありませんが、自分の「箱」が広がらないと思います。東北地方を例にとると、遠野の仕事をすると『遠野物語』（柳田國男、1910年）は読むでしょうが、釜石の仕事をする時は、市長で素晴らしい仕事をした『反骨 鈴木東民の生涯』（鎌田慧、講談社文庫、1992年）の本まで目が行き届かないでしょう。その地域の仕事をするのであれば、その地域について書かれた本を読む必要があると思います。現地でヒアリングをする時もそういうことを知っているか否

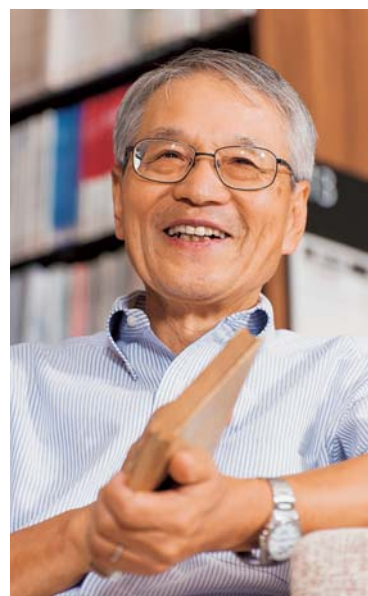


かで理解力や相手の反応が変わります。私はどこかで「旅と本」というテーマで連載したいと思っています。これまでに自分がどういう旅をして、どういう本を参考にしたのかを執筆するものです。

ちよつと変わった視点から、1980年半ば前後から日本各地に、ニコニコ共和国、アルコール共和国などミニ独立国が続々誕生します。最盛期には200を超えたと言います。それは井上ひさしさんが1981年の834頁の長編『吉里吉里人』（新潮社）を刊行したからです。岩手県大槌町吉里吉里が、日本国から独立するパロディです。

**大隅**：図書館も新しい本ばかりに目をつけてはだめで、過去のものでも、つても、記録として重要なものをきちんと残していかないといけませんね。

**溝尾**：たまたまこれも東北になります。地域のグランドデザインを描くときに、1968年に出版された『自分たちで生命を守った村』（菊地武雄・岩波新書）という本があります。これは長い間、医者がない村であった貧



しい岩手県内村で、深沢晟雄氏が村長になって高齢者の医療十割負担と乳児の死亡ゼロを目指した医療改革をおこなった話です。今の少子高齢化対策にあたりますが、村長や町長はこのくらいの気概を持ってほしいと思います。私のゼミ生にはだいたい読ませていますし、研究員にもこういう本を読んでもらいたいですね。

**福永**：もう少し色々な方が古書を手にとっていたらいいなと思います。先生は授業で古書は使いますか。

**溝尾**：先ほど紹介したウエストンの一節を引用したり明治40年代に来日したキップリングの「日本は風景が多すぎ」というのも好きな言葉で、よく話します。

**福永**：海外との比較によって日本のオリジナリティに気づくことがありますし、当時のお雇い外国人が日本をどう見ていたかというのも紐解くと面白いですよ。





**溝尾**：それはありますね。他にも桂離宮が評価されるきっかけになったブルーノ・タウトの「桂離宮が真の日本の建物で、東照宮は日本的ではない」（『日本の芸術』（春秋社、1950年））といった言葉などもしつかり残した方

がいいと思います。

## 「旅の図書館」の 今後のあり方

**福永**：最後に、当館の今後に向けた課題や役割についてどう思われますか。

**溝尾**：以前から伝えていますが、除籍のフローと除籍の基準を確立することが大切だと思います。なるべく良い本を残し、いまや不要あるいは意外によくなかった本は除籍するべきです。また、かなり傷んでいる本もあるので、きれいに直して、公開の可否を検討すべきではないでしょうか。研究者には目録を提供するか、そういった情報提供をしてあげてもいいかもしれません。

また、スマートフォン、ネットの現代において、ここにある本についてどういった情報提供をしていくかでしょうね。情報収集手段が

どんどん変わっていますから、提供する側も変わっていかなければいけないでしょうね。

**大隅**：確かにそうですね。一方で、本そのものを見られることもすごく大事かと思っています。

**溝尾**：もちろん、それはすごく大事ですね。いい本を入れて、質の高い情報を提供するようになければなりません。難しいのは似たような本も多いなかで、どの本を通じて、何を提供するかですね。

**大隅**：観光文化2331号で紹介した二度は読みたい観光研究書&実務書100冊」でも新刊図書の評価はとても難しかったです。古書の定義についても今後10年、20年経った時に、いつまで、戦前、戦後をを境にしているのかと思うこともあります。

**福永**：図書館のあり方も昔とは変わってきています。ただ本を集めるだけで



なく相手に合った情報をどう提供していくかが重要になると思います。例えば古書の読み方や、古書の中で現代に通じる視点などを紹介していくとか。一方で、蔵書については当館だけでは限界があるので、他の専門図書館などと連携していくことも大事かと思っています。

溝尾先生、本日は貴重なお話をありがとうございました。

### 参考文献



『新日本ガイド四国』  
日本交通公社出版事業局  
1978年



『全訳 遠野物語』  
石井徹訳注、無明舎出版  
2012年



『観光学の基礎』  
観光学全集1、溝尾良隆編著、  
原書房、2009年

## あとがき

「旅の図書館」  
館長  
福永香織

当財団において、これまで古書の存在はほとんど認識されていなかった。閉架資料であるがゆえ、誰もが見られる場所になかったこと、システム上で図書登録されたのがほんの5年前であることも要因かもしれない。

2016年に研究本部と一体となり、リニューアルオープンすることになり、観光に特化した独自の分類方法を導入した。その際に、あわせて古書の分類作業もおこなった。当時まだ図書館の担当ではなかった私は、古書分類作業のために広げられた、妙にセンスの良い古書の表紙や興味深いタイトルを見て、とても興奮したことを覚えていた。

無事移転も終わり、新しい図書館の運営が落ちつきはじめた2017年度に入り、「所蔵古書の概要把握と保

存・活用に関する研究」に着手した。その背景には、多くの先生方から当館の古書の価値を教えていただいたこと、書誌データの精度が不十分であったこと、今ある古書をなるべく劣化させず、できるだけ良い状態で次世代に引き継いでいく必要があること、観光に特化した専門図書館である当館だからこそ観光関連古書の充実も検討しなければならぬことを認識したためである。

そして、書誌データの修正作業や古書のデジタル化、保存箱の作成などに着手したが、特に、旅行案内書、国立公園、登山、温泉など分野ごとの歴史を概観し、当館古書の収蔵状況と追加で入手すべき古書のピックアップなどをおこなった過程では様々な発見があった。その成果は館内の古書展示ギャラリーで定期的に展示し紹介している。

ところで、古書というと単純に古い本というイメージを持たれる方もいるかもしれないが、当時の本や雑誌の位置づけは現在と異なる。インターネットやテレビなどがない当時、本や雑誌は今以上に力のあるメディアであり、コミュニケーションツールの一つでもあった。特に雑誌「国立公園」や「ツ

ーリスト」に代表されるような定期刊行物は、誌面上で最新状況が報告されていたことに加え、最前線で活躍する研究者や実務者によって活発な議論が展開されていた。媒体が限られていた当時においては、これらの雑誌が情報共有や意識醸成にも大きな役割を果たしていたと考えられる。

では時代を経た今、古書をどう捉えたらよいかということについては各章で先生方にご執筆いただいたところであるが、巻頭言で西村先生が提示してくださった2つの視点を元に整理すると、以下のようなになるだろうか。

古書から「現代人の思想の萌芽を見出そうという姿勢」については、例えば、多くの人びとが世界を移動する観光の新时代に、極東アジアの国が何をすべきか、そして国際観光と民間交流はどのようなべきか、という大局的な観点に立った木下淑夫の思考（1章）や、国土計画に国立公園や道府県立公園などを予め国土計画に位置付けるべきと訴えた田村剛の視点（2章）、「人」のつながりを大切にして日本の姿を正しく伝えることに尽力した国際観光局の視点（5章）などが挙げられる。

当時、どのようにして100年後にも通じる哲学やビジョンが生まれえたのかが気になるころではあるが、共通点として考えられるのは、それぞれを取り組みの目的が国際社会における日本のプレゼンスの向上や日本人の豊かな生活の実現などであり、観光はそれらを実現するための手段であったということである。当時のキーマンの哲学や熱意、行動力を見てみると、今の日本は観光を通して何を実現しようとしているのか改めて考えさせられる。観光の黎明期を作り上げた先人の真摯な「姿勢」と「先を見通す力」、「利用者本位の意識」こそ、いま我々が学ぶべき点かもしれない。

さらにもう一つの「現代では失われてしまった思想や活動を見出すという姿勢」については、名所図会や道中記などをルーツにマニュアル型・イメージ喚起型に発展してきた日本の旅行案内書の特徴や、移住先の情報を記した地誌としての役割が旅行案内書にあったこと（1章）、緻密な計画に基づき指定されていた国立公園（2章）国際観光ホテル整備の経緯（3章）、お雇い外国人などのアドバイスを受けながら発展していった日本の温

泉地（4章）、ターゲットを見据え、戦略的に海外へ情報発信をおこなっていた国際観光局の取り組み（5章）などが挙げられる。

こうした活動や経緯をひもとくことで、戦前は意外にも諸外国との交流が活発に行われており、海外の先進的な旅行案内書や観光施策を参考にしていたことなど、様々なことが見えてくる。

もちろん、過去や古書が全て優れているという訳ではなく、今とは異なる時代背景で行われていた取り組みを現代で取り入れるべきだという訳ではない。しかし、こうした古書を取りまく状況を概観して感じたことは、過去をイメージで語りがちであること、そして、日本の観光が歩んできた経緯が十分に明らかにされておらず、かつ掘り起こされた歴史が「いま」を研究している人や実務者に共有されていると、言い難いことであった。

今回の観光文化の特集テーマを「古書から学ぶ」に設定したのは、古書から得られる発見や現代でも通用する先人の考え方が意外にも多いことを知っていただけだかと思っただけである。いま、日本の観光をとりまく状況はめまぐるしく変化している。より新しい

取り組みをおこなっていくためにネットや雑誌などから最新の情報を入手することも重要であるが、歴史をひもとくことで見えてくる「いま」と「これから」もある。100年先でも通じる考え方や日本ならではの観光のあり方のヒントを得る、そして自分の尺度を広げる上では古書も大きな力になってくれるのではないだろうか。

2018年10月11日、当館は開設から40年を迎える。「観光はそれ自体が文化であり、その観光文化を向上させたい」という開設当時の想いは大切にしながら、人、知、情報が集まる観光研究・情報のプラットフォームとして、これまでの図書館のスタイルにとらわれない様々な取り組みにチャレンジしている。実践的学術研究機関の図書館として新旧にかかわらず、時代を越えて伝えていくべきことを発信していきたい。そして、「旅の図書館に行けば『研究の種』や『現場に活かすヒント』が見つかる」と言っていただけのような、観光に携わる全ての人の力になれる図書館でありたい。今後も引き続き、ご愛顧、ご指導いただければ幸いです。





# 「100年前の観光」を観光する

## 古書を活用した大学教育の実例

獨協大学山口ゼミ

いまから120年あまり前に設立された「喜賓会」は、多数の欧文出版物を刊行し、訪日外国人客の誘致に尽力しました。その一つ、*Useful Notes and Itineraries for Travelling in Japan*には、いまも有名な観光地だけでなく、すでに消滅した観光施設、サービス、商品などが紹介されています。

この喜賓会の英文ガイドブックに着目した獨協大学外国語学部交流文化学科の山口ゼミでは、現在、「100年前の観光を観光する」研究プロジェクトに取り組んでいます。これは第12回・たびとよカフェ（2018年2月開催）および『観光文化』第236号で報告されたツアー・リズム・リテラシーの実践であり、今号の座談会で取り上げた古書を活用した大学教育の実例でもあります。

学生たちは喜賓会の英文ガイドブックから自分で研究対象を選び、「旅の図書館」や大学図書館で調査を重ね、古書が伝える「消えた観光」の価値を考察した

一文を著しました。ここではゼミの研究結果から、2つの作品をご紹介します。いずれも喜賓会の英文ガイドに掲載された広告のうち、①は「金幣（金兵衛）写真館」、②は「軽井沢ホテル」について調べたものです。

日本と西洋が出会い交流して生まれた観光文化は、いわゆる和洋折衷や和魂洋才とは異なる水準の自律した文化であり、「ハイブリッド」や「ハーフ」ではなく、「第三文化（Third Culture）」として位置付けるべきではないか、という視点から、100年前の「消えた観光」の価値を論じています。

この研究成果の骨子は、観光学術学会・第7回大会の学生ポスター発表の部で発表し、最優秀賞を受賞しました。いまだ試行錯誤を重ねている途中ですが、今後も「旅の図書館」の研究資源を活用させていただき、さらなる研究の深化に努めます。

（山口誠）

### ① 「NIPPON」と出会う大通り

いま横浜の港街の中心部をつらぬく、日本大通り。150年前、ここは日本と西洋の境界線だった。その通りの向こうに広がる外国人居留地である「JAPAN」が生まれた。

それは西洋出身の写真家F. ベアトが1863年ごろから手がけた、日本の人物や風景を撮影して着色した写真であり、のちに横浜写真と呼ばれた観光土産である。西洋のまなざしを色濃く反映した「JAPAN」のイメージは居留地で流行し、横浜写真は多数の写真館で制作されるようになった。

やがて1881年、ある日本人が写真館を開業した。ベアトの直弟子で、



「旅の図書館」を訪問する獨協大学山口ゼミ

その「まなざし」を吸収した日下部金兵衛だった。フジヤマ、サムライ、ゲイシャなど典型的な演出写真を得意とし、鮮やかな絵具で着色された金兵衛の横浜写真は、師を超える成功をみた。だが写真史では、西洋への媚売り、または偽物の日本イメージとして、長らく顧みられることはなかった。

たしかに金兵衛の写真は、ありのままの日本の姿とはいえない。しかし西洋のオリエンタリズムに媚びるだけの「JAPAN」とも言い難い。日本と西洋の境界線に長らく生活した彼は、その二つの「まなざし」を血肉化し、若いころ学んだ焼物の絵付の着色技法を駆使して、独自の「NIPPON」を表現した。それは「日本」でも「JAPAN」でもない、第三文化（Third



Cultures) ひとつの「NIPPON」だったといえる。

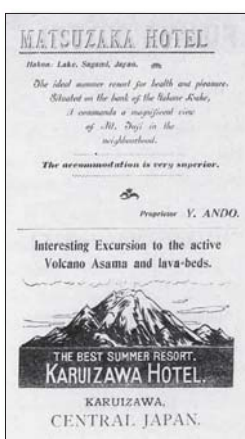
もちろん金兵衛の写真に映し出された「NIPPON」は、どこにもない。そこに足を運ぶこともできない。それでも、あるいはそれだからこそ、居留地の外国人たちは彼の写真館を訪れ、



Useful Notes and Itineraries for Travelling in Japan (第8版、1910年)



「金幣(金兵衛)写真館」の広告(第5版、1907年)



「軽井沢ホテル」の広告(下半分、第5版、1907年)

ベアト仕込みの西洋の写真術と日本の伝統的な彩色技術が交流して生み出した、息を呑むような色彩を湛えた「NIPPON」のイメージを求めたのだろう。

その居留地も、金兵衛の写真館も、もはや消えてしまった。しかし日本大通りは、いまままだある。そこはかつて日本と西洋の境界線だったが、いまは過去と現在の境界線かもしれない。この大通りの向こうに広がる世界を想像しながら観て歩けば、彼方に消えた「NIPPON」と出会うことができるはずだ。

(中植渚、片山さつき、榊原瑠美)

## ② 「消えたホテル」から観える未来

日本を代表する避暑地、軽井沢。その原点には、カナダ人宣教師A・C・シヨーが西洋式の別荘を建て、重要な役割を果たしたことが知られている。だが軽井沢には個人所有の別荘だけでなく、ホテルも存在していた。喜賓会のガイドブックに広告を掲載した「軽井沢ホテル」も、その一つだった。

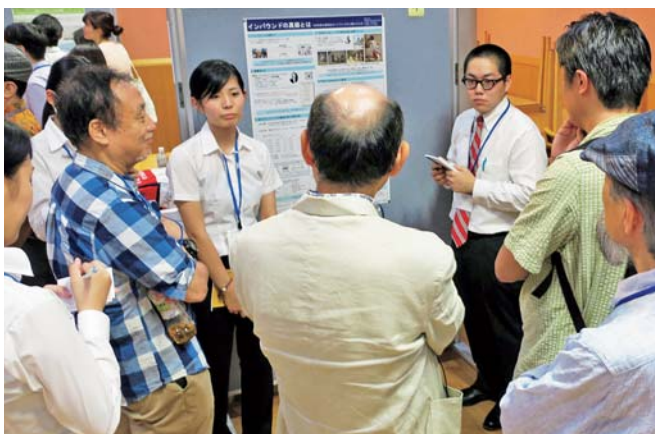
中仙道の宿場町として江戸期に栄え

た軽井沢には、本陣をはじめ多数の旅館があった。明治期に鉄道が敷設された影響で軽井沢宿はひとたび廃れたが、外国人や洋行帰りの日本人が集う国際的な避暑地として再生した同地には、さまざまな別荘に加えて、客室にベッドや洗面台や浴室を備えた西洋式のホテルも建設された。なかでも旧軽井沢宿の本陣の主が1900年に開業した「軽井沢ホテル」は、新しいアイデアを高次に実現したことで、人気を博したと伝えられている。

そのアイデアとは、広縁のある客室だった。広縁は、客室の窓辺の小さな空間であり、客室内に作られた縁側の一種ともいえる。旅館や社寺など伝統的な日本建築では珍しくもない広縁だが、それをベッドや浴室を備えた西洋式ホテルの客室に取り入れたことで、宿泊者は広縁の椅子で談笑し、室内にいながら窓の外に広がる庭や、その後方に開けた景色を感じることができた。室外と室内を明解に切り分け、頑丈な壁で仕切られたホテルの居室に慣れた西洋人にとって、「軽井沢ホテル」の広縁が実現した内と外の融合空間は、独特な価値を發揮したと考えられる。それは日本の伝統旅館でも、また西洋

を模倣したホテルでもなく、その両者を交流させて実現した第三文化(Third Culture)のホテルだった。いまはもう「軽井沢ホテル」は現存しないが、そこで育まれたアイデアは日本各地のホテルに継承されている。時を経て、久しぶりのインバウンドの活況に沸く現在、新たな第三文化のホテルが誕生することも、期待できるかもしれない。

(山本満莉奈、阿部美咲、志村琴乃)



観光学術学会・第7回大会(2018年7月)での研究発表

# 古書の探し方

これまで様々な古書をご紹介してきましたが、古書をどこで、どのように入手すればいいのかわからないという方も多いかと思いますが、そこで、古書をご覧いただける方法をいくつか紹介します。

## 当館で探す

当館には古書が約2300冊あり、内訳は左の通りです。特に観光政策や旅行案内書が充実し

ているほか、「旅」と「ツーリスト」を全巻データでご覧いただけるデジタルコレクションや、木下文庫（ジャパン・ツーリスト・ビューロー）の生みの親である木下淑夫の蔵書 は当館ならではのコレクションです。

分類	蔵書の概要
F 600	観光産業・政策・観光事業 【蔵書例】『国際観光』『日本鉄道史』など
F 601	地誌・観光地事情 地理、地誌、風俗風習、地域の全般的な紹介（社会情勢・生活） 【蔵書例】『日本名勝地誌』『国立公園』『日本風景論』など
F 602	ガイドブック・旅行案内 ガイドブック、観光案内、旅行案内、時刻表 【蔵書例】『Baedeker's Handbook』『Cook's Traveller's Handbook』『日本案内記』『鉄道旅行案内』『旅程と費用概算』など
F 603	地図・パンフレット 地図、パンフレットなど 【蔵書例】『Map of Japan』『日本全国パノラマ地図』など
F 604	旅行記・エッセイ 紀行、旅行記、エッセイ、旅行雑誌など 【蔵書例】『日本アルプス』『特命全権大使米欧回覧実記』など
F 605	文化・芸術 文化、芸術 【蔵書例】『Tourist Library』『英文武士道』など
F 606	その他 【蔵書例】『故木下淑夫君年譜』『志賀重昂全集』など

## 図書館で探す

一般的な方法としては、古書を所蔵している国立国会図書館、大学図書館、地元の公共図書館、専門図書館などで閲覧することです。HPなどから蔵書を検索できる場合も多いので、関心のある分野のキーワードなどから探してみてください。

近年はデジタル化が急速に進んでおり、古書も閲覧しやすくなっています。特に国立国会図書館では順次インターネット公開を進めており、web上で全ページが閲覧できる古書があることに加え、他館の情報を横断的に検索できる機能（NDL Search）などもありますので、ぜひ有効活用してください。

また、観光は多様な分野にわたるため、閲覧したい古書のテーマによっては、p45以降で紹介しているような特定テーマを専門とする専門図書館に蔵書やコレクションがある場合もあります。

地域の歴史をひもとくのに有効な地誌などを探したい場合は、公共図書館や博物館を訪れてみてください。地元に関する様々な資料を収集しており、地域資

料コーナーを設置しているところもあります。

なお、当館では古書は主に戦前に出版されたものと定義していますが、古書の定義は図書館や書店によって異なります。古い書籍でも開架資料として自由に閲覧できる場合もありますので、事前にご確認ください。

## 古書店で探す

全国には観光関連の古書を専門とする古書店があります。観光関連とはいえ、旅行案内書、鳥瞰図、満州関係などそれぞれ得意分野がありますので、ご自身の興味のあるテーマの古書を扱う古書店をぜひのぞいてみてください。また、全国の約900軒の古書店が参加している「日本の古本屋」というポータルサイトで、お探しの古書を横断検索することも可能です。古書店によっては、サイトに掲載していない古書もあり、独自の目録を作成している場合もありますので、詳しくは直接書店にお問い合わせください。

## 復刻版をみる

アルトゥル・ポールマンの『観光学概論』や柳田國男の『遠野物語』など著名な書籍の中には、現代語訳されて出版されているものも多く、書店で購入できます。また、雑誌『国立公園』『鉄道旅行案内』『ツーリスト』『旅行満州』のように、観光史をひもとく上で重要なものは、不二出版やゆまに書房といった専門の出版社から復刻版として出版されているものもあります。シリーズ一式で販売されているため比較的高額ですが、当館をはじめ、大学図書館で購入しているケースも多いのでぜひお問い合わせしてみてください。



「旅の図書館」以外にもあります

# 観光関連の古書・貴重資料を所蔵する 図書館・博物館

観光は幅広い分野に関わることから、当館以外にも観光に関係した図書・資料を所蔵する専門館や博物館も多数あります。  
その中から当館以外に観光関連の古書・貴重書を所蔵する館をご紹介します。(大隅)

## 三康文化研究所附属三康図書館 観光関連テーマ … 地理・地誌、旅行案内、観光事業等

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4 (明照会館1階)

**問い合わせ** 図書部

TEL …………… 03-3431-6073

FAX …………… 03-3431-6082

URL …………… [http://sanko-bunka-kenkyujo.or.jp/sanko-toshokan/toshokan\\_index.html](http://sanko-bunka-kenkyujo.or.jp/sanko-toshokan/toshokan_index.html)

**運営組織** (公財)三康文化研究所

**設置年** 1965年

● **利用案内**…開館日時:平日9:30~17:00

(入館・出納・複写受付は16:30まで)

休館日:土・日・祝/年齢制限:16歳以上/入館料:有料(100円)

● **資料公開**…限定 ● **OPAC**…一部のみ有(一般公開)

● **図書館・蔵書の概要**…1902(明治35)年開館の古い歴史をもつ大橋図書館の蔵書を継承して発足した図書館。1957年、仏教文化の研究を主目的とする財三康文化研究所の設立にともない1964年研究所の附属図書館となり、1966年より一般公開。2018年6月よりFacebookページ公開。

● **蔵書数**…約25.9万冊、雑誌約7,000タイトル(2018年3月現在)。蔵書は大橋図書館旧蔵書と研究所設立以降の受入図書で構成されている。

● **特徴的コレクション/観光関連古書**…1902(明治35)年から解散する1953(昭和28)年まで一般公開されていた大橋図書館の旧蔵書は約18万冊。当時のベストセラー本から全国の地方誌、博文館発行の雑誌など多岐にわたり、まさに古書・貴重書の宝庫。

【**観光関連**】地理・地誌、旅行案内書、観光事業等旅行・観光関連図書も多く、大橋図書館は博文館主を創設者とするだけに、地理・地誌関連図書は質・量とも圧巻である(これらの蔵書はデータ未入力のため、冊子体目録にて検索)。



館内(閲覧室)

地誌関係の古書

## 国際日本文化研究センター図書館 観光関連テーマ … 日本文化

〒610-1192 京都府京都市西京区御陵大枝山町3-2

**問い合わせ** 資料課資料利用係

FAX …………… 075-335-2093

e-mail …………… [riyou@nichibun.ac.jp](mailto:riyou@nichibun.ac.jp)

URL …………… <http://www.nichibun.ac.jp/ja/>

**運営組織** 大学共同利用機関法人 人間文化研究機構国際日本文化研究センター

**設置年** 1988年

● **利用案内**…開館日時:平日9:00~17:00 土:9:00~17:00(要予約)

● **休館日**…日・祝、その他(要問い合わせ)

● **入館料**…無料

● **資料公開**…大学・公共図書館を通して事前申し込み

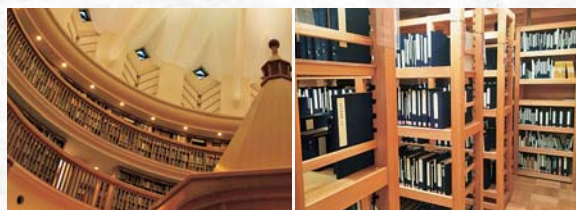
● **OPAC**…一般公開

● **図書館・蔵書の概要**…「日本文化に関する国際的及び学術的な総合研究並びに世界の日本研究者に対する研究協力」をミッションとする国際日本文化研究センター(日文化研)の情報管理施設(図書館)。海外の研究資料を含む日本文化に関する多種・多様な資料を所蔵。

● **蔵書数**…日本語約36万冊、外国語約18万冊、雑誌:日本語7,000誌、外国語約1,500誌。

● **特徴的コレクション/観光関連古書**…地図、古文書・和漢書・和装本、写真、漫画、音声資料・音楽資料、映像、特定外国語資料等を重点収集。医学、物理学、考古学、地理学、民俗学等各分野の著名学者のコレクションも多い。

【**観光関連**】地図、地誌・地史、観光事業、満州関係資料など



館内

書庫

## 神奈川県立川崎図書館 観光関連テーマ … 社史

〒213-0012 神奈川県川崎市高津区坂戸3-2-1

**問い合わせ** 企画情報課

TEL …………… 044-299-7825

FAX …………… 044-299-7826

URL …………… <http://www.klnet.pref.kanagawa.jp/kawasaki/>

**運営組織** 神奈川県教育委員会

**設置年** 1958年

● **利用案内**…開館日時:平日9:30~19:30/土・祝・休日9:30~17:30

休館日:日・毎月第2木・年末年始・資料総点検期間

● **入館料**…無料 ● **資料公開**…公開 ● **OPAC**…有(一般公開)

● **図書館・蔵書の概要**…工業専門図書館としての性質を有する神奈川県第2の県立図書館。1958年の開館以来、工業専門図書館であるとともに公共図書館の機能も果たしてきたが、2018年4月に川崎市高津区かながわサイエンスパーク(KSP)へ移転。同年5月、「ものづくり技術を支える」機能に特化した全国的にも例のない特色ある図書館として開館。

● **蔵書数**…約58.5万冊(KSP約30万冊、外部書庫等約28.5万冊)。開架書架は約7万冊。雑誌は約8,700タイトル。

● **特徴的コレクション/観光関連古書**…ものづくり技術を支える基盤から最先端の専門書・専門誌が揃う。なかでも開館当初から収集してきた社史は約19,000冊に及び、あらゆる産業分野を網羅。わが国を代表する社史コレクションを誇る。

【**観光関連**】社史は日本十進分類法(NDC)により産業別に分類されている。鉄道・航空・観光、旅行代理店・旅館・ホテルなど観光産業関連の社史も充実。Webサイトではバーチャル「社史室」(更新作業中)で書架を覗くことができ、OPACでは業種別の検索もできる。



館内

社史コーナー

## 鉄道博物館ライブラリー 観光関連テーマ…鉄道、交通

〒330-0852 埼玉県さいたま市大宮区大成町3-47

問い合わせ 学芸部

TEL……………048-651-0088

FAX……………048-651-0570

URL……………<http://www.railway-museum.jp/>

運営組織 公益財団法人東日本鉄道文化財団

設置年 2007年

- 利用案内…開館日時:平日10:00~17:00(要事前予約) 土・日・祝10:00~17:00 休館日:火・年末年始(その他要問い合わせ)
- 入館料:有料(一般1,300円)
- 資料公開…公開 ●OPAC…なし
- 図書館・蔵書の概要…鉄道博物館内にある図書室。鉄道工学、鉄道史、鉄道に関する地方史など。
- 統計、地図、社史・年史、伝記、写真、図面などを重点収集している。
- 蔵書数…図書約3.8万冊、雑誌:日本語52誌、外国語6誌。
- 特徴的コレクション(観光関連)…鉄道古文書、時刻表など。



ライブラリー外観



閲覧室

## 京都鉄道博物館 図書資料室 観光関連テーマ…鉄道

〒600-8835 京都市下京区観喜寺町

問い合わせ 図書資料室

TEL……………0570-080-462

URL……………<http://www.kyotorailwaymuseum.jp/guide/index.html#library>

運営組織 公益財団法人交通文化振興財団

設置年 2016年

- 利用案内…開館日時:10:00~17:30(入館~17:00)※平日は要事前予約 休館日:水(祝日は開館)、年末年始/入館料:有料(一般1,200円)
- 資料公開…公開 ●OPAC…有(一般公開)
- 図書館・蔵書の概要…京都鉄道博物館内3階にある図書資料室。鉄道を中心に交通・運輸に関する図書や資料を収集・保存。蔵書数:図書約2.5万冊、雑誌:約7000誌。
- 特徴的コレクション(観光関連)…1900年代初期の鉄道関係資料、鉄道旅行案内など。錦絵、ポスターなど図書以外の貴重資料も多数。古書類は現在デジタルアーカイブ中。 ※備考/公益財団法人交通文化振興財団の本部(大阪)「交通資料調査センター」では、交通の歴史や文化に関わる資料の収集・保存活動を進めており、Web等を通じて公開している。



博物館本館1階



閲覧室

## 日本郵船歴史博物館 観光関連テーマ…船舶、海運、港湾史

〒231-0002 神奈川県横浜市中区海岸通3-9

問い合わせ 図書担当

TEL……………045-211-1923

FAX……………045-211-1929

URL……………<https://www.nyk.com/rekishi/>

運営組織 日本郵船歴史博物館

設置年 1993年

- 利用案内…開館時間:10:00~17:00(最終入館は16:30) 休館日:月(祝日の場合は翌平日)
- 入館料:一般・大学生/400円、65歳以上・中高生/250円、小学生以下/無料
- 資料公開…限定(開架資料のみ公開) ●OPAC…なし
- 図書館・蔵書の概要…日本郵船の社史を通し近代日本海運の歴史を知ることのできる博物館。主な収集分野は日本郵船関係図書、海運実務関連書、船舶・港湾史、海運業関係会社の社史など。戦前の客船文化に関する書籍も閲覧できる。所蔵図書は約13,000冊で、そのうち約1,600冊を公開。閲覧可能図書はWebページで公開している。



博物館外観



閲覧室

## (独)国際交流基金ライブラリー 観光関連テーマ…日本のガイドブック、旅行記

〒160-0004 東京都新宿区四谷4-4-1

問い合わせ ライブラリー

TEL……………03-5369-6086

FAX……………03-5369-6048

URL……………<https://www.jpfc.go.jp/j/about/jfic/lib/>

運営組織 独立行政法人国際交流基金(ジャパンファウンデーション)

設置年 1972年

- 利用案内…開館日時:平日10:00~19:00 休館日:土・日・祝・その他要問い合わせ/入館料:無料
- 資料公開…公開 ●OPAC…有(一般公開)
- 図書館・蔵書の概要…国際交流基金(ジャパンファウンデーション)の実施事業に関する資料や、国際文化交流・文化政策に関する図書資料、外国語で書かれた日本を紹介する図書・映像資料などを所蔵。蔵書数:約3.8万冊、雑誌約510誌。
- 特徴的コレクション(観光関連)…1945年以前に刊行された外国語による日本のガイドブック約130点や、旅行記等約350点を所蔵している。1700年代に海外で刊行された日本見聞記・旅行記も30点ほど収蔵。



閲覧室



開架書架

## (公財)後藤・安田記念東京都市研究所市政専門図書館 観光関連テーマ…都市問題、地方自治

〒100-0012 東京都千代田区日比谷公園1-3

問い合わせ 市政専門図書館

TEL……………03-3591-1264

FAX……………03-3591-1278

URL……………<https://www.timr.or.jp/library/>

運営組織 (公財)後藤・安田記念東京都市研究所

設置年 1922年

- 利用案内…開館日時:平日9:30~17:00/休館日:土・日・祝日・年末年始
- 入館料:無料
- 資料公開…公開
- OPAC…有(一般公開)
- 図書館・蔵書の概要…日比谷公園内にある1922年に開館した古い歴史をもつ都市問題・地方自治に関する専門図書館。統計や郷土資料、研究報告書、行政資料等を重点収集している。蔵書数は日本語約11万冊、外国語約2.2万冊、雑誌:日本語158誌、外国語18誌。戦前の都市政策などを調べるのに有益。



館内(閲覧室)



貴重資料が並ぶ書庫

## 渋沢栄一記念財団渋沢史料館/情報資源センター 観光関連テーマ…社史・年史

〒114-0024 東京都北区西ヶ原2-16-1

問い合わせ 渋沢史料館/情報資源センター

TEL……………03-3910-0005(渋沢史料館)

03-3910-0029(情報資源センター)

FAX……………03-3910-0085

URL……………<https://www.shibusawa.or.jp/>

運営組織 (公財)渋沢栄一記念財団

設置年 1982年(渋沢史料館)、2003年(情報資源センター)

- 利用案内…(渋沢史料館)開館日時:平日10:00~17:00 土・日:10:00~17:00 休館日:月・その他/要問い合わせ/入館料:有料(一般300円)
- 資料公開…公開
- OPAC…なし
- 施設・蔵書の概要…渋沢史料館は渋沢栄一の活動を広く紹介する博物館として1982年に開館。渋沢栄一並びに本邦実業史に関する文書、書簡、写真、書籍、書画などの諸資料を収集。情報資源センターではインターネットで「渋沢社史データベース」、デジタル版「渋沢栄一伝記資料」等を公開しており、旅行・観光関連情報も充実。



渋沢史料館



渋沢社史データベース

## (公財)大宅壮一文庫 観光関連テーマ…旅行・観光関連雑誌

〒156-0056 東京都世田谷区八幡山3-10-20

問い合わせ 事業課

TEL……………03-3303-2000

FAX……………03-3306-4660

URL……………<http://www.oya-bunko.or.jp/>

運営組織 公益財団法人大宅壮一文庫

設置年 1971年

- 利用案内…開館日時:平日10:00~18:00 土:10:00~18:00 休館日:日・祝日/入館料:有料(500円)、会員制(10,000円)
- 資料公開…公開
- OPAC…なし
- 図書館・蔵書の概要…評論家・大宅壮一(1900-1970)の雑誌コレクションを引き継ぐ日本で初めての雑誌専門図書館。明治時代以降130年余りの雑誌を所蔵。雑誌記事索引データベースにより、主な所蔵雑誌の記事を検索することができる。「旅の手帖」、「ジュエル」、「トランヴェール」など旅行・観光関連雑誌も多数保存されており、アンノン族を生み出した「an・anj」「non・noj」の特集記事など過去の歴史をたどる上で役立つ。



外観



なつかしい雑誌が並ぶ書庫



# 旅の図書館 だより

## 旅の図書館 の 40年

旅の図書館 副館長・大隅一志

旅の図書館は、2018(平成30)年10月、  
開設から40年の節目を迎えました。

1978(昭和53)年の開設からの20年は  
「観光文化資料館」として、  
その後の20年は「旅の図書館」へと名称を変え、  
今日まで歩んでまいりました。

この間、時代は昭和から平成へと移り、  
当館を取り巻く社会環境も大きく変わる中で、  
3度の移転も経験しました。

ここでは、周年史に代えて、  
当館の40年の歩みを時代とともに  
振り返り紹介します。

### 旅の図書館40年の歩み小史

観光文化資料館が誕生するまで(前史)

\*世界観光機関(WTO)発足(1月)

「観光文化情報センター」の設置(7月)

当財団資料室内(大手町ビル別館5階)に、  
「教養型旅行者」の情報ニーズへの対応を目指し  
「観光文化情報センター」を設置。

対象者を限定した情報提供サービスからスタートし、  
1976年一般公開。

\*沖縄国際海洋博覧会開催(1975年7月~1976年1月)

機関誌「観光文化」創刊(12月)

1985年5月(Vol.52)から  
2011年3月(Vol.206)まで図書館が編集を実施

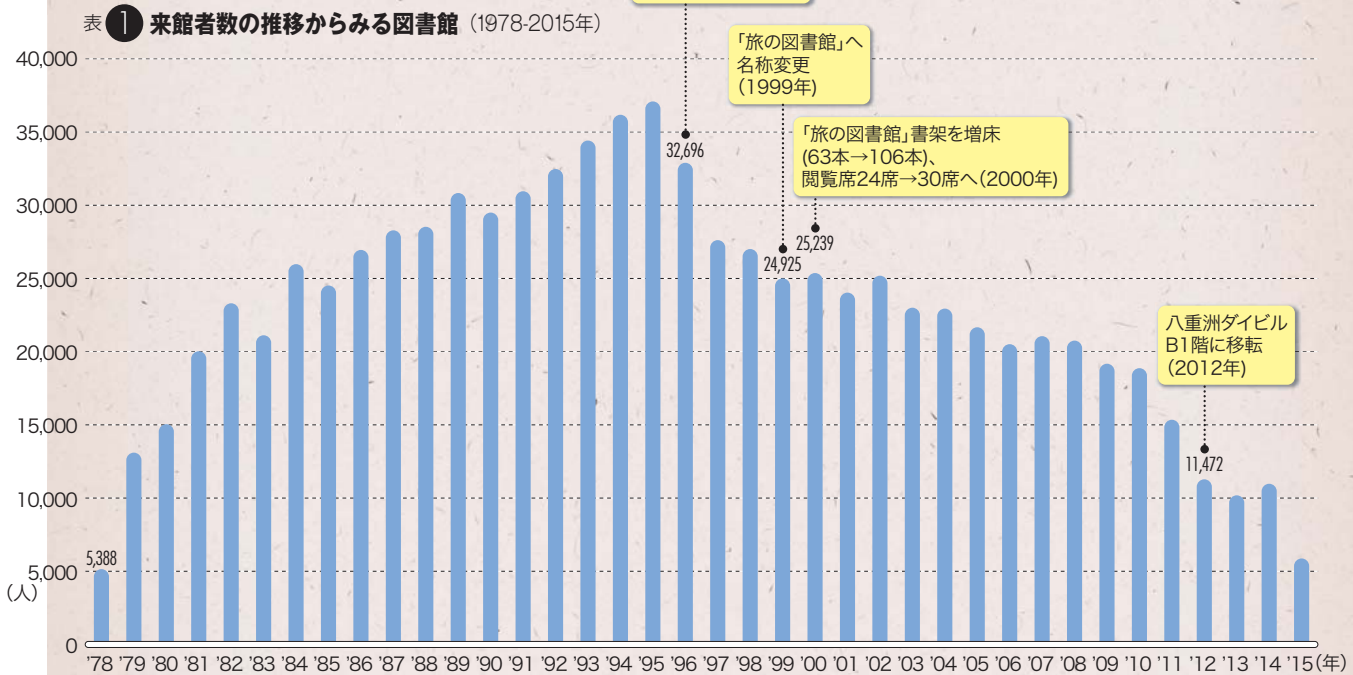
\*「第三次全国総合開発計画」閣議決定(11月)

第1鉄鋼ビル1階から  
第2鉄鋼ビルB1階に  
移転(1996年)

「旅の図書館」へ  
名称変更  
(1999年)

「旅の図書館」書架を増床  
(63本→106本)、  
閲覧席24席→30席へ(2000年)

八重洲ダイビル  
B1階に移転  
(2012年)



観光文化資料館  
開設に対する  
西尾壽男会長の思い

「観光は  
それ自体が  
文化であり、  
その文化を  
向上させたい」



西尾氏は、かねてから観光文化資料館を開設するという夢を持っていた。「旅行は単なる物見遊山で終わってはならない。旅行者が事前に目的地に関して調べ、十分な知識を得てから出かける。その旅行の内容は濃いものになる。交通の便利な場所に専門の図書館を設けて利用者の勉強の手助けをしたいというのが、西尾氏の思いであった。(社内営業部門からの反対意見があるなかで)、「旅行専門の図書館を政府に期待しても実現はなかなか難しいだろうし、世のためにそういう文化的な仕事をするからこそ公益法人に相応しい使命だろう」と西尾氏は考えるのだ。」

※『観光文化資料館二十年史』財団法人日本交通公社理事・社団法人日本交通協会副会長兼理事長 柳井乃武夫氏「観光文化資料館創設者 西尾氏の横顔」原稿より引用

# 草創期 観光文化資料館の開設と図書館としての基盤の確立

1978～1984

場所の制約や周知不足から一般の利用が限定的であった観光文化情報センターを改編・拡充するが、観光文化資料館を東京駅八重洲口そばに開設。当時、日本経済は第一次オイル

ショック以来の不況から抜け出せず低迷のトンネルの中にありましたが、時代は「モノ」への欲求から「ココロ」の豊かさを求めはじめ、新しいタイプの旅行が増え始めた時代でもありま

した。この時期は、周年事業を展開するなかで、観光文化の向上という開設時の理念を受けた文化講演会の開催や、機内誌、時刻表、ガイドブックなどコレクションの充実を図りました。開館6年目となる1984年には来館者数が10万人を突破し、年間来館者数は2万5千人を超えるようになりました。

1978

\*新東京国際空港(現成田国際空港)開港(5月)  
\*日本、世界観光機関(WTO)に加盟(7月)  
「観光文化資料館」開設(10月11日)

東京駅八重洲北口の第一鉄鋼ビル1階に開設。「観光はそれ自体が文化であり、その観光文化を向上させたい」という理念のもと、教養志向型旅行を目指す人への情報提供に資する図書館として誕生。  
【蔵書数】4062点(地図を含む)。

財団法人日本交通公社 世界観光機関(WTO)に加盟



開設当時の観光文化資料館(外観)



館内



館内図(書架レイアウト)

1979 1980

\*第二次オイルショック(2月)

来館者数が1万人を突破(8月)

開設2周年記念「第1回文化講演会」を開催(講師:井上靖氏)(11月28日)

開設3周年記念「第2回文化講演会」を開催(講師:松本清張氏)(2月16日)

\*イラン・イラク戦争勃発(9月)



文化講演会

館名の由来  
(なぜ「観光文化資料館」だったのか)

開設準備段階での仮名称は「旅行図書館」でした。「単なる物見遊山の旅行のための図書館というイメージではない。『観光文化情報センター』が提供してきた『国内と海外の歴史地理、風俗芸術、芸能、民芸、衣装、祭礼、行事温泉保養、味覚探訪など』『学ぶ観光』『文化教養型旅行』についての情報」を提供するところ」という色合いを強く前面に打ち出した名称にしたい、という思いがその背景にありました。

開設当時の思い出

(立教大学名誉教授・溝尾良隆氏)

私は昭和39年に(株)日本交通公社(現JTB)に入社しました。丸の内1丁目1番地に日本交通公社のビルがあり、その地下に図書室がありました。当時は社員が読むための本が多かったので、外人旅行、国内旅行、海外旅行の各担当者はそこから本を借りて、私も随分本を借りましたよ。

(財)日本交通公社(以下、財団)の資料室ができたのは、別館に移転した時です。当初は国鉄から来た方が図書の整理にあつたのですが、全国の図書館と同じ日本十進分類法(NDC)で分類しようとしたので、かつて、鈴木忠義先生(東京工業大学名誉教授)が考えた観光の図書分類に則り、観光や

1991  
1988-90

1987

1985

1984

1983

1982

### 開設4周年企画

国際線の機内誌(33誌)を収集・公開  
国内各地の私鉄やバス時刻表(23種)を展示(10月)

「民族文化の旅ゼミナール」開催(1983-84年計4回)  
\*東京ディスプレイランドオープン(4月)

来館者数が10万人を突破(5月)

開設5周年(10月)

## 成長期

### 来館者の着実な増加

1985~1995

開館5周年を迎えた後も、リ  
ゾット法をはじめとした様々な  
観光政策の展開や旅行市場の拡  
大とともに、来館者数も着実に  
増加していきました。

来館者数は1988年  
には20万人を超え、バ  
ブル崩壊後の低迷する社会経済  
の中でもサービスを下下させる  
ことなく運営を続け、1991  
年には30万人を突破。199  
5年には年間来館者数が約3万  
7千人とピークを迎えました。

\*国際科学技術博覧会(科学万博「つくば85」)開催(3月)

\*国鉄民営化(4月)  
\*「第四次全国総合開発計画」閣議決定/  
総合保養地域整備法(リゾート法)成立(6月)  
\*運輸省海外旅行倍増計画  
(「テン・ミリオン計画」)発表(9月)

来館者数が20万人を突破(2月)  
開設10周年(10月)

\*年間日本人出国者数1000万人達成

\*湾岸戦争勃発(1月)

来館者数が30万人を突破(7月)



来館者であふれる館内(1991年)

### 【文化講演会&ゼミナールの開催】

開設2周年、3周年には、より豊かに収穫ある旅をめざし、井上靖氏、松本清張氏という文壇の巨匠を講師に招いた文化講演会を開催(毎日新聞社共催、NHK後援)。その後、

文化講演会は、(株)日本交通公社創業70周年記念出版『世界旅行-民族の暮らし』を基に題材を設定するかたちで継続され、『民族文化の旅ゼミナール-講演と対話』として、

アカデミズムで活躍されている方々を講師に1983年から1984年まで4回にわたって開催。以降は(株)日本交通公社主催の「JTB旅行文化講演会」として今日に至っている。

### 文化講演会&ゼミナール記録

回	開催日時	テーマ	講師
第1回	1980年11月28日	観光文化資料館開設2周年記念文化講演会 「シルクロードの旅から」	井上靖氏(作家)
第2回	1982年2月16日	観光文化資料館開設3周年記念文化講演会 「古代史の旅」	松本清張氏(作家)
第1回	1983年3月15日	民族文化の旅・春季ゼミナール 「住む・憩う」 南太平洋民族文化の旅、 現代ヨーロッパの家、日本の家	杉本尚次氏(国立民族学博物館教授) 栗田靖之氏(国立民族博物館助教授)
第2回	1983年3月22日	民族文化の旅・春季ゼミナール 「着る・飾る」 見る眼と着る心、 民族衣装とファッション	大丸弘氏(国立民族学博物館助教授) 飯塚信雄氏(明治大学教授)
第3回	1983年10月29日	民族文化の旅・秋季ゼミナール 「創る・祀る」 アジアの民族音楽をたずねて、 日本音楽の古層をたずねて	藤井知昭氏(国立民族学博物館教授) 小島美子氏(東京芸術大学講師)
第4回	1984年2月18日	民族文化の旅・冬季ゼミナール 「働く・遊ぶ」 仕事の民俗学、民族と遊び	松原正毅氏(国立民族学博物館助教授) 岩田慶治氏(国立民族学博物館教授)

旅行として独自の分類を構築した方が  
いいと提案し採用されました。  
その後別館から(株)日本交通公社の  
本社ビルに戻りましたが、その時に  
(株)日本交通公社の図書室と財団の資料  
室が一体になったのではないかと  
思います。当時は(株)日本交通公社調査部の  
情報管理室が資料室を担当していま  
したが、1974年に西尾壽男氏が財団  
の会長になると、財団の公益性を發揮  
すべく、「観光文化振興基金」を創設し、  
その最重点事業として「観光文化資料  
館」を開設したのです。旅行を豊かに  
する文化的情報を社会一般へ提供す  
ることが西尾会長の強い願いでした。  
「観光文化資料館」の前段階として1  
975年に「観光文化情報センター」を  
財団資料室内に発足させ、試行的に首  
都圏のJTBBグループからの問い合わせ  
などに応えていたようでした。利用  
件数も多く、各方面からの要望も強  
かったことを受け、同センターを拡充し  
た形で「観光文化資料館」を開設した  
と聞いています。しかし、鉄鋼ビルの  
1階に開設した段階で、外部の方が旅  
行の下調べや勉強をする場所になっ  
たこともあり、財団職員にとっては少  
し遠い存在になってしまいました。大学  
に観光関連の学部学科が増えてきたこ  
と、インバウンド旅行者の増大、専門  
書と旅行図書との中間の本がたくさん  
発行されるようになったこともあり、  
2016年に研究本部と図書館が一体  
化で「旅の図書館」となったことは  
タイミングとしてたいへんよかったです。  
財団研究員の研究の幅も広がるし、外  
部の方々もじっくりと調べる環境が  
出来上がったのではないかと思います。

1995 1994 1993

開設15周年・特別記念展示「世界と日本の時刻表フェア」開催(10月)

国内外の鉄道およびバス時刻表(約32か国80点を公開)

\*屋久島、白神山地在世界自然遺産、姫路城、法隆寺地域の仏教建造物が世界文化遺産に登録(12月)

月間来客者数過去最高を記録(4月)

来館者数が40万人を突破(7月)

\*阪神・淡路大震災(1月)

\*Windows95、日本で発売(11月)

年間来館者数36,876人を記録(1995年度)

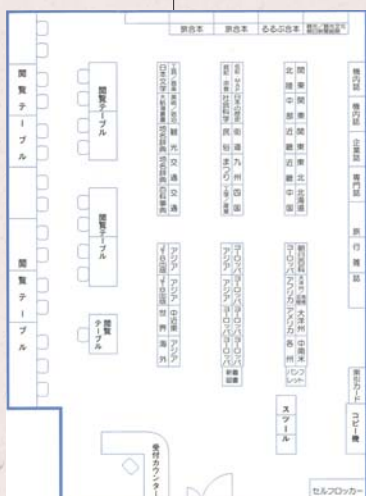
# 転換期

2度の移転、環境変化の中で専門図書館としての力を蓄積  
1996～2015

1996年に最初の移転、1999年には「旅の図書館」へと名称を変更、さらに2012年には2度目の移転を行いました。さらに1990年代後半からのインターネットの急速な普及による旅行情報の収集方法の変化など、図書館を取り巻く環境は大きく変わっていきました。一方でこの時期は、貴重資料のデジタルアーカイブ化や図書館システムの導入をはじめ、時代変化に対応した専門図書館としての機能の充実が図られることも

に、次第に、研究機関が運営する専門図書館としてのあり方を見つめ直すべき時期を迎えてもいました。調査研究部門のある当財団本部との一体的な移転計画が具体化してきたことにより大きな転換期を迎え、本格的なリニューアル準備のため2015年9月末、一時閉館しました。

\*運輸省「ウエルカムプラン21」発表(4月)  
第二鉄鋼ビル1階から第二鉄鋼ビル地下1Fへ移転(10月)  
書架・施設の拡充を目的に10月1日再開館。



館内図 (1996年)



第二鉄鋼ビル移転後の図書館 (館内)

## 観光文化セミナー開催記録

回	開催日時	テーマ	講師
第1回	2003年 10月10日	「世界の風水都市」	目崎茂和氏(南山大学総合政策学部(環境学・地理学)教授)
第2回	2004年 10月13日	「景観論と食文化」	小林亨氏(前橋工科大学教授)
第3回	2005年 10月26日	「日本ポップカルチャーとアキハバラ」	小野打恵氏((株)ヒューマンメディア代表取締役社長)
第4回	2006年 10月26日	「歩きたくなる観光地作り-その五原則と提言八策」	村山友宏氏((社)日本ウォーキング協会副会長)
第5回	2007年 4月26日	「長崎さるく博が切り開いた都市観光の可能性」	茶谷幸治氏(イベント・プロデューサー)
第6回	2007年 10月24日	「歴史的景観の意義と保全活用に向けての諸問題」	岡崎篤行氏(新潟大学工学部建築学科准教授)
第7回	2008年 4月24日	「ラグジュアリートラベルとは何か」	福永浩貴氏((株)アール・プロジェクト・インコーポレイテッド代表取締役、ザ・リヨカン・コレクション代表)
第8回	2008年 10月23日	「観光」の系譜	沢木泰昭氏
第9回	2009年 4月21日	「国土観光のすすめ」	家田仁氏(東京大学大学院教授・当財団専門委員)
第10回	2009年 10月27日	「ジオパークとジオツーリズム-地球に親しむ観光とは-」	矢島道子氏(NPO法人地質情報整備・活用機構)
第11回	2010年 4月27日	「はじまりの奈良、めぐる感動-平城遷都1300年祭の事業戦略と戦術」	福井昇平氏(平城遷都1300年記念事業協会チーフプロデューサー)
第12回	2010年 10月28日	「港の景観形成と美しいみなとまちづくり~清水港を代表例として」	東恵子氏(東海大学開発工学部感性デザイン学科教授)
第13回	2011年 4月26日	「『桜田門外ノ変』映画化と観光振興-茨城の魅力を全国に発信」	橘川栄作氏(茨城県候補戦路室室長補佐・総括)

2007 2006 2005 2004 2003 2002 2001 2000 1999 1998 1997

【蔵書数】19,389冊(図書のみ)。  
来館者数が50万人を突破(5月)

\*長野冬季オリンピック・パリンピック開催(2-3月)  
\*21世紀の国土のランドデザイン」閣議決定(3月)

開設20周年記念式典

「観光文化資料館開設20年を祝う会」を開催、  
「観光文化資料館二十年史」発行(10月13日)  
海外ガイドブックフェア開催(10月)  
1200冊を収集・展示

「旅の図書館」へ名称を変更(4月)

「旅の図書館」は、観光文化資料館開設時から  
当館の特徴を伝える表現(愛称)として用いてきたもので、  
開設20年を機に館名もわかりやすい名称に。

\*蔵書を広く公開することを目的に増床(6月)

インターネット蔵書検索システムを導入(4月)

\*米国同時多発テロ(9月)

\*FIFAワールドカップ・日韓大会開催(5月)

雑誌『ツーリスト』『旅』のデジタル化に着手(7月)

「観光文化セミナー」の開催スタート(10月)

開設25周年を記念してはじまった旅、観光に関する  
様々な分野の専門家によるセミナー。  
2011年4月までに全13回開催

デジタルコレクション(「ツーリスト」「旅」)館内で一部閲覧開始(9月)

\*愛知万博「愛・地球博」開催(3-9月)2005

韓国文化観光政策研究院と研究交流協定を締結

「旅の図書館講座」の開講スタート

「教養指向型(テーマのある旅)の普及を図ることを目的に、  
毎週土曜日の午後開催。2011年1月までに全10回開催

\*「観光立国推進基本法」施行(1月)



「ツーリスト」・「旅」



「観光文化資料館二十年史」



「旅の図書館講座」風景(第5回)

旅の図書館講座開催記録

回	開催日時	テーマ	講師
第1回	2006年 7月8日	「旅して食べて・・・」	向笠千恵子氏(フードジャーナリスト、エッセイスト、 農林水産省食アメニティ・コンテスト審査員)
第2回	2007年 2月3日	「富士の四季を撮る」	樋口健二氏(フォトジャーナリスト)
第3回	2007年 7月7日	「植物を通しての日欧文化交流」	加藤僊重氏(獨協大学国際教養学部教授)
第4回	2008年 1月26日	「まち歩きを楽しむ」	高橋美江氏(絵地図師)
第5回	2008年 7月5日	「落語で楽しむ旅の味わい」	柳家小蝠氏(落語家)
第6回	2009年 1月24日	「鉄道の旅・・・その魅力とわざ」	野村正樹氏(作家)
第7回	2009年 7月11日	「暮らしに息づく京都1200年の文化資産」	土居好江氏(NPO法人遊悠舎京すずめ理事長、 京都文化観光研究所所長)
第8回	2010年 1月23日	「昭和レトロを楽しむ旅」	串間努氏(昭和レトロ文化研究者)
第9回	2010年 7月10日	「日本のスピリチュアルな世界-里山・神話の里」	ケビン・ショート氏(ナチュラリスト、フォークロア 研究者)
第10回	2011年 1月29日	「マカオと日本 今昔(いまむかし) 世界文化遺産の基盤を 築いたのは信長、秀吉!-「鉄」と「銀」を交換した戦国意外史-」	沢木泰昭氏(旅行ジャーナリスト)

2008

\* iPhone 日本での発売開始(9月)  
 \* 観光庁発足(10月)  
**開設30周年、記念講演会開催**(10月4日)  
 講師：旅行作家・山口由美氏  
 「だから世界の旅は面白い」、  
 ドイツ文学者・エッセイスト  
 池内紀氏「旅する心」



開設30周年記念講演会チラシ  
 特別展示開催風景

2011 2010

**特別展示の企画開催スタート**(2月)  
 図書館の蔵書を中心としたテーマによる企画展示を実施。  
 2015年2月までに全21回開催  
**来館者数が80万人を突破**(4月)



\* 東日本大震災、福島第一原子力発電所事故(3月)  
**海外電子ジャーナル専用PCにて供用開始**(7月)

2013 2012

公益財団法人に移行(4月)  
 長期経営計画「22ビジョン」を策定。  
 「旅の図書館が実践的学術研究機関の一組織として機能する」  
 方向性が打ち出される。  
**八重洲ダイビル地下1階に2度目の移転**(4月)  
 【蔵書数】約3万2000冊

**図書館システム(LI-MEDIO)運用開始**(4月)  
 クラウド型の図書館システムの導入。  
 蔵書の管理及び検索機能が格段に向上。

**デジタルコレクションのビューワーを更新**(2014年4月)  
 移転を見据えた新たな図書館構想に着手  
 (2014年4月~7月)  
**圖書の独自分類の構築・導入**  
 (2014年7月~2015年6月)  
**海外電子ジャーナル追加2誌の利用開始**  
 (2014年8月)

**特別展示開催記録**

回	開催日時	テーマ	概要
第1回	2010年2月15日~ 2010年2月26日	「フットパスを歩く旅」	国内外の歩くことを楽しめる観光地についての資料を展示。
第2回	2010年3月1日~ 2010年3月31日	「奈良・平城京」	平城遷都1300年に際し、奈良や平城京に関する資料を展示。
第3回	2010年4月19日~ 2010年5月28日	「上海」	上海万博(2010年5月1日~10月31日)の開催に際し、上海や中国に関する資料を展示。
第4回	2010年6月7日~ 2010年6月30日	「W杯開催地 南アフリカ」	サッカー・ワールドカップ南アフリカ大会(2010年6月11日~7月11日)の開催に際し、南アフリカに関する資料を展示。
第5回	2010年7月12日~ 2010年8月27日	「家族旅行と道の駅」	高速道路無料化に伴う、夏休みのマイカー旅行向けの資料や道の駅のパンフレットを展示。
第6回	2010年9月6日~ 2010年10月1日	「ソウル+αで楽しむ韓国 -忠清南道、順天-」	2010年世界大百済典(2010年9月18日~10月17日)の開催に際し、韓国に関する資料を展示。
第7回	2010年11月8日~ 2010年12月3日	「冬こそ北欧でオーロラ」	ノルウェー、スウェーデン、デンマーク、フィンランド、アイスランド、グリーンランド、フェロ-諸島に関する資料を展示。
第8回	2010年12月6日~ 2011年1月28日	「さらに遠くの青森へ」	東北新幹線全通(2010年12月4日)を記念し、青森県の観光に関する資料を展示。
第9回	2011年2月7日~ 2011年4月1日	「九州おひなまつりめぐり」	2月~3月にかけて九州各地で開催される「おひなまつり」イベントに際して、九州のおひなまつりに関する資料を展示。
第10回	2011年7月4日~ 2011年8月31日	「今年の夏は避暑地で ロングバケーション」	夏季の節電対策の一環として、避暑地(観光地)でも滞在に関する資料を展示。
第11回	2012年7月2日~ 2012年8月31日	「ロンドンオリンピック」	ロンドンで開催される第30回夏季オリンピック(2012年7月27日~8月12日)に際して、イギリス、ロンドン、オリンピックに関する資料を展示。
第12回	2012年10月1日~ 2012年11月30日	「東京駅からまち歩き」	東京駅のリニューアル(2012年10月完成)を記念し、東京駅と其の周辺地域の歴史、建築、街並み、宿泊施設等の資料を展示。
第13回	2013年1月7日~ 2013年2月28日	「LCCで楽しむ新しい空の旅」	LCC元年(2012年)に際して、LCCを利用した旅の楽しみ方、LCCのビジネスモデルを支える仕組み等に関する資料を展示。
第14回	2013年4月1日~ 2013年5月31日	「観光学を考える」	国内外の観光学の言論および理論を扱う図書および研究論文等、観光学を考える上での様々な資料を展示。
第15回	2013年7月1日~ 2013年8月30日	「聖地を巡る旅」	60年に一度の出雲大社の大遷宮、20年に一度の伊勢神宮の式年離宮、そして富士山の世界文化遺産登録を記念し、国内外の聖地を訪れる旅行ガイドブックや聖地に関する研究図書等の資料を展示。
第16回	2013年10月1日~ 2013年11月29日	「観光における"食"の役割」	"旅と食"に関する国内外の研究図書等の資料を展示。
第17回	2014年1月6日~ 2014年2月28日	「なぜ人は旅するのか」	観光心理学の専門書や旅の歴史に関する国内外の図書等を展示。
第18回	2014年4月1日~ 2014年5月30日	「おもてなしとホスピタリティ」	2020年東京オリンピック(2020年7月24日~2020年8月9日)の開催決定に際して、おもてなし、ホスピタリティに関する資料を展示。
第19回	2014年7月1日~ 2014年8月29日	「観光資源と地域の魅力」	日本交通公社の研究成果を基に監修した写真集『美しき日本 旅の風光』の出版に際し、写真集とともに観光資源と地域の魅力に関する資料を展示。
第20回	2014年10月1日~ 2014年11月28日	「日本の温泉地と観光」	日本交通公社と国内の代表的温泉地が連携して取り組んだ「温泉まちづくり研究会」の成果、及び温泉地と観光に関する資料を展示。
第21回	2015年1月5日~ 2015年2月27日	「日本を旅した外国人」	2013年に訪日観光客数が年間1000万人を突破したことに際して、日本を旅した外国人に関する資料を展示。

2014

「たびとじよCafe」の開催スタート(11月)  
研究者や実務者との気軽な交流の場の創出をめざし、  
八重洲ダイビルでの旧館時代に5回開催。南青山に移転後も継続開催。

2015

移転リニューアル準備のため一時閉館(2015年10月〜2016年9月)  
南青山への移転準備のため1年間休館。  
図書・什器等を倉庫に一時保管し、資料室資料の統合作業、引越作業に入る。

# 再生期

## 新たなコンセプトの専門図書館として再出発

1年間の一時閉館を経て、当財団本部とともに港区南青山に移転。2016年10月、観光

の研究や実務に役立つ図書館、という新たなコンセプトの専門図書館としてリニューアル開催

しました。  
「観光の研究・情報のプラットフォーム」を目指す日本交通公社ビルの中核的な役割を担うべく、運営を行っています。

2016

文部科学省から科学研究費補助金取扱規程に規定する  
学術研究機関の指定を受ける(4月)  
日本交通公社ビル竣工(8月9日)  
\*港区南青山に当財団本部とともに移転(引越)(8月10日〜21日)  
\*閉館準備(8〜9月)  
関係者を招いた内覧会&たびとじよCafe(特別版)を3回開催(9月)  
旅の図書館リニューアル開催(10月3日)  
開設当初の理念を受け継ぎつつ、観光の研究者・実務者向けの図書館としてリニューアルし再開館。  
【蔵書数】約6万冊。  
観光文化231号「観光の研究と実務に役立つ図書館」を目指して「刊行

2017

国連世界観光機関(UNWTO)の寄託図書館に認定(3月)  
リニューアル開催1周年事業を実施(10〜12月)  
1周年を記念してニュースレター「たびとじよ」刊行、第11回たびとじよCafe開催、パネル展示  
旅の図書館総監修「ツーリスト(大正期)」復刻版 ゆまに書房より刊行(9月)

2018

古書・稀親書のデジタルアーカイブ化(及び保存箱作成)に着手(1月)  
専門図書館協議会より平成30年度団体功績表彰を受賞(6月)  
開設40周年記念事業を実施  
第15回たびとじよCafe開催  
観光文化239号「古書から学ぶ」刊行  
古書展示ギャラリー特別展示(第1弾〜第3弾)



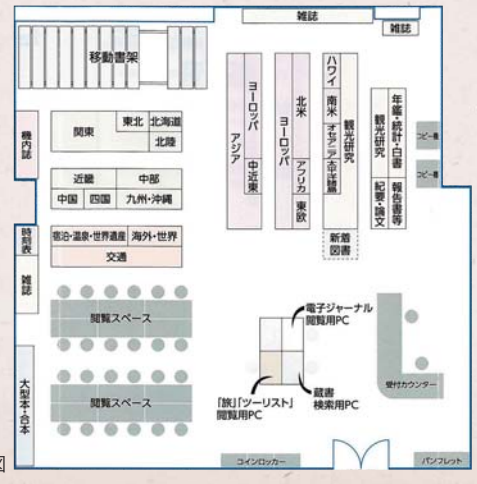
八重洲ダイビル地下1階移転後の図書館(館内)



たびとじよCafe(第2回)



関係者を招いた内覧会&たびとじよCafe(特別版)を3回開催(9月)



館内図

## たびどしよ コレクション ができるまで



開設当時のリーフレットに紹介されている古書・稀観書

旅の図書館の蔵書（コレクション）は、旅・観光をテーマとしたものであることが特徴です。これらは40年にわたる運営の中で収集を重ね、少しずつ構築されてきました。当館の場合、これらのコレクションには、開設以降の周年事業における企画展示などを契機として重点的に収集されはじめたものも少なくありません。また、地域的な関心

や建築、民俗（族）学、産業遺産、イスラム文化など、歴代館長の経験や興味、嗜好などが反映されていることも専門図書館の特徴といえます。

当館の独自分類のひとつである「F (Foundation) 分類」の資料は、当館の蔵書のなかでも、とりわけ「旅の図書館（たびどしよ）」ならではのコレクションです。ここでは、当館自慢の蔵書が構築されてきた経緯をご紹介します。

### 古書・稀観書

戦前を中心とした旅行・観光関連の貴重資料は現在約2300冊。「観光文化資料館」の開設（1978年）当時、すでに約500冊の稀観書がありました。これらの中には、当財団の前身であるジャパン・ツーリスト・ビューロー（1912年創立）の生みの親である木下淑夫氏が収集してきた蔵書や同氏の意を受け継いで収集された「木下文庫」も含まれています。当時のリーフレットには、『特命全権大使米欧回覧実記』『日本案内記』『鉄道旅行案内』『Baedeker's Handbook』などが紹介されています。その後、少しずつ古書・稀

観書の収集を続け、寄贈などもいただき、次第に充実してまいりました。しかし、これらは、一般書架とは別のところに保存されていたり、書架が手狭なことから倉庫に預けていた時期もあり、その存在は一般の利用者に充分認知されてはいませんでした。

南青山への移転にあたっては、分類を見直し、古書・稀観書専用の書架を設置するとともに、ギャラリー展示を行うようにしたこと、多くの来館者にその存在を知っていただけるようになり、外部の博物館での企画展示に協力する機会も増え、あらためて所蔵する古書の貴重さを認識しています。

一方で、こうした古書・稀観書は、破損や劣化も目立つようになり、長期的な保存と利便性の向上が課題となってきました。ジャパン・ツーリスト・ビューロー（当財団の前身）の雑誌「ツーリスト」（1913年創刊、日本で最も長く続いた旅行雑誌「旅」（1924年創刊）は、開設30周年を記念してデジタルアーカイブ化に着手し、現在、両誌とも創刊号から前者は終刊まで、後者は2004年1月号まで、



館内の専用PCで閲覧できる「デジタルコレクション」

当館内で「デジタルコレクション」として閲覧いただけます。さらに開設40周年を迎え、2017年度からは残る古書稀観書の本格的なデジタルアーカイブ化に着手しています。

### ガイドブック

旅の情報提供を目的として開設した当館では、当初からガイドブックを収集してきました。特に海外のガイドブックの収集には力を入れ、『ミシュラン』、『フォーダーズ』の2シリーズは開設以来長らく収集を続けてきました。1990年代は、来館者の9割が海外の情報を求めていた時代で、1996年には『ロンリープラネット』『フォーダーズ』のシリーズ全点を購入しています。記録によると、『ロンリープラネット』は、当

時当館で最も利用率の高いシリーズであったようです。開設20周年にあたる1998年には、海外ガイドブック1200冊を収集し展示しました。南青山への移転・リニューアルにあたっては、収蔵方針の見直しに伴い、ガイドブックは網羅的収集から厳選収集へと変更しました。



長年収集してきた古いガイドブック

### 機内誌・時刻表

ガイドブックとならぶ当館の特徴的なコレクションに機内誌と時刻表があります。

#### ①機内誌

機内誌は、1982年の開設4周年企画として、日本に乗り入れている各航空会社の協力を得て、国際線の機内誌（搭乗しなれば読めないイン・フライ



旅の図書館  
**ニューアル**  
**回想録**  
 2014-2016  
 背景と経緯

開設4周年を記念して開催した  
機内誌展示



ト・マガジン) 33誌を集め公開したことで、メディアにも取り上げられ話題となりました。以来収集を続けてきており、現在も収集している機内誌は、国内・海外合わせて約40誌(すでに就航していない航空会社の古い機内誌等を含めると約70誌)に及びます。海外の航空会社の機内誌は、国立国会図書館にも納本されていないため、当館は様々な航空会社の機内誌が古い時代のものも含めて閲覧できる数少ないの図書館といえます。

②時刻表  
 機内誌と同様に、開設4周年

企画(1982年)として、国内各地の私鉄やバス時刻表(23種)を展示し、大型時刻表では省略されている部分も調べられるとあって好評を得ました。また開設15周年(1993年)には、記念イベントとして、特別記念展示「世界と日本の時刻表フェア」を開催し、国内外の鉄道およびバス時刻表(約32か国80点)を公開し、旅行ファンに加え、時刻表マニアが多数来館



開設4周年を記念して開催した時刻表展示

したといえます。そのほか、多くの寄贈もいただき現在にいたっています(ただし1985年以前の時刻表については、複製版を除き閉架資料として扱っており、研究目的での閲覧に限定しています)。

### 調査研究資料

現在、当館の書架には、観光に関する各種研究レポートや統計資料が一般の研究書・実務書と一緒に配架されています。「灰色文献(一般の出版流通にのらない資料)」といわれるこれらの資料の多くは、当財団の50年余りの研究活動の中で収集してきた調査研究資料で、研究部門があった本部資料室にあり、非公開資料として扱ってききました。南青山への移転・リニューアルを機に、可能な限り公開していきます。

### 観光関連社史

当館が所蔵している社史は、旅行や運輸・交通、宿泊等の観光関連産業を中心に約320冊。社史の刊行時に寄贈いただくなどして少しずつ充実させてきましたが、南青山への移転・リニューアルを機に、利用者により分かりやすく利用いただけるよう「社史コーナー」を設置し配架しています。

本年、開設40周年記念事業として、観光関連社史の収集強化に取り組んでいます。

### UNWTO関係資料

当館は2017年3月、国連世界観光機関(UNWTO)の寄託図書館に認定されました。これを機に、『Yearbook of Tourism Statistics』『Compendium of Tourism Statistics』など従来か

### 地域情報誌

当館でこれまでに収集している選りすぐりの地域情報誌は現在約110誌。2017年より収集をはじめた最も新しいコレクションの一つです。主要な都市や観光地で発行されている地域情報誌は、その地に足を運ばなければ見ることができず、市販のガイドブックにはない地域ならではの魅力にあふれた情報の宝庫でもあり、今後も積極的に収集していく予定です。

## 1 リニューアルの背景

2016年の南青山への移転は、長らく別々の場所で運営してきた当財団本部との一体化、およびコンセプトの変更による新たな図書館への転換という点で、過去2度の移転とは異なる大きな意味を持っていました。特に移転計画が本格的に動き出

した2014年から、1年間の一時休館を含めリニューアル開館までの約2年半は、新たな図書館づくりへの様々なチャレンジの連続でした。ここでは、リニューアルの背景とその経緯を紹介いたします。

3度目となるこの移転では、取ってコンセプトを変えてリニューアルをすることになりました。その大きな理由は、1990年代後半からのインタ

ーネットの急速な普及による旅行情報収集手段の変化により、旅の下調べを目的とした図書館としての利用価値が低下してきたことが挙げられます。こうした状況を背景に、今後の図書館が、旅行情報について紙媒体を中心に提供する図書館

のままで将来的な利用者ニーズへの対応が難しいことは、次第に認識されるようになっていきました。2010年7月には、

本部資料室の存在や観光・旅行関係のシンクタンクとしての当財団の強みを活用できる「観光分野の調査・研究のための専門図書館」という方向性も提案されています。しかしながら、その実現の前提となる本部との一体化は容易ではなく、2012年には八重洲ダイビルに2度目の移転。図書館を取り巻く厳しい環境下での運営が続き、厳しい環境下での運営が続き、リニューアルへの大きな転機となったのは、当財団が公益法人認定を機に2012年に策定した長期経営計画「22ビジョン」において、「実践的な学術研究機関」としての組織像が打ち出され、基本方針の一つに「旅の図書館が機関の一組織として機能する」ことが位置づけられたこととです。これによって、観光研究機能に対応した図書館の方向が明確になりました。そして、学術研究機関としての機能および経営基盤の強化のため、当財団本部と図書館が一体となった自社ビル建設がいよいよ具体化したことで、本格的なりニューアルへの取り組みが始まりました。

## 2 構想策定、新たな図書館像を描く

2014年4月～7月

リニューアルは必然的な流れでしたが、それだけで現在の図書館の姿が導き出されたわけではありません。「22ビジョン」策定時に描かれた図書館の方向は、①専門性の強化、②研究ライブラリー機能の強化、③広報機能の強化、④研究員の利用性の向上、⑤観光文化の振興に寄与する蔵書の充実といったものでした。リニューアル後の現図書館も、基本的にはこれらの機能の充実を図る方向にあります。ただしこれらの機能は、必ずしも公開性の高い図書館でなくとも、研究部門のあった当財団本部資料室の機能を充実させていくことで、ある程度対応は可能です。事実、「22ビジョン」を受けた検討段階では、いわば企業内ライブラリー的な閉架型の図書館という選択肢も残されていきました。今回のリニューアルにあたっては、単なる本部との物理的な一体化にとどまらず、学術研究機関としての組織活動の一翼を担う図書館とは？ という本質的な課題に正面から

向き合い、「組織の価値を高めることにも寄与できる図書館のあり方」をあらためて見つめ直す必要がありました。

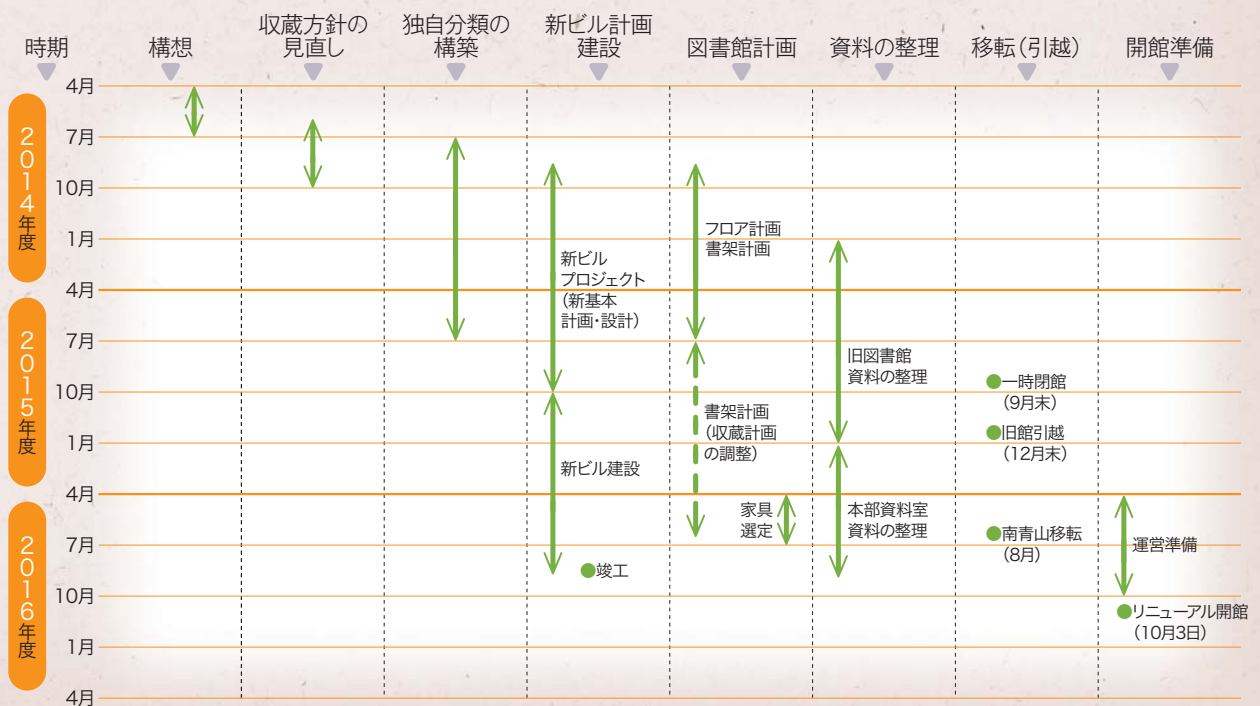
移転がいよいよ具体化してきた2014年4月。最初に取り組んだのは、現状にとらわれず、学術研究機関の図書館としてのあり方を徹底的に探り、その具体イメージを青写真として描くことでした。そのため、図書館を取り巻く動きを知り、図書館の持つ新たな可能性を引き出すべく、様々な公共図書館や専門図書館に足を運び、そのヒントを探しました。そして図書館職員全員で議論を重ね、目指す新たな図書館像を構想にしました。幸いこの構想は組織に概ね受け入れられ、リニューアルの方向性が定まりました。構想策定時に描いた図書館像は、「観光の研究と実務に役立つ図書館」というコンセプトによってリニューアル後の図書館の姿としてかたちとなり、現在の運営のなかに息づいています。

## 3 蔵書を再構築する

2014年4月～7月

コンセプトの変更による新たな図書館づくりへの第一歩は、

図 1 移転・リニューアルの経緯(2014-2016年)



主たる利用対象として想定した観光の研究者や実務者に重点を置いた蔵書の再構築であり、そのための収蔵方針の見直しでした。それは、移転後の所蔵スペースに制約があることを前提に、旅の図書館にある蔵書と今後統合する本部資料室資料の中から、「何を残し」、「何を除籍（廃棄）するか」の選択基準をつくることでもありました。

収蔵方針の見直しにより、旅の下調べ向けのガイドブックや旅行記（エッセイ）などの旅行情報提供のための資料は大幅に削減することになりました。一方、これまで当館が収蔵してきた様々な国内外のガイドブックや機内誌、時刻表などの古いものは、当財団と同じく学術研究機関である大学の付属図書館にもない特徴的な資料であり、観光研究の上ではアーカイブ資料としての価値をもちうるため、厳選し継続して保存することになりました。このように、蔵書の再構築にあたっては、全ての蔵書を対象に、観光の研究および実務の参考に資するかどうかの観点から見直しを行いました。

## 4 独自分類に チャレンジする

2014年7月  
2015年6月

収蔵方針の見直しとともに、より専門性の高い図書館を実現する上で不可欠な取り組みが、観光研究分野の専門資料に対する独自分類の導入です。これまで旅・観光に関する一般の図書・雑誌を中心に収集してきた当館では、開設以来、公共図書館と同様に日本十進分類法（NDC）を用いて分類してきました。しかし、今後重点とする観光研究分野の専門資料は様々な領域に関わるため、NDCの第三次区分の一つに過ぎない「689（観光事業）」の中にすべて収めることにはもともと無理がありました。加えて、わが国では歴史の浅い観光学の体系が十分確立されておらず、そのまま適用できる分類方法もありませんでした。

このように、独自分類の必要性は十分認識しつつも、取り組むとすれば、独自分類を再構築したうえですべての蔵書の分類を見直し、図書ラベルの貼り換えや図書館システムの目録データの修正を行うという大がかり

な作業になるため、それなりの覚悟が必要になります。当館と同様に特定テーマをもち、独自分類を行っている専門図書館として取材した「食の文化ライブラリー」・「松竹大谷図書館」・「広告図書館（現アド・ミュージアム東京）」は、いずれも各館の所蔵資料の特性に合わせた丁寧な独自分類を行っており、専門図書館における独自分類の必要性を痛感させてくれるとともに、独自分類を導入する上で多くの示唆を与えてくれました。

こうした経緯を経て、現在当館が観光研究資料に用いている「T（Tourism）分類」という独自分類は、国内の観光学の第一人者であり当財団の専門委員・評議員でもおられた鈴木忠義氏（東京工業大学名誉教授）の観光学の体系、国内外の「観光」「Tourism」の概論が書かれた主要図書の目次などを参考にしつつ、当館の所蔵資料に合致するように考慮し、本部研究員とともに2014年7月から約1年をかけて検討を重ね構築したものです。当館の独自分類は、観光研究分野では国内で初めての分類方法ということで、国立国会図書館にも注目いただきました。

図2 構想策定時に描いた図書館像（2014年5月時点）



なお、当館では、当財団刊行物や調査研究報告書、ガイドブック・機内誌・時刻表、古書・貴重資料などの特徴的な蔵書をアピールするため、「F(Foundation)分類」というもう一つの分類方法も併せて構築しました。現在、これら2つの独自分類と、基礎的な文献の分類に用いる従来の「NDC分類」を組み合わせた3つの分類方法によって蔵書の管理を行っています。

## 5 図書館を計画する

2014年8月  
2015年6月

2014年8月からは、社内に自社ビル構想プロジェクト会議が設置され、いよいよ新社屋の建築に向けた構想、計画・設計が動き出しました。当然のことながら、本部との一体化を伴う図書館の計画も、図書館単独では進めることはできず、社屋全体の機能や空間のあり方を検討していくなかで、新たな役割を発揮できる図書館計画を具体化していく必要がありました。そのため、図書館計画は、当財団全体のプロジェクト会議の分科会の一つとして、本部研究員

もメンバーとして参画しながら検討を重ね、少しずつ組織全体での共有化を図っていきました。

「観光の研究・情報のプラットフォーム」をめざす新社屋（日本交通公社ビル）において図書館は、当財団と外部の人や組織をつなぐための中核的な存在としての役割が期待されました。当財団の総合受付を兼ねたカウンター、研究活動を「見える化」するために設けたギャラリ

ーや研究員のミーティングにも使える閲覧席、ミニ研究会から100人規模のシンポジウムまでフレキシブルな活用が可能なメインライブラリーなどは、既存の図書館の発想から抜け出して、図書空間を最大限に活かした「観光の研究・情報のプラットフォーム」づくりを徹底的に追求するところから生まれていきました。

計画は他の部門との調整を繰り返しながら、概ね2015年6月までに骨格ができあがり、2015年10月からは建築工事へと移りました。ただし、書架の計画（蔵書の種別配置計画）もこの時点でほぼ固まりましたが、本部資料室も含めた図書・資料の選別・再分類が完了する移転間際（2016年7月）ま

で、収蔵計画の見直しは幾度となく続きました。

## 6 図書・資料を選別・再分類する

2015年1月  
2016年7月

収蔵方針の見直し、独自分類の構築が完了した次のステップは、書架計画と並行しての図書・資料の選別・再分類、装備（図書ラベルの貼り換えなど）、図書館システムの目録データ修正、そして除籍作業です。

移転前の蔵書数は、図書館約5万冊（図書3・7万冊、雑誌1・3万冊）、資料室約1・5万冊（図書1・3万冊、雑誌0・2万冊）で、合わせて約6・5万冊。その他倉庫にある未整理資料を含めると7万冊近くに及びます。一方で移転後の書架の収蔵規模は、資料室との重複図書や収蔵方針の見直しによる削減を前提に、収蔵能力の高い書架（移動書架）の導入により確保可能な6〜7万冊を目標としました。そのため、移転後の蔵書の増加にも対応していくには、1万冊を超える図書の削減が必要となりました。こうした図書・資料の選別作業で最も苦労したのは、除籍対

象となった図書も運営している間は廃棄できないため、図書館としての通常運営に支障がないように効率よく作業を進めることでした。この選別作業や再分類作業は日々、開館時間だけでなく、開館前と閉館後の時間も活用してスタッフで少しずつ進めていきました。

図書館の図書・資料の選別から除籍作業までの一連の作業はダイビルを退去する2015年12月までに終了し、その後は資料室資料の作業に移りました。

なお、約6万冊に及ぶ蔵書の再分類と図書ラベル等の再装備にかかる作業は、専門資料を対象

とするため外部委託せず、すべて当館のスタッフ自身の手で行いました。期間的な制約がある中で膨大な作業でしたが、結果的に図書館を運営する職員が自館の蔵書を熟知するうえで貴重な機会となりました。

## 7 一時閉館しダイビルを退去する

2015年10月  
2015年12月

移転（引越）準備のため、図書館は2015年9月末に一時閉館。八重洲ダイビルを退去する12月末までの3ヶ月は、図書・資料の除籍・廃棄作業や図書ラベルの貼り換え、引越作業などに追われました。除籍図書のうち、まだ利用価値が高いガイドブックや紀行書など約3000冊については、幸い、当財団を事務局とする「温泉まちづくり研究会」メンバーでもある阿寒湖温泉（北海道釧路市）と由布院温泉（大分県由布市）が快く引き受けてくれることになりました。



リニューアル開館前の図書館（開館準備中）

## 8 資料室資料の整理・統合に 取り組む

2016年1月～7月

2016年1月からは当財団本部資料室が有する資料約1・



左：本を寄贈した阿寒湖温泉（まりむ館）、右：由布院温泉（由布市ツーリストインフォメーションセンター）



移転後に引き継ぐ図書・資料および什器備品は1年間埼玉県久喜市の倉庫に預け、12月末、八重洲ダイビルを退去しました。

5万冊の整理・統合作業に移りました。これらは長年調査研究活動のなかで収集してきた国内外の観光研究書や実務書、調査報告書、統計資料などで、図書館とは別の分類方法で管理してきた非公開資料です。図書館との重複本をチェックしながら、再分類、図書ラベルの貼り替えなどを実施し、可能な限り公開することとしました。

## 9 家具の調達に 奔走する

2016年4月～6月

現図書館のフロアは、木製家具を中心とした落ち着いた雰囲気の間となつています。特に図書館への入口となる1Fは、「カフェ風」イメージでデザインしています。これらの家具のデザインや選定にも図書館として主体的に関わりました。たとえば1Fの受付カウンターは、来館者とスタッフとの関係性にも配慮しその高さや幅も慎重に検討しました。書架や雑誌架、メインテーブルも、細かなデザインにまでこだわって特注した

ものです。また、1F、B1Fの閲覧テーブルやイス、ソファなどは、職員自ら幾度もショールームに足を運び選定したもので、それだけにこだわりと愛着があります。

もちろん図書館の家具は、新しいものばかりではありません。1Fのエントランコーナりの雑誌架、ガーデンラウンジ奥の低書架、木製イス（3脚）、そしてB1Fのカウンターは、図書館を継承する意を込めた旧館時代の思い出の家具たちです。

## 10 南青山への移転、 リニューアル開館 する

2016年8月～10月

2016年8月10日～14日、  
本部の総務・研究部門に先立ち



リニューアル開館前の図書館（開館準備中）



引越風景（移転時のダンボールの山）

港区南青山へ引越。久喜倉庫にある旧館の資料と本部資料室資料の2箇所からの引越作業となりました。この移転時の資料はダンボール約2300箱分（図書館1500箱、資料室800箱）で、開梱・書架入れは数日かけての作業となりました。用意周到に準備してきたとはいえ、2箇所資料をはじめ同じ書架に収めることになるため、想定通りに収まらないこともあり苦労しました。その後開館までは図書館システムの目録データの修正や運営資料の準備などに追われました。

9月には、財団・JTB関係者や賛助会員、図書館関係者などを対象に、「特別版たびとじよCafe」をセットにした3回の内覧会を開催し、10月3日

## 11 知的遺産を 受け継ぎ、 新たな役割を担う 専門図書館へ

図書館は社会の情報基盤として重要な役割を担っており、過去の先人の知にふれることのできる貴重資料は、将来にわたって受け継ぐべき知的遺産でもあります。

旅の図書館は、観光文化資料館として開設以来、時代社会の要請に応えながら図書館機能およびコレクションの充実に取り組んでまいりました。こうした過去の蓄積の上に、現在の図書館があります。

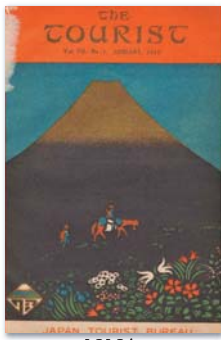
これからも、「観光文化の向上（振興）」という開設時の理念と旅行・観光に関する知的遺産を受け継ぎつつ、ますます情報が社会の基盤になる「情報社会」のなかで、「観光の研究・情報のプラットフォーム」としての役割を果たしうる専門図書館を目指して運営努力してまいります。

ジャパン・ツーリスト・ビューローの機関誌

# 「ツーリスト」

1913-1936

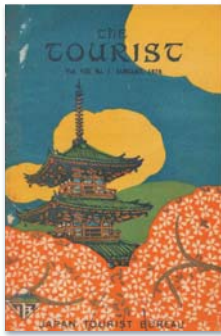
1913年の創刊から1932年まで、  
グラフィックデザイナー・杉浦非水が  
この美しい表紙を手がけた。  
杉浦非水は日本の商業デザインの礎を築いたひとり。  
1916年からはほぼ年一度、  
1月号から新しい表紙になっている。



1919年



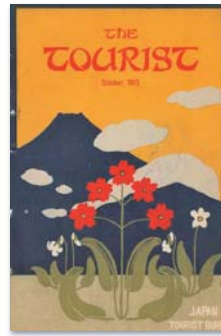
1919年



1920年



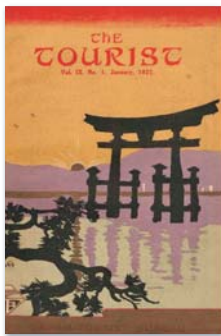
1920年



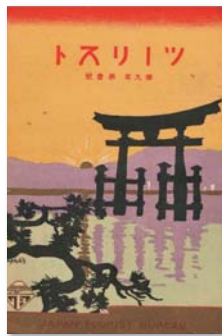
1913年



1913年



1921年



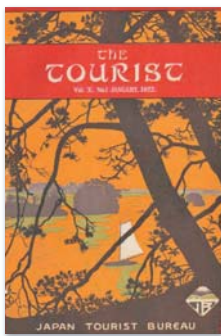
1921年



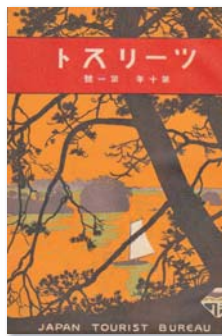
1916年



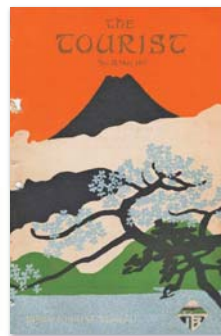
1916年



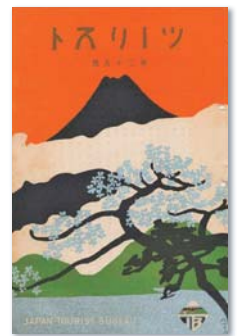
1922年



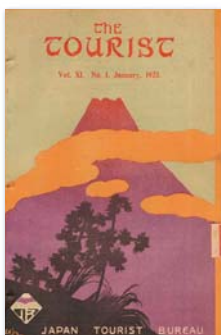
1922年



1917年



1917年



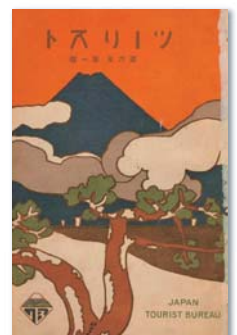
1923年



1923年



1918年



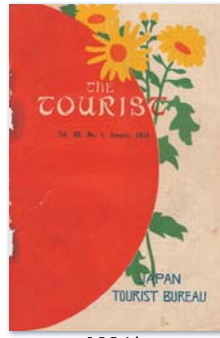
1918年



1929年



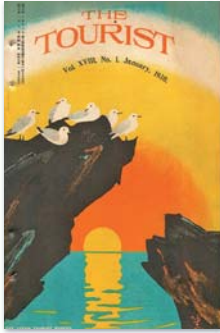
1929年



1924年



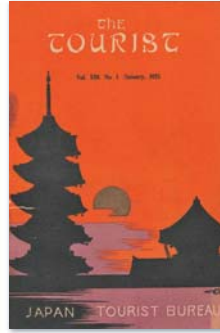
1924年



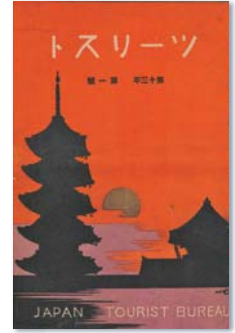
1930年



1930年



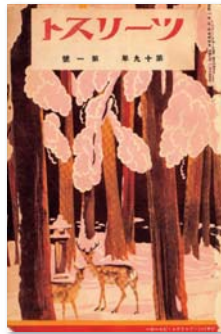
1925年



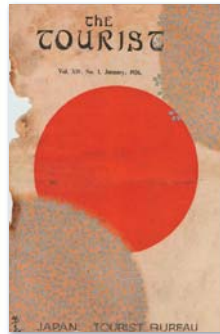
1925年



1931年



1931年



1926年



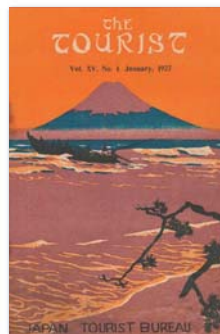
1926年



1931年-2



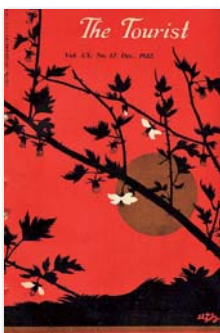
1931年-2



1927年



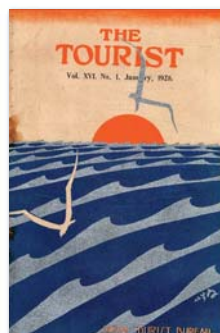
1927年



1932年



1932年



1928年



1928年

機関誌

# 観光文化

第239号

第42巻 4号 通巻 第239号



発行日

2018年10月16日

発行所

公益財団法人 日本交通公社

〒107-0062 東京都港区南青山二丁目7番29号 日本交通公社ビル

☎03-5770-8350

<https://www.jtb.or.jp>

編集室

☎03-5770-8364

(観光文化情報センター内)

[kankoubunka@jtb.or.jp](mailto:kankoubunka@jtb.or.jp)

編集人

有沢徹郎

発行人

末永安生

Art Direction & Design

川口繁治郎 (Rivers More)

制作・印刷

JTB印刷株式会社

禁無断転載

ISSN 0385-5554